

鹿島みろく 調査報告書

平成三十五年度 文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」

鹿島みろく 調査報告書

平成二十五年度文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」

鹿島みろく

[茨城県鹿嶋市]



大町のみろく（平成25年11月1日）



大町のみろく（平成25年11月1日）



角内のお酒盛り（平成25年11月1日）



角内のお酒盛り（平成25年11月1日）



仲町のお酒盛り（平成26年1月25日）



仲町のお酒盛り（平成26年1月25日）

大野のみろく

[茨城県水戸市]



大野のみろく（平成25年11月10日）



大野のみろく（平成25年11月24日）

すのさき
洲崎のミノコドリ
[千葉県館山市]



洲崎のミノコドリ（平成25年8月21日）



洲崎のミノコドリ（平成25年8月22日）

川口のミノコドリ

[千葉県南房総市]



川口のミノコドリ（平成26年1月19日）



川口のドウワタシ（平成26年1月19日）

おごうち
小河内の鹿島踊
〔東京都西多摩郡奥多摩町〕



小河内の鹿島踊「毬踊」（平成25年9月8日）



小河内の鹿島踊「三番叟」（平成5年9月15日 鹿島踊保存会提供）

※平成25年度調査時は三番叟が踊られなかったため、鹿島踊保存会より平成5年上演時の写真を提供いただいた。

よしはま
吉浜の鹿島踊
[神奈川県足柄下郡湯河原町]



吉浜の鹿島踊（平成25年8月1日）



吉浜の鹿島踊（平成25年8月1日）

ほっかわ
北川の鹿島踊
[静岡県賀茂郡東伊豆町]



北川の鹿島踊（平成25年10月26日）



北川の鹿島踊「浜の舞台」（平成22年10月27日 俵木悟撮影）

※平成25年度は台風により舞台が設営できなかったため、俵木悟氏が平成22年に撮影したものを使用した。

口絵写真…平成二十五年度に実施された現地調査において
(公社)全日本郷土芸能協会が撮影したものである。
但し註記のあるものは除く。

序

当調査報告書は、平成二十一年に文化庁から記録作成等の措置を講ずべきものとして選択された無形民俗文化財「鹿島みろく」について、公益社団法人全日本郷土芸能協会内に設置された当該調査報告書作成委員会が現地調査等を実施してとりまとめたものである。調査の対象は、茨城県の鹿島地方に所在する当該「鹿島みろく」伝承と、これと類縁関係にある茨城県、千葉県、埼玉県、東京都、神奈川県、静岡県等南関東域に所在する、みろく踊、鹿島踊などと称される伝承である。調査は、各伝承地の祭り行事日に実施されたものを現地に赴いて調査したもの十件、それ以外の日に伝承の現地を訪れて聞き取り調査したもの四件であった。これらの伝承は、先人研究者によって、地域住民が世の安寧、幸せを希求する日本人の心根と指摘されたみろくの世、その芸能的表現であり捨て置くことのできないものである。ところが今日のその伝承はきわめて危うくなっている。少子高齢化の進行など社会経済環境の急展開の中で、鹿島地方の「鹿島みろく」は風前の灯火となっており、その他の地の伝承とても多かれ少なかれ維持継承が困難な状況に当面している。今回の当記録作成事業は、ぎりぎりの瀬戸際での対応措置ではなかったかという印象である。

当報告書の構成は、各調査地の個別の実態報告と、それにさきがけての茨城県域、千葉県域、東京都・神奈川県・静岡県域三つの領域別の概観および総説とからなっている。

調査実施にあたっては、各伝承地の区長さん、保存会ほかの伝承組織の皆さん、伝承に精通しておられる故老や識者の方々、それに各自治体の教育委員会をはじめ各機関団体の皆様方には、ご多忙中にもかかわらず、積極的にご協力をいただきまことに有り難うございました。

鹿島みろく調査報告書作成委員会 委員長 星野 紘

例言

本書は、平成二十五年文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成の推進事業」によって実施した、平成二十一年に文化庁から記録作成等の措置を講ずべきものとして選択された無形民俗文化財「鹿島みろく」の調査報告書である。

茨城県鹿嶋市の鹿島神宮周辺で、太鼓を伴奏に鹿島信仰にかかわる歌を歌ったり、歌に合わせて踊ったりする「鹿島みろく」と称される民俗芸能の現地調査を実施して、その歴史や開催の形態、信仰等について、現在催行をされていないところも含めた詳細な記録を作成し、また、鹿島みろくの芸能について、所作・歌謡・楽器等を調査し記録を作成した。併せて、同種の民俗芸能の分布、地域的な広がりを視野に入れて記録を作成し、調査報告書としてまとめたものである。

事業の実施にあたり、公益社団法人全日本郷土芸能協会に「鹿島みろく」調査報告書作成委員会を設置し現地調査等を実施してとりまとめた。

本書は口絵、「鹿島みろく」および「鹿島みろく」関連芸能分布図、第一章「鹿島みろく」総説、第二章「鹿島みろく」現地調査報告、第三章「鹿島みろく」に関連した芸能の現地調査報告により構成される。

口絵 当該調査で現地調査をした芸能・行事を、カラー写真で紹介した。

「鹿島みろく」および「鹿島みろく」関連芸能分布図 当該調査報告書において、現地調査が実施された「鹿島みろく」の伝承地、および当該報告書内で言及された「鹿島みろく」と類縁関係にある芸能の現状と分布する地域を記した。

第一章「鹿島みろく」総説 茨城県域、千葉県域、東京都・神奈川県・静岡県域三つの領域別の概観、さらに総説を記述した。

第二章「鹿島みろく」現地調査報告、第三章「鹿島みろく」に関連した芸能の現地調査報告

● 第二章「鹿島みろく」調査一覧表 昭和四八年に『鹿島みろく』（鹿島文化研究会編 鹿島文化特集号一二 一九七三年）、並びに平成七・八年に嶋田氏による調査において報告された、茨城県鹿嶋市内の「鹿島みろく」の伝承状況を、茨城県立歴史館の天津忠男氏が一覧表にまとめたものを掲載した。

● 第二章「鹿島みろく」現地調査地図 茨城県鹿嶋市を示した地図上に、現地調査実施地を示した。

● 第二章、第三章現地調査報告 全体の記述の整合性をはかるため、掲載内容は次の九項目とし、さらに芸能・行事写真、関連資料等を紹介した。但し一部の項目を統合したり、項目名を変えたものもある。また、写真・図表は、

執筆者から提供されたもの、および作成委員会で挿入したものである。

① 項目の内容

見出しには現地調査を実施した芸能・行事の名称を記した。

一 名称 土地の一般的な通称（日常的に用いられている呼称）と研究者等の呼称が異なる場合、整理の都合上調査報告書作成委員会で定めた名称を用いた。また特記すべき別称がある場合は（ ）内に記した。

二 伝承地 現地調査の実施地を記した。なお、市町村名は合併等に伴う変更を取り入れた、平成二六年一月三十一日時点のものである。

三 期日・場所 平成二五年度調査が実施された期日と場所を示した。複数の開催期日、場所がある場合はそのまま示した。なお、開催期日・場所は主催者の事情により変更される場合がある。

四 伝承（運営）組織 芸能・行事の実施組織、並びに伝承を支える組織や経済を記した。

五 行事・芸能内容 平成二五年度調査時の（一）次第、（二）衣装・楽器・道具等、（三）演目・芸能を記した。

六 由来・信仰 言い伝えや文献、特殊用語とその解説を記した。

七 変遷 以前の様子と現在までの変容について記した。

八 所見

九 詞章 芸能・行事で歌われた詞章を掲載した。

② 表記の統一

・ 表記は現代かな遣い・送り仮名に従って原則的には統一した。

・ 本文中の難読語には適宜ふりがなを付した。

・ 数字は漢数字を用い、原則として「十」「百」「千」は使用しない。（例）明治一三年、一八カ所、一二五名、二〇時、一〇時四五分

・ 年号は元号とし、（ ）内に西暦年を示した。（例）明治一三年（一八八〇）

・ 距離や長さの単位記号は、センチメートル、キログラム等を使用した。

・ 芸能・行事の演目や役名等は原則として地域の慣用等の表記に従った。

・ 楽器や装束等は基本的に一般用語に従うが、執筆者の希望を優先した。

・ 主として民俗学の用語等で、項目によって漢字書き、ひらがな書き、カタカナ書き等の相違がある場合があるが、原則として執筆者や地域の慣用等の表記に従った。

■ 本報告書作成業務は、文化庁文化財部伝統文化課の指導のもとに、公益社団法人全日本郷土芸能協会が行った。

目次

口絵	1
序	9
例言	10
「鹿島みろく」および「鹿島みろく」関連芸能分布図	12

第一章 「鹿島みろく」総説

「鹿島みろく」総説	星野 紘	16
茨城県内「鹿島みろく」の歴史と現状	中村 茂子	23
千葉県のみろく踊り系芸能	俵木 悟	28
東京都・相模湾西海岸の鹿島踊概説	吉川 祐子	34

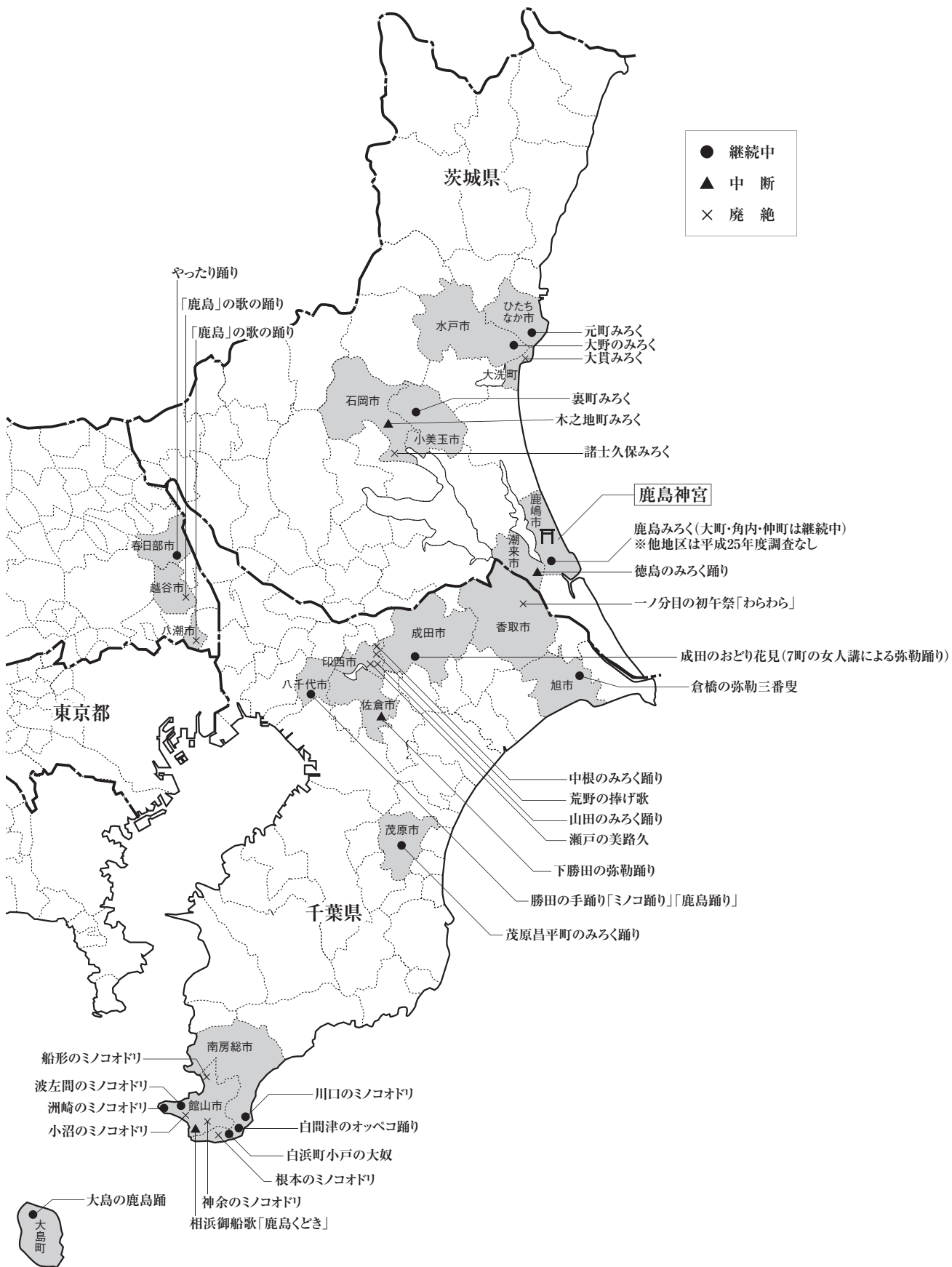
第二章 「鹿島みろく」現地調査報告

「鹿島みろく」調査一覧表	42
「鹿島みろく」現地調査地図	43
現地調査報告	
大町のみろく〈茨城県鹿嶋市〉	徳丸 亜木 44
角内のお酒盛り〈茨城県鹿嶋市〉	徳丸 亜木 52
仲町のお酒盛り〈茨城県鹿嶋市〉	徳丸 亜木 57
現在行われていない「鹿島みろく」行事	徳丸 亜木 63

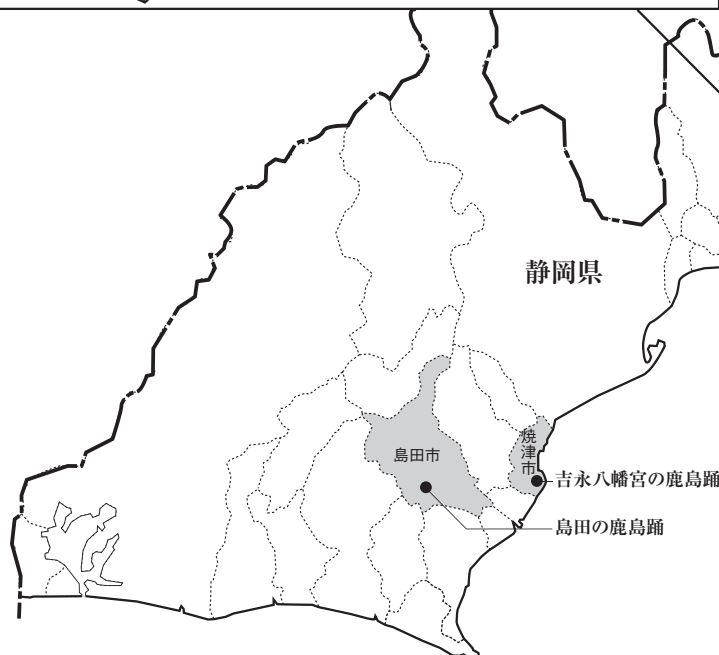
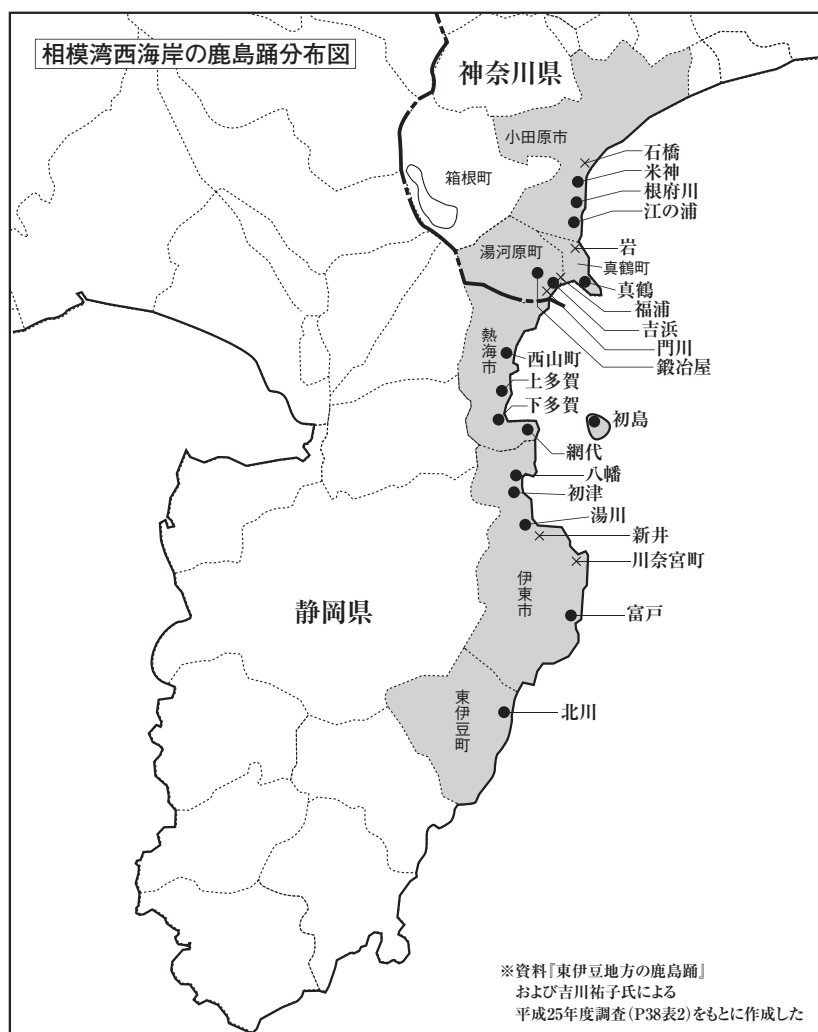
第三章 「鹿島みろく」に関連した芸能の現地調査報告

現地調査報告	
大野のみろく〈茨城県水戸市〉……………	中村 茂子 66

水戸市周辺地域都市形祭礼の「棒みろく」〔茨城県〕	中村 茂子	73
徳島のみろく踊り〔茨城県潮来市〕	俵木 悟	80
洲崎のミノコオドリ〔千葉県館山市〕	俵木 悟	86
川口のミノコオドリ〔千葉県南房総市〕	吉川 祐子	93
成田のおどり花見〔千葉県成田市〕	星野 紘	101
小河内の鹿島踊〔東京都西多摩郡奥多摩町〕	吉川 祐子	107
真鶴の鹿島踊〔神奈川県足柄下郡真鶴町〕	吉川 祐子	119
吉浜の鹿島踊〔神奈川県足柄下郡湯河原町〕	星野 紘	127
鍛冶屋の鹿島踊〔神奈川県足柄下郡湯河原町〕	吉川 祐子	134
北川の鹿島踊〔静岡県賀茂郡東伊豆町〕	星野 紘	140
「鹿島みろく」調査報告書作成委員会名簿、調査報告書作成委員会開催日、執筆者		150
現地調査実施日・調査員		150
協力・協力機関等		152



当報告書に記載されている「鹿島みろく」および「鹿島みろく」関連芸能分布図



第一章 「鹿島みろく」 総説

「鹿島みろく」総説

星野 紘

一 潮が引くような衰退ぶり

今回、鹿島神宮の信仰に関わりを持つ当神宮所在地の「鹿島みろく」（平成二十二年 文化庁より記録作成等の措置を講ずべきものとして選択された無形民俗文化財）をはじめ、それに関連する茨城県、千葉県、埼玉県、東京都、神奈川県、静岡県等関東南部のみろく踊、鹿島踊の類の調査を行った。

この間見聞できた伝承例からの印象は、総じて潮が引くみたいに衰退の道を行んでいるという現実であった。その状況は以下の各調査報告の頁に記載されているのだが、その二、三をかいつまんで紹介しておきたい。まずこれら伝承の発源地とされる茨城県の「鹿島みろく」の場合である。徳丸亜木氏の一文（本書六三頁）によれば、一九七三年時に三四カ所あったその伝承が、一九九五、六年の調査報告書には一九調査地のうち一一カ所での継続が確認され、その一八年後の今回は三カ所のみが確認されたというような激減状況を記していた。三カ所のうちの角内町すみうちの行事についての中村茂子女史の次のような報告（本書二五頁）からも、それが細々とした伝承と化していることが解る。

細々でも現在に継承した「お酒盛りさかも」を絶やさないためには、全員の高齢化が進みすぎた。近年の五年間に、一二人であった全員が相次いで三人亡くなり、現在も欠席中の一人は病氣療養中であるという。毎月一日の午前一〇時に集会所に集まり、お勤めを五分で済ませてお茶を飲み、お昼を食べて解散するのが習慣にな

っている。

この衰退要因として近年の鹿島の地の急激な開発、あるいはこの鹿島みろく踊が七〇代、八〇代といった高齢者女性によって執り行われて来たものであることなどが指摘されている。

他方、相模湾西海岸部の神奈川、静岡の両県にまたがるこれと類縁の鹿島踊の場合は、鹿島地方の場合とやや様子が異なっている。まずこれが若者、男性によって執り行われてきたものであること、芸能として手のこんだかたちに創られていることなどから、相対的に持続力を有しているように見える。当該調査報告書作成委員会の委員で、二〇一一年刊行の『東伊豆地方の鹿島踊』の調査報告書の作成を主導された吉川祐子女史は、この鹿島踊が伝承力の強さを感じさせる一方で、今日、安閑とはしていられない事態が押し寄せていることを指摘している。⁽¹⁾

筆者は、二五年前にも東伊豆地方の鹿島踊の総合調査を行い「相模湾西海岸の鹿島踊」を発表した。……（中略）……この二五年間に変化はあったか、それを知りたいと思っていた。……（中略）……難しい歌も以前と違わずうたわれていたし、踊りも力強かった。伝承力の強さを感じた。……（中略）……では、現在は彼等の努力の元、安泰の民俗芸能になっているのかというかと決してそうではない。戦後二度目の危機の時代を迎えている。それは若者の無関心と少子高齢化である。若者組解体後、若者が村の祭りに参加しなかったように、今も若者は村祭りには無関心である。

また千葉県内のみろく踊の分布状況を整理説明した俵木悟氏の一

文（本書二八―三三頁）に言及されているように、当地の伝承も衰退している。安房地方にはミノコオドリが今日三カ所伝承されているが、近年まではほかにも何ヶ所かに伝承されていたことを克明に報告している。また下総地方の状況について次のように記している。

オコトやオビシヤ、初午などの春祭に演じられるみろく踊りは、今では大半が廃絶しているものの、印旛沼周辺の村々で広く行われていたらしい。

なお、当地では花見と称する祝い歌（花見については後述）のやりとりが、オコトやオビシヤの場で進められる中でみろく踊りが伝承されて来た。これの執行運営組織である女人講（子安様などを信仰）などの紐帯の強弱が、この持続如何に関わっているのかと思われる。ちなみに当書に掲載の「成田のおどり花見」〔本書一〇一―一〇六頁〕の場合には、現在も、人々の信仰厚い成田不動尊の門前町のそれであるからであろう、これが確固として継続している。

二 今回つけくわえられた知見など

今回の調査を通じ、みろく踊、鹿島踊の伝承事例について、従来あまり知られていなかったような知見が、調査報告書作成委員会委員諸氏からいくつか寄せられた。これまでに他の箇所でも報告済みのものもあるが、かいつまんで二点ほどを紹介しておきたい。

ひとつは、茨城県内の「棒みろく」という棒の先に鹿島神とか春日神などのご神体の首を取り付けて、祭礼時の風流の出し物の一つとしてそれらを底無し屋台の中で遣ってみせるというもの。これについて中村茂子女史が当書に報告している（本書二五―二七頁）。

この伝承が現存しているのが三カ所、中絶中のものが一カ所、それに廃絶しているものが二カ所確認出来たという。現存の伝承のうち二カ所のものは三体の人形戯である。残りの一カ所と中断中の一カ所のものは六体の人形戯で、しかも後者は人形浄瑠璃用の首が転用されたものと見られるという。このような杖頭遣い人形様式のみろく芸能の存在は、従来あまり知られていなかった。鹿島みろくの各種芸能としての展開の幅広さを、この事例もまた示している。

ふたつ目は、かつて永田衡吉氏が、中国の天子拝礼の舞踊を想い描いたりしつつ貴重なものなりと言及していた、相模湾西海岸の鹿島踊にある方形になって踊る舞踊隊形（方舞^②）について、吉川祐子女史が、丹念に全伝承地のそれを確認した上で、この解釈に対して実証的なテーゼを提出してくれた点である。^③

その鹿島踊は、男ばかり二十数名の集団踊で、円形と列形（従来「方形」と表現されてきたが、横並びに同一方向を向いて並ぶため「列形」と判断する）の隊形を歌に合わせて繰り返す。……（中略）……総じていえばこれらは同じ芸能だが、神奈川県側は比較的移動形、静岡県側は固定形である。静岡県側も神奈川県に近い初島は移動形で、踊りに区切りがなく、踊りながら次の踊り場まで移動する。これは静岡県側では初島だけに残っているが、実際の踊りが列の隊形で終わる来宮神社や上多賀は、この行進の部分の名残をとどめているといえる。いっぽう固定形は、円形の踊りと列形の踊りを組み合わせて、隊形変化を楽しむ踊りとなっている。しかも、南へ行くほど列形の踊りに力が入り、向く方向を変えて美しく踊る。富戸と北川がそれで、崩れているが五方を向く。

もうひとつ、新たな知見というよりも、今後に検討課題が多く残されている難題について言及しておきたい。というのは、この難題が当報告書の標題である「鹿島みろく」の語義に関わっており、またみろく踊と鹿島踊とは一体どういう関係に有るのかという問題に関わっているのである。ここで参考までにそれがどういふ問題なのかを、従来の識者の見解を引用して紹介する。この方面の研究者として名高い宮田登氏のものである。⁽⁴⁾

それは、鹿島踊と称しながらも多くの歌を歌い踊っているその理由についてである。

現在、神奈川県足柄下郡、小田原市、静岡県賀茂郡、熱海市、田方郡、島田市、東京都西多摩郡小河内村（現奥多摩町）、茨城県・千葉県沿岸部一帯、右とほぼ類似した歌詞で踊る神事があり、そのほとんどが鹿島踊と呼ばれているのである。鹿島踊りといながら、ミロクを歌う。この両者の混融現象はある時点（近世中期ごろ）に鹿島地方におこったものと推察される。

それは、江戸中期頃に鹿島の事触れの関与があったことが、この混融現象の要因であると次のように記していた。⁽⁵⁾

結局事触れによる鹿島踊と里民が踊る弥勒踊とは、受け入れる側の心意から見れば同質の趣意であつて、これが地域社会に伝播、浸透する際には容易に混融し得たと考えられる。現在採集できる歌詞は鹿島踊といつても、弥勒踊の部分的混入とか全体的変化の度合いが、受容した地域社会で異なるため若干のズレができてしまっていることが否めないわけである。

右の説明から、「鹿島みろく」の語義の問題は、みろく踊（歌）と鹿島踊の混融状況があるので、呼称の上で両者を併記せざるを得ないということである。そして、その混融の理由説明が困難をきわめるものだというのである。なお、この混融状況の原因となった鹿島神宮からの関与については、当報告書の中で俵木悟氏が、千葉県館山市相浜の『諸色覚日記』に、明和年間に鹿島香取の禰宜・御師が訪れてみろく踊を踊ったという記事を紹介している（二九頁）。また吉川祐子女史は、俵木氏の調査資料をもとに、東京都の大島元町の吉谷神社の正月祭の鹿島踊の口上に「鹿島様から目出度いことがおんじやり申すわい」という文句のあることを記している（三五頁）。

三 祝い歌の視点から、至福の表現と住民の気遣い

茨城県の鹿島みろくのものに共通する歌詞の祝い歌が、千葉県、埼玉県、東京都、神奈川県方面に分布伝承されてきた。これについては従来、みろく踊、鹿島踊への民俗芸能的側面からの言及が多いのに比し、祝い歌の側面からの指摘はほとんど無かったといつてよい。しかしながら鹿島みろくのコレは、祈求された至福のイメージが、一般住民の日常生活の中でどんな役割を果たしてきたものかを知るには、これは格好の素材なのである。

まず南関東の祝い歌がみろく踊、鹿島踊のバックグラウンドとなつて確認しておきたい。『鹿島志』が物の祝などあるおり、または祈事する日などに弥勒踊が踊られると記していたことはつとに知られ、これは祝いの行事のものである。一九九四年刊行の調査報告書『茨城県の民俗芸能』にも、次のように出産祝いや新築祝いの席でもこれが行われたと報告している。⁽⁶⁾

また他の地域では鎮守の拝殿、当屋などがその場所とされる。七歳の紐解き祝いや、初産、初孫、新築祝いなどに該当屋に呼ばれて上演することもある。

また鹿島地方のひろく歌の一つ、「お茶の礼」は「これさま」の文句で始まるもので、この種の祝い歌が、「これさま」の呼称で埼玉県、神奈川県などの各地で多く歌われていた。またこれを「はつうせ」とか「花見」、さらに「五反田」「羽田節」などという別の呼び方をしている地もある。これらの祝い歌を民謡研究家の町田嘉章氏は、「日本民謡の詞曲形態から見た時代性と地域性」と題する論文⁽⁷⁾の中で、五七七調の歌として一括りにして説明していたように、音楽構造的にもこれらの全てが類歌なのだ。

次に鹿島みろくの歌をはじめとして、これらの祝い歌が表現している至福のイメージについて考えてみたい。一例として、茨城県と千葉県に接した埼玉県東南部での祝い歌の機会、結婚式の翌日の、近隣のご婦人たちを集めての花嫁披露の儀において、次のような嫁ほめの「これさま」の歌詞がある。

これさまのお嫁御さまは お花にたとえてみたなれば

牡丹芍薬百合の花 梅の小福が五葉の松

今日お祝いおめでたい⁽⁸⁾

また、

これさまの お嫁御さまの 髪^{かみ}の結い方見申せば 右の髪は福鬢で

左の髪は愛嬌鬢で 前なる前髪にこにこと 後なる鬢は丸鬢で

中なる鬢型縁結び 結び込んだが縁となる
さても今日おめでたい⁽⁹⁾

輝くばかりの花嫁の姿や髪型をほめたたえている。またそういう嫁の家には子供が生まれるが、その時の祝い歌を、千葉県の例で紹介する（ここでの祝い歌は「花見」と称される）。まず、オボヤキという、里方で子供を出産した嫁が、産褥期間を終えて嫁ぎ先にもどる時の掛け合い歌である。以下に記す甲と乙の別は、嫁の里方から嫁と生まれた子供とを嫁の嫁ぎ先に受け渡す時の歌が甲である。そして嫁ぎ先の家にて、それを引き取る時の歌が乙である。

【甲】 三七夜二十一日を、日立ち申した、孫殿の吉日を選び申して、
御渡し申すよ、両親様^{もろおや}

【乙】 春は花、秋は稲穂と待ちやかねたる御孫どの、

今日のお膳の上で、受け取り申す、

御孫殿受け取りて寵愛育て、此の家の家督と致します⁽¹⁰⁾

大変かしこまった形式の掛け合い歌である。先の婚姻の折りの嫁ほめといい、その嫁の出産した子供を玉を扱うようなやり取りといい、人間一生に一度の晴れの舞台、至福の時である。それを周囲の者たちが祝ってあげる歌である。

ところで「花見」とは、先述したように千葉県における同類の祝い歌の呼称である。この「花見」という語義のはじまりは一体何なのか、確定した説明は今のところなされてはいない。三隅治雄氏は、それは稲の花に喩えられると説明していた⁽¹¹⁾。

花見のハナは稲の花のことで、ハナミは稲の豊饒を予祝する意図の祭事にみられるが……

確かにこのような花を米に見立てる発想は、例えば相模湾西海岸の鹿島踊においてパフォーマンスの手として演じられている。それは次の歌詞にもなっている。当地の鹿島踊のどこの伝承地のものにも似かよった歌詞があるが、北川のを引用しておく。この歌詞のくだりにて、黄金柄杓持ち役がそれを上に持ち上げて振り、パラパラと切り紙の米を撒き散らすのである。いかにも鮮やかで効果的である。

天竺の 雲の間より 十三小女郎が米を蒔く
その米を何と蒔く 弥勒続けと米を蒔く

他方、各地のひろく歌の歌詞を見ると、この花は必ずしも米に限定されるものでもないと思える。例えば鹿嶋市沼尾の「おさかもり」の歌詞に次のような花の文句がある。

今日のおさかもりは。おぶすな様え御法楽。
皆いずれ揃い申して、花の遊さしあげて。
あれみろやむかえみろや。山で花がかがやく。
あの花お迎え申しておぶすな様えさしあげて。
あれみろや、山で花がかがやく。
あの花お迎え申しておぶすな様えたでばな。⁽¹²⁾

つまりこの場合は、山で咲く植物としての花を指しているようで

もある。ともあれある種のめでたさというか、至福のイメージが形成されているのである。これが「花見」という祝い歌の呼称の由来に関わっているのではあるまいか。そしてこの種の祝い歌の世界で、踊りの付くもの、それが「みろく踊」である。成田の「おどり花見」という呼称があり、また安房のミノコオドリの踊り歌の文句に「花見おどり」というのが入っているが、これらはそのことを示しているのではないかと思う。

黄金輝くようなとか、花を見るようなとか、こういった祝い歌にまみえる至福のイメージは、柳田國男が「海上の道」で言及していた、常世とか根の国といった理想世界に連なるものかもしれない。それが一般住民の日常生活の中でどのように意識され、機能しているものなのか、それを祝い歌の世界で描写してくれたのが木村重利氏である。⁽¹⁴⁾

埼玉県、神奈川県あたりでは、「これ様」の歌が前述のように「はつうせ」とも称されているが、その語義がどこに起源しているかについては、奈良県の初瀬寺に関わりがあっただろうという説もあったが、木村氏は、それが祝いの席で皮切りに歌われるものであるからではなかったかと説いた。⁽¹⁵⁾

「はつせ」なり「はつうせ」というのは「お祝いの歌」といった総体的意味に使われているようであり、それも単なる祝いの意味よりは、もう少し格式というか伝統に根ざしたものという意識があり、もっと、その謡われ方からすると、まず祝いの座敷で初に出す歌、この歌から祝いの歌酒盛りにするという意味も感じ取っているようである。

例えば、花嫁披露の宴では、まず仲人が初めにこれを歌うことがきまりとなっており、列席の他の一同は、その後でおもしろい嫁ほめの歌を出すのである。ともかく仲人の「はつうせ」の歌が出なければ事は始まらないのだ。そういう意味の「はつうせ」だというのである。そしてまたこの語は、至福の表現に対する住民の気遣いぶりをも象徴しているというのである。そのようにして、続いて他の列席者からの嫁ほめがあり、さらに酒や料理が出まわって歓談がはずみ、時刻が過ぎると、次のような「千秋楽」が歌われて座はお開きとなる。

これさまへ参り申して 奥のお座敷お座ならす
発つときは花を咲かせて 千秋楽と舞い納む⁽¹⁶⁾
さても納めでおめでたい

この「千秋楽」が歌われた以降は一切の歌は禁じられる。したがってこれを出す時のタイミングは慎重にはかれるのだという。お祝いの晴れの間とはこういった伝統的な格式があつて、人々はこれに従う。

もうひとつの人々の気遣いの場面は、歌を出す者が、祝いの場、タイミングを十分に心得て、いかにその場にふさわしい歌詞を歌うかが重要だという点である。それに人々は腐心したものだという。

また他の祝いの歌の文句を借用したりすることもごくふつうの事として行われたようだし実際の祝いの席では、先に謡った人と同じ文句は謡えないし、できればより気のきいた、一座の者が「なるほどまいことを謡うわい」と感心するような文句を出してあ

つといわせたいと思うのは人情である。従つて常日頃から一つでも多く文句を仕入れて、自分の唄本に記入しておこうとしたし、多少その種の才覚のある人は、即興で「めでたい文句」を謡出すということも行われたようだ。⁽¹⁷⁾

ところで、祝い歌を含む民謡の分野にも潮が引くような衰退現象は踊りの場合と同様に起こっている。例えば、神奈川県民謡のその状況について、一九八一年刊の『神奈川県民謡緊急調査報告書』には次のように記してある。⁽¹⁸⁾

今次の古民謡調査によつて、本県の民謡は、一部の娯楽唄・祝唄を除き、今後十年にして伝統を断つであろう。という天の警告を受けた。

唄手たちはみな、自分で実際に唄った人たちではなく、先代から、母から、近所の人から習った、間接継承者である上に、みな明治生まれの高齢者である。古民謡の前途知るべし、と言いたい。

埼玉県の状況もこの状況と大差がない。一九九九年に刊行された埼玉県民謡のビデオ記録⁽¹⁹⁾によれば、一九七八年に採集した花嫁披露の調査報告書をもとに、それを再現して撮影製作したと記されている。確かめてもないけれども、今や、先に紹介した人生の折り目の伝統的な祝い歌と人々の気遣いも、おおいに様変わりしているのである。婚姻儀礼は自宅では行わず、皆町場の結婚式場にて執り行うようになつてしまつた。嫁披露の席で祝い歌を歌い合つた習俗はもう潮を引いたように無くなつてしまつたのである。とはいへ、右に見たような一時代前までの人々の気遣いは、なんらかの別のか

たちで生き続けているだろうと思ひ込むしかなないのである。

埼玉県の祝いの歌の話に多く言及したが、同県にも「やつたり踊り」(春日部市)という、口上に「みろく踊云々」の文句の入る伝承があり、また越谷市や八潮市ではかつて「鹿島」の歌も踊られていた。⁽²⁰⁾

註

- (1) 静岡県教育委員会編 二〇一一『東伊豆地方の鹿島踊』静岡県教育委員会 三〇頁
- (2) 永田衡吉・神奈川県教育委員会編 一九六八『神奈川県民俗芸能誌』錦正社 四三三～四三四頁
- (3) 註1と同著二四頁
- (4) 宮田登 一九七七『ミロク信仰の研究 新訂版』未来社 三八～三九頁
- (5) 註4と同著四二～四三頁
- (6) 茨城県教育委員会編 一九九六『茨城県の民俗芸能——茨城県民俗芸能緊急調査報告書——』茨城県教育委員会 二四頁
- (7) 大間知篤三編 一九五九『復刻 日本民俗学大系 第一〇巻 口承文芸』平凡社所載
- (8) 埼玉県教育委員会編 一九八一『埼玉の民謡』埼玉県教育委員会 一五三頁
- (9) 註8と同著三六頁
- (10) 日本放送協会編 一九五三『日本民謡大観 関東編』日本放送出版協会 二二二頁
- (11) 千葉県教育委員会編 一九八一『千葉県民謡緊急調査報告書』千葉県教育委員会 一〇頁
- (12) 鹿島文化研究会 一九七三『鹿島みろく』鹿島文化研究会 一五頁
- (13) 柳田國男 一九六八『海上の道』『定本柳田國男集 第一巻』筑摩書房所載
- (14) 木村重利 一九八〇『近世歌謡・民謡の研究』桜楓社
- (15) 註14と同著一五一頁
- (16) 註8と同著三七頁
- (17) 註14と同著一五二～一五三頁
- (18) 神奈川県教育委員会編 一九八一『神奈川県民謡緊急調査報告書』神奈川県教育委員会 二三頁
- (19) 埼玉県教育委員会編 一九九九『ビデオ 埼玉の民謡』解説書 埼玉県教育委員会 六四頁
- (20) 註19と同著六三頁

茨城県内「鹿島みろく」の歴史と現状

中村茂子

はじめに

茨城県内に現在伝承されている鹿島みろくは、三種目に分類して考えることができる。一種目めは、鹿嶋市を中心に神栖市、潮来市などの周辺に分布し、年配女性による地域ごとの集団の行事で、通称「お酒盛り」と呼ばれている行事であり、その一端として踊られるのが「みろく踊」である。二種目めは、水戸市を中心としてその周辺地域であるひたちなか市、小美玉市などに伝承されている市街地形の祭礼神輿渡御に供奉する風流物の一種で、底無し屋台で舞われる杖頭人形である。底無し屋台で舞われるのは、通称「棒みろく」と呼ばれている。「棒みろく」は、かつて石岡市や大洗町の祭礼で神輿渡御にも供奉していたが、現在は中断、または廃絶状態にある。三種目めは、鹿島神宮に奉納されている「鹿島踊」で、三〇〇年ほど中断していたと伝えられ、他地域のものを参考にして近年創作されたものである。

一種目めと二種目めは、伝承地域に明確なちがいがあることから明らかに、その発生や伝播、伝承などにもちがいが認められる。年配女性の集団舞踊である「みろく踊」の発生について、その時期を推定するのは困難である。しかし、「棒みろく」は都市形祭礼の行列風流に登場したことに始まると推測される。また、通称「棒みろく」とセットで伝承されてきたことから、おおよその発生時期を推定することができる。二種類の伝播範囲は、「みろく踊」が利根川沿いに千葉県や埼玉県にも広く分布しているのに対して、「棒みろく」の分布は水戸市周辺に限られている。「みろく踊」の伝

承者は、年配女性たちの日常生活に密着した祝い事や願い事を表現してきた私的行事であるのに対して、「棒みろく」は、都市形祭礼行列に供奉する風流の一種で、若者を中心に組織された男性集団で、地域全体の共同責任で奉仕されてきた。

右のような「みろく踊」と「棒みろく」について発生、伝播、伝承、中断、廃絶と現状を記すことで、一般的に茨城県独自の芸能と認識されている「棒みろく」と、地域社会の高齢化が進んだことで、多くの伝承地で継承が困難になっている「みろく踊」について、この度の調査を通して理解できたことを中心に記してみたい。



鹿嶋市大町区の集会所でのお酒盛り
(平成25年11月1日 全日本郷土芸能協会撮影)



第14回下大野文化祭に出演した大野みろく
(平成25年11月24日 全日本郷土芸能協会撮影)

信仰行事の一端「みろく踊」

発生・伝播

茨城県を含む多くの地域に伝承がみられる風流踊りとしての「鹿島踊」は、江戸時代に活発な活動をしていた「鹿島事触」に影響を受け、庶民の中から「鹿島踊」がはじまった可能性が大きいといわれている。各地へ伝播していった時期も、多くの伝承地で明確にな

っていない。「鹿島踊」研究が最も進んでいるといわれている相模湾西海岸地域では、記録の上で江戸時代中期に、熱海市付近に「鹿島踊」が定着していたとい^(1,2)う。

茨城県内に残されている祭礼に使用された幔幕（かすみがうら市雪人）や、祭礼絵巻（『土浦御祭礼之図』）などにも「鹿島踊」が描かれているが、特に『土浦御祭礼之図』には、「鹿島踊」と関連がある部分が二カ所あり、その写真と解説の最後に、「今後、「鹿島事触」「鹿島踊」「弥勒踊」などの関連を含めて熟慮すべき貴重な資料である」と記されている。⁽³⁾さらに、同書には「みろく踊」の解説を記した見開きの前頁に、公文教育研究会蔵の北尾重政作「子供遊びの図」と溪斎英泉作「鹿島踊」という子供達が「鹿島踊」をまねて遊ぶ姿を描いた二枚の絵を掲載しており、次の頁に記された『鹿島志』下巻「弥勒踊の図」と子供の遊びを描いた二枚の絵が雰囲気的に酷似している。『鹿島志』には、よく知られた「弥勒踊の図」とともに、以下のような文章が添えられている。「古俗のならひに物の祝いなどあるをり、又祈事する日など、すべて時節を付けつ、老婆らおほく集まり、弥勒うたとて各々声を上げてうたひ、太鼓をうちて踊れり、手をふりつ、踊るさま、いとおかしく、中昔の風と見えたり」。⁽⁴⁾筆者は、子供たちが遊戯として「鹿島踊」や「みろく踊」をまねて遊ぶ前段階として、祖母や母の背中や傍らで、繰り返しこれらの踊りを経験をしていた可能性が大きいと考えている。

伝承の廃絶・中断・現状

鹿嶋市三四力所の「みろく踊」伝承

昭和四八年（一九七三）に行われた鹿島文化研究会の調査では、鹿嶋市内三四力所に「みろく踊」が存在し、その具体的な地名は、

大町、神野、須賀、大船津、沼尾、根三田、谷原、泉川、国末、長栖、木滝、下埞、佐田、栗生、鉢形、栗生浜、平井、下津、小宮作、明石、神向寺、清水新田・田谷・神領、猿田、山之上、田之辺、新田、爪木、下生、仲町、桜町、角内、新町、清水、厨である⁽⁵⁾（図表四二頁参照）。『茨城県の民俗芸能——茨城県民俗芸能緊急調査報告書——』が刊行された平成八年（一九九六）当時、三四力所中の何カ所に「みろく踊」が伝承されていたかについて、同書には明らかにされていない。しかし、当時すでに多くの地域で廃絶、中断状態にあったと推測される。行事が行われる時期は、毎月一日・一日（すべての地域に共通）、他に「薬師様（二二日）」「一夜様（二二日）」「三夜様（二三日）」「六夜様（二六日）」などにも行われ、場所は地区内の神々を順番に廻った。伝承地によっては鎮守様の拝殿、当屋、個人的なお祝いである新築祝いなどにも招かれた。⁽⁶⁾

次に鹿嶋市内の「みろく踊」と潮来市の伝承を平成八年の調査を資料として記してみよう。⁽⁷⁾

鹿嶋市栗生の伝承

通称「お酒盛り」、毎月一日・一五日と氏神鹿島神社祭礼などに実施している。鹿島神社拝殿に集まり、灯明を灯して円陣になり、最初に「お酒盛り」を唱えるが、この場合踊りはつかない。次に円陣のまま、その場で立ちあがり「お鹿島」を唱えながら踊る。一般的に「お酒盛り」は、「念仏講」と重なって考えられるが、別グループの場合が多く、「お酒盛り」は「念仏講」より年齢が低い人々の集まりである。混同する理由は「今日」「みろく」「めでた」「お鹿島」などのみろく歌を、念仏講と共有しているためであるという。

潮来市徳島の伝承

毎年旧暦正月・五月・九月は、一日・一五日、他の月は一五日だ

けが「お酒盛り」の日となっている。当番区の婦人たちが役割分担して準備を進め、当番区を含めた徳島全体の氏子中、六〇歳から七〇歳までの婦人たちが約四〇人が水神様を祀り、その神前で行う。伝承曲は「今日」「道しば」「あれ見ろや」「十よ七」「囃子」「高砂」「千秋楽」の七曲であるが、その詞の中に「みろく」という詞は存在しない。「鹿島」という詞が「十よ七」の中に二カ所が見られるだけである。対する「おぶすなさま」という詞は七曲中五曲の中に見られる。当地の「お酒盛り」は「みろくおどり」というよりは、年配の婦人たちが「おぶすなさま（水神・鹿島）」に地域の安泰と幸せを祈願する行事といえよう。行事の形式からみて、鹿島の「みろくおどり」を手本に、徳島にふさわしい行事として派生させた伝承といえる。

現行鹿嶋市角内の伝承

平成二五年一月一日に角内区の集会所で行われた「お酒盛り」の調査を実施した。この日、集会所に集まって「お酒盛り」に参加していたのは、宮本良子会長（平成一一年から）を含む八人で、いずれも七〇才代〜九〇才代の女性たちであり、会員は九人だが一人欠席していた。唱えたのは、①「上げ酒盛」（二分）、②「めでた」（一分）、③「これさま」（一分）の順番で、三曲とも一本調子の同じ節を五分で唱え終わった。曲に合わせて踊っていた時代（何年までか不明）には、それぞれの曲に違った節がついていたという。昭和二〇年代までは、「村祈禱」と称して、六〇戸ほどの各戸めぐりをして唱えごとをし、最後に愛宕様の前で唱えた。集会所で行うようになる以前までは、御神様・愛宕様・鹿島様へそれぞれ唱えごとをしていた。

細々でも現在に継承した「お酒盛り」を絶やさないためには、全

員の高齢化が進みすぎた。

近年の五年間に、一二人であった会員が相次いで三人亡くなり、現在も欠席中の一人は病氣療養中であるという。毎月一日の午前一〇時に集会所へ集まり、お勤めを五分で済ませてお茶を飲み、お昼を食べて解散するのが習慣になっている。八人全員が、このように省略された行事になってしま

ったが、次の月の一日が待ち遠しいという。特にこの日は、長らく欠席していた一人が、ようやく出席できるようになり、感謝の気持ちを込めて八人分の昼食をホテルに注文したとのことで、私どもが集会所を辞する前には配達されていた。このような「お酒盛り」の現状を知ること、この行事を継続することが会員の生き甲斐になっていることを実感した。

祭祀行列の風流「棒みろく」（通称）

発生

茨城県独自の芸能として知られている「棒みろく」の発生について、現在明確な記録が存在するわけではない。しかし、現在伝承中の一カ所である水戸市「大野のみろく」は、「大串のささら」とともに、大串稲荷神社の宝永五年（一七〇八）に始まったという水戸への「出社祭祀」に供奉することで、昭和十一年（一九三六）まで



鹿嶋市角内区の集会所で行われているお酒盛り
（平成25年11月1日 全日本郷土芸能協会撮影）

その伝承を保ってきた⁽⁸⁾。また、もう一カ所の伝承であるひたちなか市の「元町みろく」は、「六丁目の獅子」とともに天満宮祭礼行列に供奉してきた⁽⁹⁾。延宝七年（一六七九）の記録が残されているという水戸市「向町のささら」の伝承から推測して、「大野のみろく」が「大串のささら」とともに、「出社祭礼」当初から行列に供奉していた可能性は大きい。現在も水戸市元山町の別雷皇大神祭礼に奉納されている水戸市向町の「棒ささら」は、延宝七年（一六七九）の水戸東照宮祭礼神幸行列に「獅子ささら」として参加していた記録があり「河野 二〇〇五」、芸態から見て「棒ささら」は、ささらと呼ばれている人が踊る三匹獅子舞を、祭礼行列に適合するようにアレンジした可能性があるという⁽¹⁰⁾。

江戸時代中期以後も、盛大に行われていた水戸東照宮祭礼行列には、多くの場合、水戸大薩摩座の座元である大薩摩縫殿左衛門が奉仕していたと考えられ、『新編常陸国誌』の栗田栗隠「事跡雑纂」にも記されている⁽¹¹⁾。ここに記された大薩摩縫殿左衛門は、単なる飾り人形の囃子屋台ばかりでなく、底無し屋台であったと推測される踊り屋台も担当している。江戸を引き払った水戸大薩摩座は、元和七年（一六二一）正月に、水戸下町に土地を与えられて人形浄瑠璃の興行を始めた⁽¹²⁾と伝えられ、享保年間（一七一六―一七三六）の頃に最盛期を迎えた。大薩摩縫殿左衛門の祭礼行列供奉は、江戸の祭礼風流で知られていた底無し屋台の踊子に代わって、ささらを杖頭人形の「棒ささら」にかえて舞わせる考案はあり得ることであり、対の風流として「棒みろく」を加えるのに、時間はかからなかったと推測してみた。

現行・中断と廃絶

現行の「棒みろく」は、水戸市「大野のみろく」、ひたちなか市「元

町みろく」、小美玉市「裏町みろく」の三カ所であるが、実際に祭礼行列に加わっているのは「元町みろく」と「裏町みろく」の二カ所だけである。「大野のみろく」は、昭和四一年（一九六六）に「大串のささら」とともに茨城県の無形民俗文化財に指定され、さらに昭和四八年には文化庁の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択された。しかし、長年奉仕してきた大串稲荷神社の「出社祭礼」が、昭和一一年を最後に行われなくなった。以後、祭礼行列に参加することはなくなり、現在は県内を中心とした各種のイベントなどに、平成になってから始めた後継者育成の目的で指導している多数の小学生とともに参加している（詳細は別稿六六頁参照）。

「元町みろく」は、「六丁目の獅子（棒ささら）」とともに昭和五年（一九八〇）に市の無形民俗文化財に指定され、ひたちなか市中央の天満宮例年祭（八月三・四日）に神輿の浜降り行列に供奉している（詳細は別稿七三頁参照）。

「裏町みろく」は、上記二カ所の「棒みろく」が三体ずつ（大野が向かって左から、春日（黄頭）・香取（赤頭）・鹿島（青頭）、元町では向って左から鹿島（赤）・春日（青）・住吉（白））であるのに対して、青・黄・赤・白・黒の五体に加えて天冠をつけた姫の六体である。六体のみろくは、小学校が夏休みに入った週の土・日に行われている竹原神社祇園祭の神輿渡御に、「上町ささら」とともに供奉し、特に芸能としての演技は行われていない。大正四年（一九一五）の『裏町守護尊彌勒由来小史』によると、六体の頭はもと竹原神社に祀られていたもので、竹原神社祇園祭に際して神輿渡御に供奉する裏町の「棒みろく」として転用したものという。明治一五年（一八八二）頃から中断し、大正四年に復活したが、昭和三四

年から六一年（一九五九～八六）まで再度中断した。この間に演技のほとんどを失ってしまったという。筆者は六体の頭を拝見したが、先に記した二カ所に伝承されている三体で構成される「棒みろく」とは全く別ものである。この印象から、祭の奉納芸であった人形浄瑠璃の頭が竹原神社に保管され、それらが六体の「棒みろく」として転用されたものと推測してみた。

中断は、石岡市総社宮祭礼に木之地町の会所に展示されている六体のみろく人形である。明和年間（一七六四～一七七二）の町年寄御用留断簡「ぎおん御祭礼之次第」に、「五番 みろく 木之地」と記されているが、嘉永五年（一八五二）以後、記録が途絶えている。木之地町では昭和九年（一九三四）に、「裏町みろく」の人形と屋台を借りて復活を試みたが、現在会所展示されている六体のみろく人形は、昭和九年の復活に使用したものを参考に、この時奉仕した加藤要之助氏が、平成二年（一九九〇）に復元したものであるという（櫻井 一九九七）による俵木 二〇〇六）。毎年の祭礼に人形を会所に展示し、手本である「裏町みろく」が現行である状況から、復活の可能性があると考えてみた。

廃絶は、石岡市三村の須賀神社祭礼（祇園祭）に、かつて「吹上のささら」とともに「諸士久保みろく」が供奉していた。このみろくについての詳細は不明で、地域の人々の記憶では三体であったとも六体か七体であったともいう（俵木 二〇〇六）。また、大洗磯前神社の八朔祭（旧八月一日～三日）には、かつて各町内から屋台が出されていた時代に「棒みろく」の供奉もあったことを伝えている。

註

- (1) 茨城県立歴史館編 二〇〇四 特別展図録『鹿島信仰——常陸から発信された文化——』茨城県立歴史館
- (2) 茨城県立歴史館編 二〇〇八 学術調査報告書Ⅷ『鹿島信仰の諸相』茨城県立歴史館
- (3) 註(2)に同じ。
- (4) 註(2)に同じ。
- (5) 茨城県教育委員会編 一九九六『茨城県の民俗芸能——茨城県民俗芸能緊急調査報告書——』茨城県教育委員会
- (6)・(7) 註(5)に同じ。
- (8) 常澄村史誌編さん委員会編 一九八九『常澄村史』通史編 常澄村
- (9) 秋山高志・水庭久尚 一九八五『茨城の人形芝居』崙書房出版
- (10) 俵木悟 二〇〇六『「その他」の鹿島踊』『芸能の科学』33 独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所『芸能の科学』編集委員会
- (11)・(12) 註(9)に同じ。
- (13) 俵木悟氏提供による。

千葉県のみろく踊り系芸能

俵木 悟

千葉県内には、みろく踊りを名のる芸能、もしくはその類例（鹿島踊りを含む）と考えられる芸能が広く伝承されているが、その特徴として芸能様式のバリエーションの豊かさが指摘できる。茨城県鹿島地方の鹿島みろくや相模湾西岸地方の鹿島踊りが、共通した様式をもつ事例が濃密に一定の地域に分布するのに対し、千葉県内のみろく踊り系芸能の全体的な特徴を述べるのは難しい。分布としては、下総と安房に多く上総には少ない。その中から共通する特徴によつて、とりあえず①下総の印旛沼周辺でオビシヤやオコトなどの春祭に歌い踊られる一群と、②安房の沿岸部で子どもたちがオンベと呼ばれる長柄の幣を採り物として踊るミノコオドリと呼ばれる一群の二つの類型が見いだせる。しかし同類型内での芸能の偏差は大きく、また同地域の伝承例の中にも、大きく異なる特徴をもつ事例が散見されるなど、これらを一定の系譜関係において把握することは困難である。このような前提の上で、千葉県内のみろく踊りの伝承例を概観する。

安房のミノコオドリ

館山市・南房総市の沿岸部に点在するミノコオドリは、みろく踊り系の民俗芸能の典型の一つとして知られている。現存するのは、館山市洲崎、波左間、南房総市千倉町川口の三カ所である。

そのうち最も知られたものは、館山市洲崎の洲崎踊り（現地では今もミノコオドリと呼ぶ）であろう。洲崎神社の八月二〇～二二日

の夏の例祭と、二月初午の祭りに奉納される。

波左間のミノコオドリは、

館山市波左間の諏訪神社の六月三〇～七月二日の夏の例祭（現在はそれに近い週末）に奉納される。かつては二月初午にも踊られたが、いまは夏の祭礼に稲荷社にも合わせて奉納することでこれに代えている。小学生を中心とした女



波左間のミノコオドリ

児が、浴衣姿で左にオンベを担ぎ、右手に扇を持って円になって踊る。オンベは青竹二本を半紙で巻いて軸とし、色紙の幣紙と柗の枝を付けたものを用いる。曲は「カシマ」「ツクバ山」「カノシマ」「十七」「ヨーコーノ（ヨーコー）」という五曲を伝えている。このうち「十七」の踊りはオンベの軸を閉じた扇で叩きながら回り、「ヨーコーノ」ではオンベは使わず、中央に向かって扇を使って踊る。特に「ヨーコーノ」は歌の節も他の曲と大きく異なり、その曲名や歌詞の特徴から、近世の流行歌であるイヨコノ節が取り入れられた形跡がうかがえる。波左間では、ミノコオドリが神輿とともに区内各所を巡って踊る。現在は区内の組を単位として踊りを奉納するが、かつては区長等の区役員、氏子総代、そして地域の漁業権を掌握するハマヤクの家などを回るものであった。

南房総市千倉町川口のミノコオドリ（カシマオドリ、メノコオドリとも）は鹿嶋神社の夏の祭礼（七月の千倉の夏祭り前日）と一月一九日のオビシヤに奉納される。ただし旧千倉町の合同祭に合わせ

て夏祭に演じられるようになる以前は、一〇月一九日の鹿嶋神社の例祭日、あるいは旧暦六月七日（ナンカビ）の天王さまの祭りに奉納するものだったと伝えられる。踊りは女兒が演じるものだが、少子化から現在は成人女性も多く参加する。女性のオビシャ行事との結びつきは後述する下総のみろく踊りとも共通し、また異彩を放つ前口上は、浄瑠璃など近世都市風俗との関係を示唆している。

かつて伝承されていたミノコオドリ

安房一帯には他にもミノコオドリが伝えられていたこと判明している地区がある。

館山市小沼には、平成元年（一九八九）頃までミノコオドリが伝わっていた。小沼の諏訪神社の夏の例祭は七月二六―二八日で、神社から出て区役員宅・弁天さま・水神さま・お寺などを踊って回った。

やはり女兒の踊りで、浴衣を着て、竹の軸に五色の幣紙と榊の枝を付けたオンベと扇を使って踊った。特徴として、踊りの中心にナカダチという年長の女子二名が入り、そのうち一名が太鼓を叩いたという。

南房総市白浜町根本の三嶋神社の旧暦六月一四―一六日の祭礼にもミノコオドリが奉納されていた。ヨイマチには小学校の校庭で、ホンマチには神社で、スギマチには浜の港でそれぞれミノコオドリを踊った。踊り手は主に小学生の女兒で、揃いの浴衣にシタダレという白い上衣を着て、手にはオンベと扇を持つ。踊りの輪の中で年配女性が歌と太鼓で音頭を取った。歌は伝わっていないが、他のミノコオドリと共通する口上が記憶されていた。昭和三〇年（一九五五）頃に踊りは途絶したという。

これらは近年まで伝承されていた例だが、館山市相浜の名主嘉右衛門が宝暦二二年（一七六三）から安永二年（一七七三）まで書き

残した『諸色覚日記』には、明和年間に鹿島香取の禰宜・御師と称するものが度々訪れてみろく踊りを踊り、また汐祭という臨時祭や鎮守香取明神の正月祭に子供たちがみろく踊りを踊ったことが記されている（児玉・川村編 一九七二）。両者が同時代にともに存在していた事実は重要である。近年まで相浜神社の曳舟祭りに「鹿島くどき」という御船歌が歌われており、その歌詞はみろく踊り歌とも共通する。館山市船形の諏訪神社祭礼でも、明治時代には浜三町のお船のミヨセ（舳先）で子どもがミノコオドリを踊ったという（佐藤 二〇〇一・八〇）。

総じて安房のミノコオドリは、子ども、とくに女兒の踊りであり、オンベという採り物や歌の共通性によって類型化が可能である。また神輿の先払いを務める例が多いのも一つの特徴といえよう。

安房のミノコオドリの類例

このように、近世中期にすでに存在したみろく踊りが現在に伝えられたのが安房のミノコオドリと考えられるが、その展開過程では他の芸能に取り込まれたり習合したりして、大きく姿を変えて伝えられたと考えられるものもある。

館山市神余の日吉神社の祭礼には、現在はかつこ舞が奉納されるが、かつてはシデボーとミノコオドリがともに奉納されていた（池田編 一九六九・二〇九）。かつこ舞とミノコオドリの共演は、かつてフリヨーなどと呼ばれたこの地域の雨乞いの祭礼に、村ごとに様々な芸能を持ち寄って奉納したことを想起させる。館山市西岬地区でかつこ舞を伝える見物や浜田では、かつては近隣のミノコオドリと互いに招待する／される関係があったと伝えられている。

南房総市千倉町白間津の日枝神社の祭礼は、現在は四年に一度の

オオマチとして知られているが、このオオマチや正月の春祈禱の際にみろく踊りが演じられていたという報告がある。現在のオオマチの始終樂に幣束を持って踊るオッペコ踊りはみろく踊りを彷彿させるが、これはかつて踊っていたミノコオドリの歌を変更したものだという指摘もある

〔松田 一九六三・四五〕。

南房総市白浜町小戸の稲荷



南房総市小戸の初午祭の「大奴」

神社の初午祭りは、獅子芝居や漫才など多くの奉納芸能が演じられる。その演目の一つ「大奴」は、三番叟烏帽子をかぶり、日の丸の扇と烏の描かれた長柄の万度をもった少年が踊るもので、みろく踊り（鹿島踊り）が舞台芸化したものと見ることが可能だろう〔田村 二〇〇四〕。

上総のみろく踊り

上総にはみろく踊り系の芸能の伝承例は少なく、このことが、千葉県内のこの種の芸能の系譜関係を考えるうえでの大きな障壁になっている。唯一知られているのは茂原市茂原昌平町のみろく踊りである。毎年一月八日の稲荷神社のオビシヤの祭礼に演じられ、「チヨコロコマンネン」「めのかみり」とも呼ばれる。午前中のお水かけ行事に続いて、午後のみろく踊りが稲荷神社から出て町内を踊り巡る。踊り手は成年男性で、烏帽子に白張姿であるが採り物は持たない。歌い手と神官（氏子の役）の口上のかけ合いが続けて、一列

に並んだ踊り手が「めでめでめでたい／おおきにめでたい」と歌いながら、両手を上げて跳ねるように前進する素朴な踊りである。しかし稲荷神社には明治四二年（一九〇九）の書とされる踊り歌の詞章が残されており、その内容はみろく踊り系の歌であることが明らかである。

下総のみろく踊り

下総では、みろく踊りと呼ばれる踊りが印旛沼周辺地域を中心に伝承されていた。ただし多くが廃絶して久しく、その実態を掴むことは難しい。

古く知られたものは、小寺融吉の紹介した印西市荒野の雷公神社の捧げ歌〔小寺 一九七四・二〇三〕、よく似た歌は印西市瀬戸の宗像神社の奉納絵馬にも「美路久」として書かれている〔千葉県教育委員会編 一九七〇・二〇二〕。両者は男性が「みろく」を歌うのに対して女性が「花見」を歌うことでも共通する。



茂原市茂原昌平町のみろく踊り



印西市瀬戸宗像神社の奉納絵馬のみろく踊り（部分）

荒野の捧げ歌は一〇月の例祭に奉納されたというが、瀬戸の「美路久」は、印旛沼周辺の村々で四月下旬頃に広く行われたオコトという春の農耕祈願祭に演じられた。

下総のみろく踊りとして最も知られたものが、四月三日に行われる成田のおどり花見である。新勝寺の門前町である旧成田村の七ヶ町の女人講が年番で務め、三ノ宮壇生神社から出て各町内に祀られている一六の神仏に踊りを奉納して回る。その最後に必ず踊られるのがみろく踊りである〔成田市教育委員会編 一九八〇〕。踊りの名称である「花見」とは必ずしも桜花を愛でる意味ではなく、前述の印旛沼周辺の「みろく」が「花見」とともに歌われることなど通じる、祝いの行事あるいは祝い歌の名であって、「花見おこと」という言葉もあるようにやはり春祭の踊りである。

成田のおどり花見と瀬戸のオコトのみろく踊りは、男性と女性の違いはあるものの、歌詞の特徴や行事の性格から同一の類型と考えられる。オコトやオビシャ、初午などの春祭に演じられるみろく踊りは、今では大半が廃絶しているものの、印旛沼周辺の村々で広く行われていたらしい。中には講や当番などの祭祀組織が形成され、その受け渡しが行事の次第の中心となる例もあり、鹿島みろくや潮来のみろく踊りに通じることがうかがえる。

三匹獅子舞とみろく踊り

印西市中根の鳥見神社では、瀬戸と同様、春の播種祭（オコト）にみろく踊りが奉納されていた。鳥見のみろく踊りの特徴は、獅子舞（いわゆる三匹獅子舞）とあわせて演じられることである。印西市山田の宗像神社のオコトにも獅子舞が演じられたが、舞の後に述べられるユイダチ（言立）の中に「神を諫める弥勒舞い」後に弥

勒が続いた」という文句がある〔印旛村史編さん委員会編 一九九〇・八三三〕。鹿島にほど近い香取市一ノ分目の境宮神社の初午祭でも、三匹獅子舞とともに、夜の老婆連のおつとめの中で、「わらわら」という弥勒歌を含む歌が歌われていた〔片野 一九六一〕。

三匹獅子舞とともに演じられるみろく踊りは、春祭のものだけではない。八千代市勝田の駒形神社では、九月一日の例祭に獅子舞が奉納される。八千代市周辺には三匹獅子舞が多いが、勝田では獅子舞と並んでミノコオドリが奉納される。祭の担い手である大同団員が、揃いの半被の襟元に小さな御幣を差して円になり、櫛を担いだ神主役の口上に続いて、「手踊り（鹿島踊）」と「ミノコ踊り」の二曲を踊る。その歌詞はやはりみろく踊り歌に通じる〔八千代市郷土歴史研究会編 一九九一〕。佐倉市下勝田の天満神社の七月一五日の夏祭にも、三匹獅子舞の曲間に「弥勒踊り」が演じられる。太夫の口上に続いて一六名の踊り手が面をつけて滑稽に踊るというが、平成一七年（二〇〇五）を最後に中断した。

風流の趣向としてのみろく踊り

このように下総のみろく踊りの特徴として、春祭に演じられること、三匹獅子舞と組み合わせて演じられることなどが確認できた。ここであらためて安房のミノコオドリとの異同を考えてみることも可能だろう。安房でもミノコオドリはかつこ舞と重なって分布し、同時に演じられることも多かった。また今では夏祭の芸能という印象が強いミノコオドリも、現存する三例はそれぞれオビシャや初午などの春祭にも演じられるものでもあった。しかし両者に伝播の関係を思いだそうとすると、上総の空白をどう埋めるかという課題が生じる。さらに基層の共通性を認めたとしても、踊り手が女性か男

性か、子どもか成人かという演者の違い、採り物（オンベ）を持つか手踊りかという芸態の違い、踊りにともなう歌の構成の違い、豊作祈願か雨乞いか、あるいは疫病除けかといった目的の違いなど、様々な違いがどう形成されたのかを等閑に付すことはできない。

あえて仮説的に言うならば、この多様な存在形態こそが千葉県のみろく踊りの特徴付けていると言えないだろうか。相模湾西岸の鹿島踊りが若者の組織に担われた泰平祈願の神踊りとして、また鹿島みろくが弥勒菩薩への信仰を教化する弥勒講などの講式の法悦から出た念仏系の踊りとして説かれることと対比すると、千葉県のみろく踊り系の芸能の多くを特徴付けるのは、行事や祭礼を華やかに楽しく彩る趣向として、何代もの改変を加えられて伝えられてきた風流の芸能という性格に求められるのではないか（俵木 二〇〇四）。

他の県内の事例との共通性は少ないが、はつきりと祭礼風流の性格を示しているみろく踊り系芸能の一例として、旭市倉橋地区で伝

承している弥勒三番叟がある。

弥勒三番叟は、同市見広の雷神社の神幸行列の露払いを務めるもので、雷神社の神幸は、東庄町の東大社、香取市の豊玉姫神社とともに、銚子市外川浦まで渡御する二〇年に一度の銚子大神幸祭を構成するものとして知られている。剣先烏帽子に白張、紺袴の衣裳で、左手に紅白紙の幣束、右手に金銀両面の扇を持



旭市倉橋の弥勒三番叟

つ。一般的な三番叟の口上に続いて、本歌が三番あるが、このうち一番の詞章はみろく踊りの歌に通じる。なお、埼玉県の万作踊りの中には「弥勒三番」と呼ばれる演目を持つ例があり、その歌詞は倉橋の弥勒三番叟と非常に似たものである。

このように見てくると、そもそも千葉県のみろく踊りの特徴を一元的に求める必然性などはないことが理解されよう。印旛沼周辺のみろく踊りの一群は、県境を越えた鹿島みろくが土地ごとの祭りや先行の芸能に接合・改変されて定着した例と理解するのが自然だろうし、安房のミノコドリ一群は、同地域に分布するかつこ舞や神楽芸など異種の芸能との類縁関係を抜きには語れない。このように一筋縄では説明できないハイブリッドな性格にこそ、千葉県のみろく踊りの特徴があると筆者は考えている。

参考文献

- ・池田和弘編 一九六九『神余百年史』千葉県館山市立神余小学校・中学校PTA
- ・片野清次郎（口述）一九六一「境宮神社考（三）——老婆連のおつとめ——」『房総文化』四
- ・児玉幸多・川村優編 一九七二「諸色覚日記」『近世農政史料集』三 旗本領名主日記 吉川弘文館
- ・小寺融吉 一九七四『郷土民謡舞踊辞典』名著刊行会
- ・佐藤輝夫 二〇〇一「思ひ出の記」『館山と文化財』三四
- ・田村勇 二〇〇四「南房総のミノコドリ」『房総の祭りと芸能——南房総のフィールドから——』大河書房
- ・千葉県教育委員会編 一九七〇『印旛沼・手賀沼周辺の民俗』千葉県教育委員会

- ・成田市教育委員会編 一九八〇『成田のおどり花見』成田市
- ・俵木悟 二〇〇四「ミノコオドリの系譜——鹿島踊・弥勒踊の源像から距離をおいて——」『芸能の科学』三二
- ・松田章 一九六一「弥勒踊と鹿島踊」『房総文化』四
- ・松田章 一九六三「白間津祭」『房総文化』六
- ・松田章 一九七二「房総の弥勒踊」『千葉県の歴史』二二
- ・印旛村史編さん委員会編 一九九〇『印旛村史 通史Ⅱ』印旛村

- ・みのこ踊り映像記録作成委員会編 二〇〇九『DVD「安房のみのこ踊り」解説書』千葉県伝統文化伝承事業実行委員会
- ・八千代市郷土歴史研究会編 一九九一『史談八千代』一六（特集・勝田の獅子舞）

表1 千葉県のみろく踊り系芸能一覧 (★は廃絶 ▲は中断中の地区)

所在地	神社名	祭礼日	祭礼・行事	みろく踊り系芸能の名称
館山市★船形	諏訪神社	7月第4土曜・日曜日	諏訪神社例大祭(船形祭礼)	ミノコオドリ(浜三町のお船)
波左間	諏訪神社	7月1日に近い土曜・日曜日	諏訪神社例祭	ミノコオドリ
洲崎	洲崎神社	8月20・22日、2月初午	洲崎神社例祭	ミノコオドリ、洲崎踊り
★小沼	諏訪神社	7月26・28日	諏訪神社例祭	ミノコオドリ
▲相浜	相浜神社(波除神社)	3月28日直前の土曜日	曳舟祭り	御船歌「鹿島くどき」
★神余	日吉神社	7月19・20日	日吉神社例祭	ミノコオドリ
南房総市★白浜町根本	三嶋神社	旧6月15日	初午祭	大奴
白浜町白浜(小戸地区)	稲荷神社	3月1日に近い土曜・日曜日(3年に1度開催)	オオマチ	オッペコ踊り(トヒイライ)
千倉町白間津	日枝神社	7月第4金曜・日曜日(4年に1度開催)	オビシヤ(1月、鹿嶋神社例祭(7月))	セノコイ(勢之声)、ミノコオドリ
千倉町川口	鹿嶋神社	1月19日、7月第2金曜日	オビシヤ	みろく踊り
茂原市茂原昌平町	稲荷神社	1月8日	勝田の獅子舞	手踊り「鹿島踊り」「みのこ踊り」
八千代市勝田	駒形神社・円福寺	9月第1日曜日	天神様の祭り【獅子舞】	弥勒踊り
佐倉市▲下勝田	天満神社	7月15日	おどり花見	弥勒踊り
成田市成田(旧成田村七ヶ町)	宗像神社	4月3日	春祭(オコト)	みろく踊り
印西市★山田	宗像神社	春	【獅子舞】	美路久(奉納絵馬あり)
★瀬戸	雷公神社	4月下旬	春祭(オコト)	捧げ歌
★荒野	雷公神社	10月	播種祭(オコト)【獅子舞】	みろく踊り
★中根	鳥見神社	4月下旬	初午祭【獅子舞】・おつとめ	わらわら
香取市★一ノ分目	境宮神社	3月初午	銚子大神幸祭	弥勒三番叟
旭市倉橋	雷神社(旭市見広)	4月(20年に1度)		

(作表…俵木悟)

東京都・相模湾西海岸の鹿島踊概説

吉川祐子

一 東京都の鹿島踊

(一) 小河内の鹿島踊

多彩な伝承芸能を伝える村

旧西多摩郡小河内村は、小河内ダムに沈んで今はない。小河内ダムの建設で犠牲になったのは、この小河内村の大部分と山梨県北都留郡丹波山村、そして小菅村の一部で、総戸数六四九戸、およそ四〇〇〇人だった。ダム建設の計画が発表されたのは昭和六年（一九三一）、戦争を挟んで昭和二六年に解村式を行い、小河内村の歴史は閉じられた。その後、昭和三〇年に、沈まなかった小河内村の一部と氷川町、古里村が合併して現在の奥多摩町が発足した。

奥多摩町は民俗芸能の宝庫で、とくに「さら獅子舞」が多く分布する。これは町内二一地区のうち一四地区にあり、旧小河内村には原・河内（現坂本）・川野に伝えられていた。そして「小河内の鹿島踊」があり、中止している「小留浦の神楽」がある。ほかには川野に車人形、留浦にはヨイサカ踊、原の農村歌舞伎、河内には写し絵（影絵）があった（『奥多摩町誌』民俗編）。

保存伝承活動

「小河内の鹿島踊」を伝えてきた地区は水没し、人々は水没しない村内に転居したり、村外の新天地に転出した。村に残った人々は鹿島踊の伝承活動を開始し、同時に村外に出た人々も保存伝承活動に取り組んだ。双方は別々に活動していた時期もあったが、昭和四五年（一九七〇）には保存会が統合して今日に至っている。村の住民は年齢を重ねて後継者もなくなり、現在の保存会員は村外の人々

ばかりである。その保存会員で、年に三度のふるさとでの踊りと保存会としての活動をする。しかし、今や会員の大半はふるさとのはずの「村」を知らない世代である。

なお、坂本（旧河内集落の人々が移転した）の「さら獅子舞」も「小河内の鹿島踊」と同様に残留者と移転者により伝承活動を続けてきたが、現在は活動が止まっている。

獅子舞の伝承

鹿島踊の詳細は第三章「小河内の鹿島踊」にゆずり、ここでは町内に伝承されてきたほかの芸能を検討したい。

まず、小留浦（旧氷川村）の獅子舞をとりあげる。当地の獅子舞は、小留浦の村木氏が獅子舞祖家山崎角太夫から天明元年（一七八二）に伝授を受けたという獅子舞である。村木氏はこれを近隣にも広め、この地方の獅子舞のひとつの元祖だといわれている。獅子舞は、八月二九日（現八月第四日曜日）の山祇神社祭礼に奉納するが、同時に集落内の秋葉神社や鹿島神社など七社にも奉納してきた。なお、旧小河内村原の獅子舞はこの系統である（『奥多摩町誌』民俗編）。その原の獅子舞は、温泉神社の六月一五日の祇園会に奉納されていたが、後に祭日は九月一五日にうつった。

境（旧氷川村）の白鬚神社にも獅子舞がある。この獅子舞は鹿島から師匠を招いて伝授を受けたと伝わる。これを示す伝授書には寛文元年（一六一一）伝授とあり、小留浦より古い獅子舞を主張している。伝授書は『日本獅子舞の来由』と題するもので、この地方の獅子舞には欠かせない獅子舞伝授の正当性を示す巻物である。川井（旧古里村）の八雲神社（旧牛頭天王社）の獅子舞も文狭流角助派を名のり、同じ系統からの伝授を主張する。

境の獅子舞は「鹿島からの伝授」を示すように「花がかり」や「太

刀がかり」の曲では、「鹿島から習え習えと文がきて 習いうかべた鹿島きりぶし」の歌をうたう。鹿島はこの地域の人々には聞き慣れない言葉ではなかった。しかも小留浦には鹿島神社もあり、鹿島との強いつながりを感じる。

いっぽう、小留浦には神楽（花神楽ともいう）もある。『小河内貯水池郷土小誌』に、「神楽は小留浦でやるが、小留浦では氏神をまつらず河内の金御岳神社を鎮守としている。そこで、二月八日の祭礼と六月一五日の祇園会に神楽を奏してきたというのだが、いつのまにやらなくなった」とあり、『奥多摩町誌』民俗編には、金御岳神社での奉納は明治以前で、明治以降は小留浦の太子堂の廻舞台や民家でやるとある。

舞台の奥に獅子頭を安置した神輿風の小宮を置き、ツケ（拍子木）、大太鼓と小太鼓、笛が並ぶと始まる。この神楽は太神楽系である。演目は、三番叟・四本剣・鳥さし・万才（柱立）・稲荷以下二三番で、三番叟は猿田彦の舞ともいい、鳥兜・天狗面・狩衣・袴・白足袋の猿田彦の衣装で舞う。もうひとり太刀持ちも出る。

三番叟の役目は四方堅めで、太刀と鈴を持って舞台を巡る。踊り始めには、下座（囃子方）が「千秋万歳のちはくの玉をささげん」とうたう。三番叟の役目は「小河内の鹿島踊」と同様だが、小河内より丁寧である。両者には何らかの影響関係があるといえよう。

盛んな祇園会

かつて、小河内村では六月一五日の祇園会が盛んだった。どの神社も一斉に祇園会をし、そこで「ささら獅子舞」「小河内の鹿島踊」「小留浦の神楽」が演じられた。それぞれに疫神鎮送の役割があるのはいうまでもない。当地にこれほどまでに疫神鎮送が必要だったのはなぜだろうか。その詳細はわからないが、村内にあったという

御霊社の存在が気にかかる。当社は八所御霊をまつる御霊社で、村人の御霊をまつるのではなく京都の御霊をまつっているのである。

このあたりに謎が潜んでいるように思われるが、確認は困難である。村の歴史の解明はむずかしい。祭りに戻ろう。同時祭礼では、村人がほかの芸能を見に行くことはできない。鹿島踊も文化財になって知られるようになったという。だが、芸能間には少しずつ接触を思わせる部分があり、専門の芸能者か民間宗教者が過去に関与した形跡が認められる。

(二) 大島の鹿島踊

東京都には大島にも鹿島踊がある。元町の吉谷神社の正月祭を締めくくる踊りとして伝わっている。その元町は平成二五年（二〇一三）一〇月一六日の台風二六号により甚大な被害を受けた。この度は未調査である。そこで、「伊豆大島吉谷神社正月祭の芸能」（『民俗芸能』90）と俵木氏の調査資料をもとに簡単に記述する。

当地の鹿島踊は若い衆二十数名が着流しで輪になって踊る。首に小さな幣束をさし、採り物はない。輪の中心にはオンベといわれる採り物を担いだ一人がいる。オンベは鉾の左右に幣束（オンベ）二本をつけ、その下に小さな万燈をつけたものである。このオンベ持ちは扇を持ち、踊りのリーダーとなる。

まず口上である。オンベ持ちと踊り手は向かい合って並ぶ。オンベ持ちが「氏子どもこーまいれまいれ 鹿島様から目出度いことがおんじやり申すわい」と述べると、若い衆が「何ジャーイ」と答える。次に「浜で鯖 かつおがまくり上ると云ふ おんでたによって 早々急いで みろく踊をつっぱじめろつっぱじめろ」とオンベ持ち、若い衆が「よかるうよい」と答えて踊りが始まる。このあと全員



大島の鹿島踊のオンベ
(いずれも俵木悟氏撮影)



大島の鹿島踊

が手踊りをする。手踊りの歌は輪の外にいる地謡がうたい、踊り手が後をつけて踊りながらうたう。オンベ持ちはこの輪の中で同じ振りで踊る。この口上を読み取ると、どうやらミロク踊はこの手踊りをさしている。鹿島様をまつり、目出度いミロク踊を始めるのである。これは小河内の鹿島踊とも共通する。

この芸能に通底する要素は、鹿島様をまつりミロク踊を踊ることにある。そのミロク踊の芸態や歌はさまざまで一定しない。ミロク踊は自由な踊りであり、鹿島様と強い関係にある踊りなのである。

二 相模湾西海岸の鹿島踊

分布

相模湾西海岸の鹿島踊は、神奈川県小田原市南部から静岡県東伊豆町北部までの三市三町に分布している。すなわち、神奈川県小田原市石橋★・同米神・同根府川・同江之浦、真鶴町岩★・同真鶴、湯河原町福浦★・同吉浜・同鍛冶屋・同門川★、静岡県熱海市西山町・同初島・同上多賀・同下多賀・同網代、伊東市宇佐美八幡・同宇佐美初津・同湯川・同新井★・同川奈★・同富戸、そして東伊豆町北川である。しかし、★印の地区では途絶えているか休止中で、実際に続いているのは一六地区である。ところが、『東伊豆地方の

鹿島踊』によると文献上は伊東市宇佐美留田・同市松原、東伊豆町白田でも伝承されていたことが判明している。ただし、これは人々の記憶にはない。

分布の最南端は東伊豆町北川の鹿嶋神社だが、この鹿嶋神社が鹿島踊と特別な関わりがあったとは伝えていない。

若い衆の責任

鹿島踊は村の若い衆組、のちに青年団になった村の青年組織によって受け継がれてきた。海岸の村の若い衆の組織は強固で規律正しく、今日いわれる社会教育の場でもあった。この若い衆組の特徴は宿での寝泊まりにある。村所有の建物に寝泊まりして上下関係の厳しい規律を覚え、村運営の秩序を学ぶ。そして、この秩序のもと村の氏神の祭りを取り仕切るのである。その役割は年齢階梯で分担される。しかも、村にいくつ民俗芸能があろうと、鹿島踊はトップ集団の役割と決まっていた。将来、村を切り盛りする層の役目として鹿島踊はあったのである。つまり、村の伝承芸能としては最も古いということになる。

芸態の特徴

鹿島踊は、男ばかり二十数名(定数がない伝承地もある)の集団踊りで、円形と列形(従来「方形」と表現されてきたが、横並びに全員が同一方向を向いて並ぶため「列形」と判断する)の隊形を歌に合わせて繰り返し返す踊りである。一六地区は、おおよそ同一の芸態といつてよい。

しかし、地域性はある。隊形の変化を見ると移動形と固定形に大別できる。すなわち、神奈川県側は移動形、静岡県側は固定形である。静岡県側も神奈川県に近い初島は移動形で、踊りの最後は踊りを止めず踊りながら次の踊り場に移動する。この形は静岡県では初

島だけだが、実際の踊りが列の隊形で終わる上多賀以北は、移動形の名残をとどめるといえる。いっぽう固定形は踊りの最後が円形になり、踊りを止めて終わる。

いずれにしても、集団踊にアレンジし、隊形変化まで考案したのは、若い衆組織がある当地に定着させるための手段だったにちがいない、これを企画制作した人物がいたはずである。だが、そういった人物の名は伝わらない。

歌は初句をうたう「歌上げ」と、踊り手との掛け合いでうたわれる。音楽は小太鼓と鉦で、上多賀以南は鉦を用いない。踊り手は基本として幣束と扇（もしくは団扇）の採り物を持ち、特別なものとして黄金柄杓とオカガミなどといわれる採り物を持つ。

真鶴では、初島の鹿島踊が古態だろうと伝える。確証はない。その初島は伊豆山と関わりが深い。初島には娘が伊豆山に向けて毎晩通ったという「たらい舟伝説」があり、初木神社の初木姫が伊豆山の日精と月精の乳母だという伝説もある。初木神社の宮司は今も伊豆山神社がつとめ、伊豆山との縁は深い。そのうえ、西山町の来宮神社も伊豆山の関係神社で、『走湯山縁起』（平安末期成立）の時代から『伊豆山略縁起』（文化一二年（一八一四））の時代まで、記録上も一貫して伊豆山の地主の神であった。明治維新までは伊豆山の一部だったのである。その伊豆山の信仰圏は静岡県側より神奈川県側にある。縁起では伊豆山の神は真鶴からあがっている。しかし、現在の伊豆山の集落には鹿島踊は伝わっていない。

鹿島踊と弥勒踊

踊りの始めに口上がある。「千早ふる神々のいさめなれば ミロク踊めでたし」である。この地方ではこの芸能を「鹿島踊」と呼ぶが「ミロク踊」とは呼ばない。しかし、「ただ今からミロク踊を踊

ります」と宣言するのである。

『鹿島志』の挿絵に弥勒踊の図がある。女性数名が手を振り足を上げ、大変元気に踊っている。踊りながら太鼓を打つ者もいる。この姿を若い衆に変えると、あたかも伊豆方面の鹿島踊である。説明によると「祝いなどあるときに老婆が集まって弥勒歌をうたい、太鼓を打って踊る」とあり、祝いに踊る踊りがミロク踊だとある。たしかに相模湾西海岸地域でも「ミロク踊めでたし」とうたい、歌の内容も『鹿島志』掲載のミロク歌とほぼ共通している。

いっぽうで、『鹿島志』には鹿島躍の記録もある。『世事談』を引用して「寛永の始めに疫病があり、鹿島の神輿を出して疫悪退散を祈ると疫病がやんだ。そこで踊ったので鹿島躍という」と説明する。すると、疫病を退散させる力が鹿島の神にあり、それを喜んで踊ったのが鹿島踊だとなる。真鶴では、鹿島踊の目的は「五穀豊穰、悪疫退散、大漁・海上安全祈願」だと伝えている。「相模湾西海岸の鹿島踊」のすべてで鹿島踊だといってミロク踊を踊る。「一 東京都の鹿島踊」でふれたように、この芸能に通底する要素はここでも成り立つ。

天王信仰と鹿島踊

鹿島踊の悪疫退散説は、鹿島踊が天王信仰と密着していることでさらに強固になる。鹿島踊は氏神の祭礼で踊られるのだが、氏神だけでなく地区でまつる天王さんでも踊る。また氏神が天王さんである場合もある。真鶴でも天王さんでの踊りは欠かせない。日常生活においても悪疫退散は身近な祈願である。

この地方の鹿島踊は最初の伝承地（不明）に外から持ち込まれた芸能で、そこから近隣に広がったとみられる。持ち込んだのは民間宗教者か専門の芸能者にちがいない。その彼らは天王信仰を奉じて

表2 相模湾西海岸の鹿島踊一覧 (★は廃絶および休止地区)

所在地	項目	神社名	祭礼日	人数	隊形名		隊形変化 (神は神前の方向 ○は円形、□は列形 矢印は向き)	役持ちの採り物 (数字がないものは各1)	歌上げ	楽器
					円	列				
東伊豆町 北川	鹿嶋神社	一〇月二六〜二七日	25	マ踊り	サ踊り	神 ○ □→ ○ □↓ ○ □← ○↑	シャク・お鏡(太陽・月)	2人	1据	×
富戸	三島神社	一〇月二八〜二九日	25	モウ踊り	サ踊り	神 ○ □↑ ○ □↓ ○ □→ ○← ○	黄金柄杓・お鏡(太陽・月)	3人	1据	×
★川奈宮町	津島神社	七月一三〜一四日	25	名称不明	サオ	神 ○ □ ○ □	シャアコ・日・月	多数	1	2
★新井	新井神社	一月七日	18	名称なし	列形なし	神 ○	なし	多数	×	×
湯川	鹿島神社	一〇月一四〜一五日	15	マル踊り	サ踊り	神 ○ □↑ ○ □↑ ○ □↑ ○	シャアコ・太陽・月	上記兼	×	×
初津	春日神社	一〇月一四〜一五日	15	名称なし	サ踊り	神 ○ □↑ ○ □↓ ○	柄杓・太陽・月	上記兼	3	×
伊東市 八幡	八幡神社	一〇月第二土・日	16	ワ踊り	サ踊り	神 ○ □↑ ○	柄杓・日・月	上記兼	2	×
網代	阿治古神社	七月一九〜二〇日	25	マ踊り	名称不明	神 ○ □↑ ○ □→ ○ □← ○	お鏡(太陽・月)	多数	1据	×
下多賀	下多賀神社	(近い土・日曜日) 一〇月一八〜一九日	定数無	モ踊り	サ踊り	神 ○ □↑ ○ □↓ ○ □→ ○ □→ ○(○) □↓	お鏡(太陽・月)	2人	1据	×
上多賀	多賀神社	七月二八〜二九日	30	マ踊り	サ踊り	神 ○ □(○) □↑ □(○) □→ □(○) □↓	柄杓2・お鏡(太陽・月)	多数	1据	×
初島	初木神社	七月一七〜一八日	25	マル踊り	シカク踊り	神 ○ □↑ ○ □↓	シャアコのみ	2人	1	2
熱海市 西山町	来宮神社	七月二六日	25	マワリ踊り	サオ	神 ○ □↑ ○ □↑	柄杓・お鏡(太陽・月)	多数	1	2
★門川	八幡神社	八月一日	25	マワリ踊り	シカク踊り	神 ○ □↑ ○	柄杓のみ	2人	1	2
鍛冶屋	五郎神社	四月第土・日曜日	25	マワリ踊り	カク踊り	神 ○ □↑ ○ □↓	黄金柄杓・三日月	2人	1	2
吉浜	素鷲神社	八月一日	25	名称なし	サク	神 ○ □↓ ○ □↓	黄金柄杓・日月・タタラ	中踊り	1	2
湯河原町★福浦	子之神社	八月一日	定数無	マワリ踊り	サ踊り	神 ○ □↑ ○ □↑	柄杓2のみ	2人	1	2
真鶴	貴船神社	七月二七〜二八日	定数無	マル踊り	サオ	神 ○ □↓ ○ □↓	黄金柄杓・ヒガタ・ツキガタ	多数	1	2
真鶴町 ★岩	児子神社	七月第二日曜	定数無	マワリ踊り	名称不明	神 ○ □↑ ○	黄金柄杓・お天道さん・お月さん	3人	1	2
江の浦	大美和神社	七月第三土・日曜日	定数無	名称不明	名称不明	神 ○ □↑ ○ □↑	黄金柄杓・軍配2	多数	1	2
根府川	寺山神社	七月第三日曜日	定数無	名称不明	名称不明	神 ○ □↓ ○ □↓	黄金柄杓・オタマ・スリコギ	多数	1	2
米神	八幡神社	五月第四土曜日	定数無	名称不明	名称不明	神 ○ □↑ ○ □↑	柄杓・鏡・デクノボウ	多数	2	2
小田原市★石橋	子の神社	九月一五日	不明	名称不明	名称不明	不明	黄金柄杓のみ	○	1	2

(資料『東伊豆地方の鹿島踊』および吉川調査 作表…吉川祐子)

いた。鹿島踊伝承地に濃厚なのは鹿島社より天王社なのである。

伊豆方面鹿島踊の歴史

伊豆の鹿島踊は一八世紀前半には定着していた。熱海市網代の享保七年（一七二二）の祭礼記録に「鹿島警護」とある。残念ながらその内容は不明である。

ところで、鹿島踊は鹿島の事触れによる芸能だといわれてきた。たしかに、静岡県側は事触れに似て白張に烏帽子を被り幣束と扇を持って踊る。しかし、神奈川県側は浴衣と団扇というラフなスタイルで踊る地区が多い。いつごろから事触れスタイルになったのであるか。文政二年（一八一九）の『旅まくら夢中記』の木宮明神（熱海市西山町 来宮神社）祭礼の図を見ると、通常着の上に白張を着て烏帽子を被って踊っている。鉦・太鼓役は白張も着ていない。ところが、『熱海日記』（慶応元年（一八六五））の挿絵では白一色の衣装になっている。この挿絵に作為がなければ、静岡県側の白張の定着は一九世紀前半だったことになる。

『鹿島志』（文政六（一八二三））に、「古には卜部の家はたくさんあり卜法をしたが今は絶えてない。事触れと称して年の吉凶を触れ歩くのは偽物である。鹿島の関係者ではなく賤しい者に過ぎない」とある。もうとつくに存在しないはずの事触れが、一九世紀になっても闊歩していたことが読み取れる。一九世紀は、偽事触れが随所に出没し、鹿島踊の衣装の固定化に手を貸していた時代なのかもしれない。すると、事触れと鹿島踊とを作為的に結んだことになる。

いずれにしても、網代の記録により、『鹿島志』より一〇〇年前には鹿島踊はこの海岸線の祭りに取り入れられていたことが判明する。記録の確認はここまでである。

鹿島踊と生業

第三章「真鶴の鹿島踊」で真鶴の祭礼を詳述したが、当地の祭礼は盛大な船渡御で有名である。この形式の祭りは神奈川県では真鶴が唯一だが、静岡県では伊東市留田、新井、川奈で行われてきた。平成まで続いてきたのは新井だけだが、新井も現在は休止中で、したがって静岡県側は皆無ということになる。

船渡御を取り入れるには船が停泊できる地形が必要で、しかも規模が大きくなるだけに、氏子の経済力も人手も必要で小さな村ではできない。そこで小さな村や港のない村では海上渡御と称して神輿を海に入れる。海に入れない地形の場合でも、御飯屋を浜に設置して神輿の渡御が行われる。鹿島踊は海から幸せをもたらす神がやってくるとうたう。そのためにこの演出は欠かせないのである。

さて、船渡御の祭りはいつから始まったのであろうか。これについての決定的な資料はないが、真鶴では石材関係者が経済力を持った元禄以降だろうと推定している。この鹿島踊が伝承されている地域は、石の切出し搬出で有名な地域で、海の仕事は漁業だけでなく石材運搬の海運業が江戸時代に隆盛を極め、村の経済を高めた村々である。その経済力で祭りの風流は成長し、腕力を誇示する重い花^{はな}山車や万燈^{まんどう}運びのパフォーマンスが発達した。

しかし、すべての石の産地に鹿島踊が伝承されているわけではない。鹿島踊の分布より石材分布地の方がはるかに広い。石材関係の仕事が隆盛を極める以前から、鹿島踊はこの海岸線に定着していたのである。

鹿島踊の伝承者は若い衆組に属す漁民である。漁村といえど小舟で出先の海で漁をすると思われがちだが、本格的な漁ではかなり遠いところまで出向いている。艀漕ぎの時代でも大島まで出た。反対

に房総から来ることもあった。

『静岡県水産誌』によると、「明和の初めに房州からサンマを獲りに来たが、地元では毒魚だといって獲らなかった。しかし、これが有益な魚だと知って安房国から来た漁師から漁法を聞き出した。安房では漁法は極秘で、これを教えることは裏切り行為にあたり村に帰ることができない。そこで、又四郎と名を変えて稲取に住まわせた。明和七年（一七七〇）のことだ。その子孫は五代目になるが、稲取の重要な漁業となったサンマ漁はこの又四郎の功績による」とある。このほか小田原の漁師からキンメ漁を、横須賀市長井の漁師からムツ漁を習ったともいう（『稲取のハンマアサマ』）。

漁民は船で移動する。房総半島も横須賀もすぐそこにある。昭和になると房総半島の漁船に乗りに行くという若い衆もいた。親戚があるという伊豆の住民もいる。運搬船のような大型船の乗組員は必ずしも船主の村の住民ではない。これは江戸の昔からそうだった。船乗りの交流は昔から広域なのである。鹿島踊の伝承も陸^{おか}からの伝承のほか、海からの伝承にも目を向ける必要がある。

参考文献

- ・静岡県漁業組合取締所編 一八九四『静岡県水産誌 全』静岡県漁業組合取締所
- ・東京市役所編 一九三八『小河内貯水池郷土小誌』東京市役所
- ・鹿島踊保存会 一九七九『国指定 重要無形民俗文化財 鹿島踊』
- ・奥多摩町誌編纂委員会 一九八五『奥多摩町誌』民俗編 奥多摩町
- ・吉川祐子 一九八八『相模湾西海岸の鹿島踊』『静岡県史研究』四
- ・俵木悟 二〇〇四『ミノコオドリの系譜——鹿島踊・弥勒踊の原

像から距離をおいて——』『芸能の科学』31 東京文化財研究所

- ・俵木悟 二〇〇六『その他の』鹿島踊——祭礼行列に出る鹿島踊・弥勒踊を中心に——』『芸能の科学』33 東京文化財研究所

・俵木悟 二〇〇九『伊豆大島吉谷神社正月祭の芸能』『民俗芸能』90

- ・静岡県教育委員会編 二〇〇九『国記録選択無形民俗文化財調査報告書 稲取のハンマアサマ』静岡県教育委員会
- ・静岡県教育委員会編 二〇一一『国記録選択無形民俗文化財調査報告書 東伊豆地方の鹿島踊』静岡県教育委員会

第二章 「鹿島みろく」 現地調査報告

◆資料1 昭和四八年の「鹿島みろく」調査一覧表（参考資料『鹿島みろく』鹿島文化研究会 昭和四八年／作表：茨城県立歴史館 大津忠男）
数字に○印は平成二五年現地調査地

地域名	参加者	性別	期		不定期	鹿島神宮	祈願の対象		弥勒踊り歌の内容		
			定	期			当	踊りの	お酒盛り	めでた	その他
① 大町	19	女		1日・15日、稲生神社・龍神社の祭り	結婚式・紐解き、新築祝	御しん様	稲生神社・愛宕神社・淡島神社	御家様	有	○	其の四（御茶の礼）：是様 其の五（みろく）：美しいのは
2 神野	12	女		1日・15日・21日		御しん様	稲荷神社・おやしき様（物忌）・鷺神社・照明院		有	○	其の四（御茶の礼）：是様 其の五（みろく）：美しいのは
3 須賀	21	女		1日・15日・28日			水神社・白旗神社・稲荷神社・長吉寺			○	其の四（御茶の礼）：是様 其の五（みろく）：美しいのは
4 大船津	12	女		月ごこのこりの日、百万遍、稲荷神社の祭り			各家をまわる、普渡寺、稲荷神社		有	○	悪しきをよけて給い
5 沼尾	18	女		1日・15日			金砂神社・香取神社・稲荷神社・大宮神社			○	
6 根三田	19	女		1日・13日・28日		鹿島様	愛宕神社・淡島神社・姫宮神社・水神社・天神社・大杉神社・加茂神社			○	
7 谷原	15	女					道祖神・稲荷神社・水神社・淡島神社・大杉神社・雷神社			○	
8 泉川	13	女					熊野神社・稲荷神社・もがみ様・淡島神社・道祖神			○	
9 国末	9	女		1日・15日・28日		鹿島様	山王神社・大六天様・稲荷神社・竜神社・姫の宮			○	
10 長橋	10	女		1日・15日		鹿島神宮	うぶすな様・天神様・庚申様・三夜様・道祖神・お不動様			○	
11 木滝	12	女		1日		お鹿島様	稲荷神社・大杉神社・天神様・八幡神社			○	
12 下埜	13	女		1日・15日		お鹿島様	稲荷神社・稲荷神社・加茂神社・道祖神			○	
13 佐田	8	女		1日・15日・28日		一年禰宜 受け渡し	両社様・道祖神・加茂神社・大六天様・八幡神社・天神様・小富士権現様※	一年禰宜		○	
14 粟生	10	女		1日・15日		お鹿島様	天とう様・八幡神社・お不動様・水神社・道祖神・稲荷神社・平光寺			○	みろくの変形（おかしま）
15 鉢形	14	女		1日・15日・28日			鷺神社・もがみ様・金比羅神社・権現様・道祖神			○	
16 粟生浜	3	女		1日・15日			大師堂・道祖神			○	
17 平井	12	女		1日・15日			八幡神社・天王様・こぶが原・天神様・姫の宮・お山様			○	
18 下津	22	女					荒神様・鎮守様・日月様・権現様・稲荷神社・道祖神・船玉様・大山せきさん様・三夜様・庚申様・汐宮様			○	
19 小宮作	7	女		1日		鹿島様	不動様・如意輪様・道祖神・稲荷神社・荒神様・住吉神社・御嶽さん・大六天・水神社・三夜様・竜神様			○	
20 明石	11	女		1日・15日		鹿島様	荒神様・鎮守様・稲荷神社・権現様・不動様・道祖神・薬師様・大師様・開山こうきよう様・天とう様・お月様・金比羅様・三夜様・観音様・はうきのかみ・便所・お姫様			○	「めでた+」悪まを払って…
21 神向寺	17	女		18日		鹿島様	荒神様・観音様・鎮守様・薬師様・不動様・大師様・稲荷様・弁天様・道祖神・香取様			○	世なぐら（みろくの変形）
22 清水新田他	6	女		21日	出産	鹿島様	鎮守様・庚申様・稲荷様・道祖神			○	
23 猿田	2	女		1日・15日		鹿島様	鎮守様・庚申様			○	
24 山之上	6	女		1日・15日・28日			鎮守様・坂戸様・稲荷神社・道祖神・権現様			○	世なぐら（みろくの変形）
25 田之辺	4	女		1日			塩釜様・稲荷神社・若みこ様	一年禰宜		○	
26 新田	11	女		1日・15日			稲荷神社・金比羅神社・天神様・淡島神社・道祖神			○	
27 爪木	37	女		1日・14日			鎮守様	一年禰宜		○	
28 下生	3	女					稲荷神社・アイロコイロ社・鎌足神社			○	めでた+みろく 世なぐら
29 仲町	9	女		1日・15日		鹿島様	伊勢神社・三夜様			○	
30 桜町	4	女		1日・15日		鹿島様	大六天・稲荷神社			○	
31 角内	6	女		1日			愛宕様・大師様			○	
32 新町		女				御しん様	荒神様・稲荷神社・虚空蔵様・不動様・竜神様・三夜様・観音様・もがみ様			○	其の四（御茶の礼）：是様 其の五（みろく）：美しいのは
33 清水	12	女		1日・15日		鹿島様				○	
34 厨		女		1日・15日						○	

「みろく」について
A…鹿島にみろくの舟が着いた。艘船には伊勢と春日。中は鹿島の御社。
B…米の三合まこようよ。
C…ABの要素ともなし。

◆資料2 平成七・八年の「鹿島みろく」調査一覧表（参考資料「鹿島弥勒」嶋田尚調査『茨城の民俗』茨城民俗学会 平成七・八年／作表：茨城県立歴史館 大津忠男）

■は平成七・八年の抽出調査地
数字に○印は平成二五年現地調査地

地域名	調査時の継承状況 継続○ 中断・廃絶×	お酒盛り	めでた	みろく	是様	みろく	その他
大町	○	○	○	○	○	○	
神野	×						
須賀							
大船津	○	○					
沼尾	×						
根三田							
谷原	○	○					
泉川	○	○					大根撒き
国末							
長柄							
木滝							
下埞	○	○					
佐田	○	○					
粟生	○	○					おかしま
鉢形	○	○					
粟生浜	×						
平井							
下津							
小宮作							
明石							
神向寺							
清水新田他							
猿田	×						
山之上	×						
田之辺							
新田	×						
爪木	○	○					おかしま、千秋楽
下生							
仲町	○						
桜町	○						
角内	○	○					
新町	×						
清水	×						
厨	×						



大町のみろく^{おおまち}

徳丸重木

一 名称

大町のみろく

二 伝承地

茨城県鹿嶋市大町宮中 大町区民会館

三 期日・場所

平成二五年（二〇一三） 十一月一日 茨城県鹿嶋市大町宮中 大町区民会館で実施。

四 伝承（運営）組織

名称…大町のみろく会（定例集会を「オサカモリ（以降はお酒盛りと記述する）」と称する）

会員構成…会員一六名（平成二五年三月現在）、当日参加者八名。

年齢構成は、大正九年（一九二〇）生まれから昭和一六年（一九四一）生まれまでとなっている。大町は現在六〇戸程から成る。

定例会への参加者は平成二〇年度五、六月の九名に比較して、八名であり、それほど増減は認められない。構成員の殆どは七〇代から八〇代であり、高齢化が進んでいる。月替わりで二名が当番を務める。

結成…大町のみろく会は、芸能保存会参加の為に昭和三十一年に結成された。

活動内容…毎月朔日（八月は盆月の為、行わない）の定例集会の

他、かつては大町の稲生神社（写真1）の祭日に、鹿島神宮にみろく謡を奉納した後、各神社に奉納した。現在では、公民館にて定例集会を行っている。

会への参加は、会員の家において、姑（シュウトサン）が引退する際に、次の世代となる嫁に姑が参加を勧める形が多い。年齢が高くなって参加する。六〇代でも若すぎるので参加できず、みろく会に籍だけ入れていても実際の集まりには七〇代になって参加する傾向にある。上の世代の会員には体調を崩して参加できなくなった者も多い。

最初に参加する際も特に儀礼は無い。姑世代が体調を崩すなどして参加できなくなり、会員が少なくなった際には、会員がその家の嫁に参加するように働き掛ける事によって、皆気持ちよく参加してくれたとの話も聞かれる。

姑が参加している時も、嫁は姑が参加し易い様に家で料理を作るのを手伝ったり、それを運んだりしている。他の土地から嫁に來た者や、転入して來た家からの参加者は少ない。若い世代は勤めを持っている事も多いので参加は難しい状況になって來ている。会員の家々では、家族が参加する事に協力的であるので、会に参加できていくという。

かつては娯楽も少なく、姑の代までは、会に参加する事が大きな楽しみであった。女性同士



写真1 稲生神社

が繋がる機会は意外と少なく、女性だけが集まって自由に話せる機会も限られていたので、お酒盛りに参加して家の中の事から解放されて情報交換するが楽しみでもあったし、必要でもあったという。

身内に不幸があった場合は、五〇日間は参加しない。人によっては一年間参加を遠慮する。喪が明ければ再び参加する。

五 行事・芸能内容

(一) 次第

集合と準備…九時頃から会員が集まって来る。公民館にコの字型に長机を並べ、座布団を置き、座を作る。お茶を出し、当番が用意した料理を並べる(写真2)。特に献立が決まっている訳ではないが、当番が得意な料理が準備される。平成二五年十一月一日に用意された料理は、きんぴら(レンコン・昆布・にんじん)、だし巻き卵(ニラ入り)、ポテトサラダ、寒天ゼリー、白玉ぜんざい、バナナであり、料理は何れも当番の二軒による手作りである(写真3)。

会員が集まり、座に座る。部屋の奥に向かって右側、および中央



写真2 座の準備



写真3 当番が準備した料理

の座についた四名は太鼓を机の上に置き、撥をその上に乗せる(写真4)。

奉納…一〇時が開始時間である。丁度一〇時まで待って、ほぼ定時に奉納を始めるのが決まりとされる。早く集まっても、それまでお茶も飲まないで必ず一〇時まで待つ。お茶は全てが終わってから飲む事になっている。

まず、当番の「じゃあはじめます 最初に「今日」^{こんにち}からね」の言葉があり、奉納が始める。以降、各演目の前には、必ず演目についての言葉がある。横にしていた太鼓を縦に置き直す。向かって右側の卓についた二名は、太鼓を机の上に置いて左手で支え、



写真4 太鼓と撥の配置



写真6 手叩き



写真5 太鼓を叩いて歌う



写真7 手叩き

右手の撥で太鼓を叩く。中央の二名は膝を悪くされている為、椅子に座り、左膝の上に太鼓を置き、左手で太鼓の胴を支えて、右手の撥で叩く（写真5）。

撥は、末端を握り、腕と手首の動きで叩いている。

向かって左側の太鼓を持たない一名は、太鼓に合わせて手を打つ。太鼓の皮を打つ際には、両手の平を打ち合わせ、太鼓の胴を打つ際には左手を横に立てて人差し指の横を右手の指で打つ（写真6、7）。踊りはなく歌と太鼓のみである。詞章については、「九詞章」を参照されたい。

演目・・

・一回目「今日」「めでた」「鹿島では」を一度ずつ奉納する。
「今日」は「御しん様」を宛てる。「御しん様」は鹿島神宮を指す。

右側の方に左側の方から太鼓が渡され、交代して奉納が続けられる。

・二回目「今日」に「籠神様」を宛てて奉納する。続いて「めでた」「鹿島では」を奉納する。「籠神様」は、大町に祀られる神社である。中央の当番から太鼓が右手奥の方に渡され、交代して奉納が続けられる。

・三回目「今日」に「お稻荷様（稻生様）」を宛てて奉納する。続いて「めでた」「鹿島では」を奉納する。稻生様は、区民会館の前にある神社である。

(二) 衣装・楽器・道具など

衣装・・現在は、特に着物を準備したりはせず、普段着で集まっているが、かつては着る物も余所行きを選んでオシャレをしていた

という。姑のオシャレを嫁が手伝ったりもしたが、現在では着る物も簡素化した。

楽器・・用いる楽器としては、直径三〇センチ程の小太鼓が四基ある。奉納に用いるのは二基であるが、新しいものを二基作ったので四基となっている。昔の人は、太鼓の胴を肘や身体につけないように、手で支えて叩いていた。太鼓を手にしなない者はテバタキ（手叩き）で音を合わせる。

(三) 演目・芸態

みろく踊りは、「拝む」「はらう」「奉る」の三要素が組み込まれているのが特色とされる。現在はみろく踊りは奉納されていないが、録音テープは保存されている。

六 由来・信仰

由来は既に伝承されていない。鹿島神宮あるいは「みろく」と関わるものであることは意識されている。現在の会員は鹿島神宮での奉納を二回ほど行った経験がある。

大町みろく会は女性によって構成されているが、女性が関わる信仰的講集団としては観音講とイチヤサマがある（観音講は現在行われていない）。イチヤサマでは、「今日」「めでた」「鹿島では」が奉納された。

観音講 観音講は、子供を持つ年齢の若妻が参加する講であり、銚田市塔ヶ崎にある塔ヶ崎十一面観世音から観音様の掛け軸を受けて行っていた。良い子供を授かる様に観音様に祈願に出かけたりもしていたが、参加者も減少した為、三〇年ほど前に、掛け軸をお返しして解散したという。以前は、子供が生まれたり、七五

三、小学校の入学などを迎えた際に、その家に招かれてみろく踊りを奉納した事もあったという。その家から先にお祝いが

会に届き、それを受けて家を訪ねて奉納した。現在でも、仲間内でお祝いのやりとりはあり、定例会でお目出度い事があった家から会に対して寄進があった際には、感謝の気持ちを込めてみろく謡を奉納している。

イチャサマとの関係…かつては、一月、五月、九月の二日にイチャサマ（一夜様）のご縁日を区民会館で開いていた。イチャサマは、空海（弘法大師）の掛け軸（写真8）を区民会館に下げ、季節の果物、野菜、お花、果物、ゆで卵、お水（酒は供えない）、お塩、蝋燭を供えて、南無大師遍照金剛を唱える行事である。ゆで卵を供える由来は不明である。この行事に参加する女性と、お酒盛りに参加する女性とは同じであり、最後にみろく謡を奉納した。以下の順序で講は進められる。

（1）二列に並び、「オンケンバイ、オンケンバイ、ソワカ」を一回唱える。

（2）同じく「南無大師遍照金剛」を二回唱える。

（3）みろく謡の内、「今日」「めでた」「鹿島では」を奉納する。イチャサマにみろく謡を奉納する理由は、「昔は神と仏が一体であったため」と語られる。

集落神社への奉納…鹿島神宮、稲生（稲荷）神社、龍神社それぞれ



写真8 イチャサマの掛け軸

れに奉納したが、これは現会員の姑の代までとされ、現在は区民会館でのみ奉納している。かつては、稲生神社の初稲荷でも奉納していたとされる。

稲生様・龍神様との関係…稲荷様（稲生様）の祭礼でも奉納した。一月一日は龍神様の祭礼でもあった。

七 変遷

大町のみろくは、国選択無形民俗文化財に指定されている。指定に至る過程は左記のとおりである。

昭和三十一年三月一日 N H K 音のライブラリーレコード収録（二五名参加）

昭和三十三年三月二日 第一回茨城県郷土民謡大会出場

平成二年一月二日 N H K 芸能百選に出場、みろく踊り「めでた」を鹿島神宮にて奉納、テレビ放映（二三名参加）

平成一四年六月二九日 鹿島神宮本殿前でみろく踊り「めでた」と「大町大漁節」を奉納

平成二〇年五月～六月 茨城県立歴史館・文化庁・東京文化財研究所調査

平成二一年一月一七日、一九日 茨城新聞、東京新聞掲載
平成二二年一月二日 国選択無形民俗文化財決定

八 所見

大町のみろく会の定例会への参加者数は、平成二一年当時から減ってはいないが、全体的には高齢化している。「今日」「めでた」「鹿島では」の詞章ならびに音曲は、継続的な定例会で奉納される事に

より今日においても生活に密着する中で継承されている。みろく謡の内、「みろく」ならびにみろく踊りについては、現在、奉納されていないが、それが重要なものである事は自覚されており、上の世代が残した録音テープなどを用いて定例会でも練習が行われている。「九 詞章」において、会員所有の冊子を、所有者が書き加えた「ゝ」「ゝ」の記号やカタカナの文言を筆耕し加筆した上で採録したが、「みろく」への加筆が最も多く、そこにも「みろく」を重視する会員の意識が示されている。現在、先輩が録音したテープを使って練習中であるが、「みろく」の歌詞は特別に長く、その節回しも憶えにくいという。会員からは「みろくが本当のみろくである」との言葉も聞かれた。以上から、「みろく」についても、継承の努力がなされている状況であると言える。

定例会においては、食べ物も手作りで用意されており、その用意を嫁世代が手伝うなどして世代間のコミュニケーションがはかられている。「みろく」の歌や踊りは、民俗芸能として重要な意味を持つものであるが、それを支える地域社会においては、単にその文化財的価値から継承をはかっている訳ではない。毎月の定例会では、会員である高齢の女性達が集まり、それぞれの役割を果たし、相互のコミュニケーションをはかる良い機会となっている。手作りの料理にこだわっているのも、それをきっかけとして、その作り方や味など様々な会話が行えるからとの話も聞かれた。

特に若者や壮年層の生活が変化する中で、伝統的なこの定例会を維持するのは困難もあるが、会員は、積極的に定例会に参加し、歌の奉納の後に会食し、談笑する事で、得がたい時間を過ごしている。現在の大町の女性の生活において、みろく会は大きな意味を持っていると言える。

九 詞章

以下の詞章は昭和三十一年（一九五六）一月一五日本会作成の「鹿島みろくの謡」に基づくが、所有者の鈴木さんによる加筆部分を付記した（※および（ ）内は、報告者による付記）。

大町のみろく謡は、五曲六謡から成る。最後は「大町大漁節」で終わる。

其一（今日） ※歌のみ

今日のお酒盛りは御しん様（※鹿島神宮）の御法楽
皆いつれお揃ひ申して拝み申ソウロウヤ。

何事も悪アアアしきコトは避けヨケ給アアえ神イイ様。

※なお其一は、詞章を龍神様、お稲荷様（稲生様）に代えて繰り返す

今日のお酒盛りは 龍神様の御法楽
皆いつれお揃ひ申して拝み申す。

何事も悪しきことは避け給え神様。

今日のお酒盛りは お稲荷様の御法楽
皆いつれお揃ひ申して拝み申す。

何事も悪しきことは避け給え神様。

其二（めでた） ※歌と踊り

目出度めでたがオヤ三つ重なりて
門に七重のオヤ注連を張る

是のお庭の白躑躅

本は白銀（しろがね）オヤ中黄金（こがね）

末の小枝にオヤ銭になる

銭の恵みでオヤ朝日さす

朝日長者とオヤ名を呼ばれ

其二（めでた 鶴亀）※お祝い事で唄う

目出度めでたがくオヤ三つ重なりてく

門に七重のくオヤ注連を張る

これのお家はくオヤめでたいお家く

鶴と亀がくオヤ舞遊ぶく

鶴は千年くオヤ亀は萬年く

お家繁盛とくオヤ舞遊ぶく

親は百までくオヤ子は九十九までく

共に白髪のくオヤはえるまでく

其三（みろく）※歌と踊り

世の中アアは萬劫オオ末代サア

弥勒（ミロオオク）の船（フウウネエ）が

続ウウウウイイイ

舳艫オエエエエにはナア

伊勢エエと春ウウ日アアノオオサア

中はアワヨ鹿島の御社（オオヤアシロ）

有難（アリイイガアアアアタ）やナア

息栖（イキイイスウ）お森（オオモオオリイ）はサア

黄金社壇（コアガネシヤアアダン）

打（ウ）て輝（カガアヤア）く

後（ウシくロオオオオオ）にはナアく

清オオきイイ 神等（カミイイイイダアアチ）サア

前（マエエ）にイイは

女瓶（メガアアメ）と男瓶（ヲオオガアメエ）

あの御座アア船エエ

香取（カントくリイイイ）はアア

四十く余シヤの御社（オンヤアアアシイロオオ）

音オにイモ聞イイくウとも尊オオオしや

一度（ヒトくタアアアアアビ）はナ

参り申してスベクソウロウヤ

金（カネ）ニくの三アアアア合デく撒かうよ

金エエく三合はナ及びイイござアアアアーらぬサア

米（ヨネ）のヨオ三ア合デエ撒コオオオうよオオ

何く事オオオオオもナ叶へ（カアナエ）給アアアへやアア

常陸（ヒタアチイ）鹿島（カアアシマア）の

神々（カミガアミイ）サマ

其四（御茶の禮）※「是様」歌と踊り

是様のヤレ初の正月

門松門林（かどまつかどばやし）ナアアア

その松のヨヨヨーヤレーの小枝に

孔雀のエーエトソレエエ鳥が羽を休めなアア

両羽根エエに銭を並べて

口には黄金（こがね）を啜へ居るよオオ

その鳥がヨーオオヤレ又も来るなら

末代エエソラエ工長者で暮らすものよ

其五（みろく）※「鹿島では」歌のみ

鹿島アアアアではナ

美ウウウウツクしいのは 御しんヨ様の

あのはアアイイいふじ はい藤フウウウジがナ

咲き申してアアヤリオオコオテエ

サア御しん様に輝く

何事もナ叶へ給へや 常陸ヨ鹿島の神々様

平成二〇年二月一日には、御しん様（鹿島神宮）、龍神様、稲生様とも「今日」「めでた」「みろく」の歌を奉納の後、「めでた」の踊りと「大漁節」を奉納。

平成二〇年五月一日には「今日」「めでた」（歌と踊り）「鹿島では」を区民会館で奉納。

平成二〇年六月一日には「今日」「めでた」（歌と踊り）「鹿島では」を区民会館で奉納。

平成二五年十一月一日には「今日」「めでた」「鹿島では」を区民会館で奉納。ただし、「めでた」の踊りは奉納されなかった。「みろく」については、現在定例会の際に練習を続けている。

参考

大町大漁節

一ツとせ 一番ぶくろに きめこんで

心は さんざと おきやさん ハマー大漁だね

ハアコリヤ・コリヤ（二以下同じ囃子）

二ツとせ 二つならべたこの袋

どちらが いがかる おきやさん ハマー大漁だね

三ツとせ みなも出て見ろ 鹿島灘

かけたる いわしは にがしやせぬ ハマー大漁だね

四ツとせ 四つや五つの子供衆が

ぜに がね ぬきともて遊ぶ ハマー大漁だね

五ツとせ いつ来て 見ても この涙は

あき間も すき間も さらさない ハマー大漁だね

六ツとせ 無理な波風 そばやでも

お客さんが 金とりや いとわせぬ ハマー大漁だね

七ツとせ 波もなければ 風もない

ホロホロいわしに ほおせぐろ ハマー大漁だね

八ツとせ やたら無性に つみ上げて

なわ立て むしろで こまります ハマー大漁だね

九ツとせ こころあたりで 見直しか

なやみも うらみも 積み余る ハマー大漁だね

十とせ 十を重ねて 百となる

千をとびこす 萬漁船 この おめでたや

なお、NHK「音のライブラリー」レコード（昭和三二年（一九五七）三月一日収録）には

一、こんにち

二、めでた

三、みろく

四、茶の礼

五、鹿島では

六、祝い唄 鶴亀

以上が収録されている。

（平成二〇年の定例会ならびに文化財指定の過程については、茨城県立歴史館大津忠男氏よりご教示をいただいた。）

角内のお酒盛りすみうち さかも

徳丸亜木

(調査者 中村茂子)

一 名称

「オサカモリ（お酒盛り）」と称される。角内と仲町なかまちに関しては、現在、定例集会を「お酒盛り」と称しており、参加者からは、会の名称として「みろく」の言葉は聞かれない。「お酒盛り」の中で、「みろく」や「みろく踊り」が奉納されたものと思われるが、ここでは、定例集会の名称として「お酒盛り」とした。

二 伝承地

茨城県鹿嶋市角内 角内区民会館

三 期日・場所

平成二五年（二〇一三）年十一月一日 茨城県鹿嶋市角内 角内区民会館で実施。

現在、毎月朔日に行うほか、五―（三）で示すごとく、一月、九月、十一月は集落行事や祭礼に合わせて行っている。十一月二四日は愛宕様の祭礼（現在は十一月二三日）であるが、町内が祭礼で区民会館に集まるので、その際に、区長と鹿島神宮の神職も招いて奉納する。この際は、米など神事にお供えするものを用意する。

五月は、大師講もあるので二回行う。「上げさかもり」と「めでた」まで歌う時と、「これさま」まで歌う場合がある。歌う回数を確認する為、歌う度にマッチを置いて一〇回歌う。角内は、一〇班あるので、一〇回歌う。本来は班で個別に歌っていたが、合同したので

一〇回となった。

四 伝承（運営）組織

集まりをお酒盛りと称する。集まるのは九名であるが、当日は、一名欠席で参加者八名（昭和四年から一〇年（一九二九）一九三五）生まれ）であった。現在の参加者は、平成一三年一月から会計などの実務を引き受けている。このメンバーは老人会でも纏まって活動する事があるグループだという。先代には一〇〇才以上の会員（男性）がいたが、現在の参加者は八〇〜七〇代で占められている。話者の一人は昭和二四年（一九四九）に嫁に來たが、当時も、シュウトサマ（姑）の代によってお酒盛りは行われていた。当時は、区民会館内ではなく、その外のお宮（愛宕様）の前で行われていた。お酒盛りの会長は、初代以下、しばらくの間、男性の会長が続いているが、当時、女性が少なかった為、男性の会長となったとされる。お酒盛りには「酒」が付くので元々は男性の行事ではないかとの解釈も聞かれる。

会で集めるお金を「お賽銭」と称する。正月の村祈祷では、老人達が数珠を持って一軒一軒廻っていた。昔は六〇軒ほどだった。その「骨折り」として五〇〇〇円を受けた。毎月、お茶菓子代として地区から二〇〇〇円で年二万四〇〇〇円、村祈祷で五〇〇〇円、毎月皆からお賽銭を数百円集め、これを昼食や茶菓子の経費として用いている。お賽銭で足りない場合にはおにぎりなどを持ち寄る。以前は、新年会を開く事もあった。会員が亡くなった際には、お葬式にはお参りさせて貰い、故人を偲ぶ。鹿島神宮で、この会でお参りする事や旅行などを行う事はない。



写真1 小太鼓と歌



写真2 太鼓にあわせて歌う

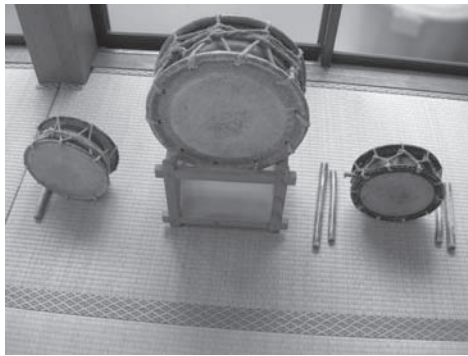


写真3 胴太鼓と小太鼓

五 行事・芸能内容

(一) 次第

当日は、机の周りに九名が座り、最初に参加費を集める。

通常、一〇時から開始する。

太鼓は胴太鼓一基と小さい太鼓二基を用いる。

胴太鼓は区民会館の窓側に別に置き、小太鼓は座卓を挟んで左右に据える。(写真1、2)

小太鼓を二名が叩き、胴太鼓は一名が叩く。

「上げさかもり」「めでた」「これさま」の順に演じられる。

「上げさかもり」は、「御しん様」の個所を、「愛宕様」「鹿島様」に変えて三度歌う。

歌詞と太鼓の打ち方は、九に示した。踊りは行われず、また伝えられていない。

終わった後、蕎麦をとったりして会食する。今回は会員の一人の快気祝いと特別に仕出し弁当をとった。

(二) 衣装・楽器・道具など

衣装は普段着で集まる。

楽器として大きめの胴太鼓一基、小太鼓二基を使う(写真3)。

胴太鼓の直径は、五三センチほど。小太鼓の直径は、二基とも二四センチほどであるが厚みは八センチと九・五センチと違いがある。撥は二三センチ、直径一・五センチほど。小太鼓は二基あるが、厚みと皮の張りによって音が違う。小太鼓の紐の締め方は一基は綾になっている。もう一基は交互に締めたものの胴部分を別の紐で締めている。

(三) 演目・芸態

「お酒盛定例会月例表」によれば、以下の各月に、歌のみ奉納する(①は「上げさかもり」、②は「めでた」、③は「これさま」を示す。「上げさかもり」は御しん様への奉納であり、「めでた」は愛宕様への奉納である。「これさま」は鹿島様への奉納であると月例表には記されている。

一月五日 お酒盛り

①②③

二一日 大師講

①②③

二五日 村祈禱

①② (一班から一〇班の分で一〇回を行う)

五月五日 お酒盛り

①②③

二一日 大師講 ①②③

九月五日 お酒盛り ①②③

二一日 大師講 ①②③

十一月五日 お酒盛り ①②③

二三日 愛宕神社例祭 ①②

以上以外の月には朔日のお酒盛りに①②③を行う。

六 由来・信仰

「みろく」の名称は、踊りとしても名称としても伝えられていない。お酒盛りで名称を通して。地域の神様であるから月一回拜んでいるという。「御しん様」で地域の全ての神様をまず拜んで、自分たちの内々の神様を拜む意味ではないかと解釈している。愛宕様は神田明神から勧請したものと伝えられている。

七 変遷

踊りと節をつけて演じていた時期が何時ごろまでなのかは既に判らなくなっている。現在のメンバー加入した際に、若い人が入ったからということでの世代が辞めてしまつて、節などがうまく継承されなかったとされる。上の世代から受け継がれて来ていないため、歌い方が一本調子になってしまつていくという。お酒盛りを絶やさないための努力として、後継者を探そうとしているが、なかなか難しい状況が集まりでは語られた。

町全体の人口も減っており、また、この会に入ると老人になった気分になるから入らないという話も聞かれた。参加者自身の感覚として、七十二七三才でお酒盛りに入った時には、「これで、老人になった」という感覚が実際にあつて、まだ若い気持ちでいる内に入

る事に抵抗があるのも理解できるという。老人会の参加者も減少しているが、老人会に比較してお酒盛りは行事の負担も限られているので、まだ入って貰える可能性はあると参加者は考えている。「地区の文化を残すには今しかない。引き継いでいることの責任感もある」「この地区に住んでいるから伝統を守る気持ちを持つて欲しい。繋げないと神様に怒られてしまう」との言葉もあり、現在のメンバーによりお酒盛りは今後も継承されるものと思われる。

八 所見

角内のお酒盛りでは、みろく踊りあるいは「みろく」は継承されていないが、月一度の定例会だけでなく村祈祷や大師講、愛宕神社祭礼などで演じられており、集落行事との密接な結びつきがうかがわれる。そこには、集落行事の折々に、集落の年齢構成の最上位にある女性達が奉納する歌唱により神仏と人とを言祝ぐかたちが現在にも受け継がれていると言える。

現在の参加者達からは、年齢の近い者達と話を交わす機会として、この行事を楽しむとする言葉が多く聞かれる。「神様を拜んでいるから健康になる」「（ミロクへの信仰を聞かれて）ミロクサマへの信仰というではなく、愛宕様にお守りをしてもらうという気持ち」「集まつて色々と話す事が健康法にもなっている。歳をとつて集落の外に出られなくなると、地域の人と話をして情報を交換するのが楽しみである。話の交換会が出来るのも神様の御利益ではないか」など、自身の健康を、この行事を通じた神仏への祈願に結びつける言葉が聞かれた。

活動としては、現状を維持しながら今後継続されて行くものと考えられる。参加者の「信心も大事だけど用心も大事」という言葉からは、この行事を無理をせずに次の世代に引き継いで行きたいと

九 詞章（ひらがな部分は、奉納で用いられている歌詞による。漢字部分は録音からの筆者による筆耕）

① 「上げさかもり」 おあたごさま うぶすなさま 太鼓と歌

(※「●」「⋮」は太鼓、以下同じ)

●	●	●	●	●	●
こ	おん	にちの	おさか	もりは	
●	●	●	●	●	●
ご	しん	さまえ	ごほう	らあく	
●	●	●	●	●	●
み	んな	いづれも	そろい	もオオ	
●	●	●	●		
し	いて	おがみ	申オす		
●	●	●	●		
「	なにご	ともオ	あしき	ことは	
●	●	●	●	●	●
け	しよけ	たまえ	かみさ	まよう	
●	●	●	●	●	●

今日のお酒盛りは 御しん様の御法楽
皆いつれお揃ひ申して拝み申す。

何事も悪しきことは消し避け給え神様よー。

今日のお酒盛りは 愛宕様の御法楽
皆いつれお揃ひ申して拝み申す。

今日のお酒盛りは 鹿島様の御法楽
皆いつれお揃ひ申して拝み申す。

② 「めでた」 太鼓と歌

めでたア ● ● ●
めでたの ● ● ●
わかまつさまよ ● ● ●

かどに
ななえの
しめをはる

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

このやのおいえは めでたいおいえ

つるとオカメとが まいあそぶ

● ●
つるは :
千 ● ●
年 :
かめ ● ●
は :
万 ● ●
年 :

おやは 百まで 子は九十九まで

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
ともに しらがの はえるまで

● ● ● ● ●

目出度めでた笠松さま
門に七重の注連を張る

この屋のお家はめでたいお家
鶴と亀が舞遊ぶ

鶴は千年 亀は万年

親は百まで 子は九十九まで
共に白髪のはえるまで

③「これさま」 太鼓と歌

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
これさまよ はつの 正月の よ

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
かどにはかどまつ かどばやし

● ● ● ● ●

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
そのまつの いちの こえだに

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
くじゃくのとりが はねをばやすめ

● ● ● ● ●

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
そのはねに ぜにを ならべて

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
くちには こがねを くわえ おるよ

● ● ● ● ●

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
そのとりが またもくるなら まつだい

● ● ● ● ● ● ● ● ● ●
長者で くらすものよ

● ● ● ● ●

是様よ初の正月のよ 門には門松 門林（かどまつかどばやし）
その松の一の小枝に 孔雀の鳥が羽をば休め
その羽根に銭を並べて 口には黄金（こがね）をくわえ をるよ
その鳥が又も来るなら 末代長者で暮らすものよ

「ご苦労様」の挨拶で終わる。本来は、節回しをつけて歌っていたと言う。

仲町のお酒盛りなかまち さかも

徳丸重木

一 名称

仲町の「お酒盛り」

二 伝承地

茨城県鹿嶋市仲町通所 仲町区民会館

三 期日・場所

平成二六年（二〇一四）一月二五日 茨城県鹿嶋市仲町通所 仲町区民会館で実施。

四 伝承（運営）組織

名称…定例集会をお酒盛りと称する。会の名前は特に定められていないが、長寿会の行事の一つとも考えられている。

会員構成…仲町の六〇才以上の男女が参加する長寿会（平成二五年三月で会員数六〇名）から、七〇才以上の女性の希望者がお酒盛りに参加する。仲町は、上組・中組・下組・裏軒A・裏軒Bの五組に分かれるが、お酒盛りはまとまって行っている。裏軒は、元は一つの組であったが、住宅地の増加でAとBの二組に分けられた。区民会館は、裏軒B、通所に位置する。かつては、二〇名程のお酒盛りへの参加者がいた。仲町は、商売をしている家が多いが、鹿嶋市の開発が進み、店が忙しくなるとともに七〇才になってもすぐにお酒盛りに参加する事が難しくなり、一時期、参加者が減少した。現在は、参加者増え、当日は九名の女性と老人会長が参加した。来年

度からは、新たに四名が参加する予定である。月替わりで一名が当番を決める。年齢と家の近さで回す順番を決めている。参加者の内、最高齢者は大正八年（一九一九）生まれの女性であるが、当番の負担は求めず、お酒盛りに参加してもらっている。

結成…明確には伝えられていない。

活動内容…毎月五日にお酒盛りを行う。神事であるので、正・五・九（一月、五月、九月）は、特に丁寧に行わねばならないという。大町様の様に行わない月は定められていない。各月のお酒盛りは、全て区民会館で行い、集落神社など別の場所で行う事は無い。

先に述べた様に、会への参加は、長寿会の女性会員の内、七〇才以上の者が対象となるが、一軒の家から姑が参加している間は、嫁は七〇才を迎えてもお酒盛りには参加しない。姑世代が高齢や体調不良などを理由として会への参加が困難になった段階で、嫁が参加する事になる。本来は、姑がお酒盛りの場で嫁を紹介して引き継がせるが、現在は、姑がお酒盛りの参加者の方が、七〇才を迎えた町内の女性に参加を依頼に行く形になっている。

身内に不幸があった場合は、一年祭（一年忌）が終わるまで参加しない者もいるが、忌み明け前に、鹿島神社でお祓いを受けた者は、以降は参加できる。

五 行事・芸能内容

（一）次第

集合と準備…九時頃から会員が集まって来る。区民会館の床の間には、地区の氏神社である伊勢大神宮と鹿島大神宮の掛け軸が下げられ、その前には伊勢神社の神札と、御幣が添えられた神棚が置かれ、酒が多数奉納されている。また、和紙が敷かれ賽銭を納めた竹

籠と盆の上に供物
(参加者が当日用意
した料理を小皿に取り
分けたもの)が供
えられている。部屋
に入った者は、まず、
神棚に対して拝礼
し、賽銭を納める(写
真1)。



写真1 区民会館の神棚

部屋にはコの字型に長机を並べられ、座布団で座が作られている。
長机の上に各々が用いる太鼓とボン(太鼓の撥)、そして、「鹿島弥
勒謡」と題された歌詞の書き付けが置かれる。

奉納…一〇時が開始時間であるが、当日は、一〇分ほど早めに開
始された。

演目…

・「今日」^{こんにち} まず、「今日」か
ら奉納を始める(写真2)。
歌詞の内、「御しん様」の
部分は、「御しん様」、「お
伊勢様」、「お三夜様」、「大
神宮様」、「井戸神様」と各
回変えて行く。「御しん様」
は鹿島神宮、「お伊勢様」は、
鹿島神宮の参道右手に位置
する仲町の氏神社の伊勢神
社の事である。「お三夜様」



写真2 今日の奉納

は、後に触れ
る女性に加わ
る観音講で祀
る観音様の事
である。大神
宮様は家々の
神棚に祀られ
るお伊勢様を



写真3 太鼓の持ち方

表す。井戸神様に対して最後に奉納するのは、仲町が高台で、
三〇分程掘り下げないと水が出ない土地であり、井戸が大切
なものとされて来た為であると説明される。かつては共同井
戸のみであり、個人宅には井戸は無く、釣瓶で水を汲むのは
嫁にとつて重労働であり、それ故に「仲町には嫁に来るもの
じゃない」と言われる事もあったという。

左手で下部を縦に支えた太鼓を右手のボンで叩き、歌う(写
真3)。男性である老人会長を除く全員が太鼓を持つ。

・「めでた」 つづいて「めでた」を奉納する。「めでた」の奉
納の際には、カセットテープに録音したピアノの伴奏に合わ
せた謡を、カセットデッキで流しながら、それに合わせて太
鼓を叩き、歌う。

・「お茶の禮」 最後に「お茶の禮」を奉納する。同じく録音に
合わせて太鼓を叩き歌う。

奉納が終わると、参集する参加者が持ち寄った様々な料理が並べ
られる(写真4)。平成二六年一月二五日に用意された食べ物は以
下の様なものである。

- ・オハギ
- ・小豆餡
- ・サムゲタン（自宅で育てた朝鮮人参・栗入り）
- ・白和え（ほうれん草、コンニャク、人参、リンゴ入り）
- ・サツマイモの芋きんとん
- ・コウナガとおからの煎りもの
- ・白菜、大根、胡瓜などの漬け物
- ・里芋、大根、人参、椎茸、薩摩揚げの煮物
- ・ゴボウ、レンコン、コンニャク、人参のきんぴら
- ・大豆と昆布の煮豆
- ・ゴボウと大根の漬け物
- ・ミカン入りの牛乳寒天
- ・ヨーグルトババロア

以上は全て参加者による手作りであり、既製品は全く用いられていない。一品四〜五人分を目処に用意し、談笑しながら皆で会食するのが何よりの楽しみとされる。また、一二時頃には、仕出し屋からとった巻き寿司と稲荷寿司が出され、人参と大根の汁と共に食される。

（二）衣装・楽器・道具など

衣装：大町と同じく、現在は特に和服を準備したりはしていない。基本的には、普段着で集まっている。



写真4 持ち寄られた料理

楽器：用いる楽器としては、直径二三センチから二四センチ程、厚さ七・五センチから九・五センチ、金属の持ち手付きの小太鼓が九基ある。この他に、今回は使われなかった太鼓が四基ある。両面に皮が張られ、胴には、太鼓を寄付した長寿会会長の名前と寄付の年度が記されている。今回用いられなかった太鼓の内、最も古いものは昭和四四年（一九六九）のものである（写真5）。

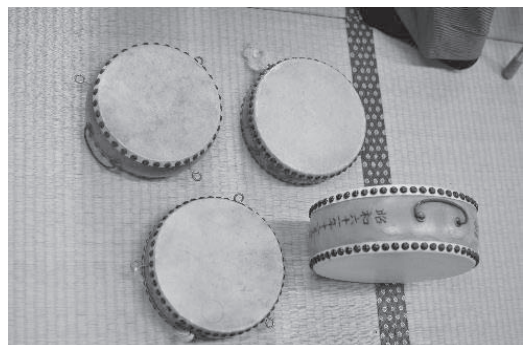


写真5 太鼓

（三）演目・芸態

みろく踊りは、今回、奉納されなかった。既に継承されていないものと思われる。

六 由来・信仰

由来は既に伝承されていないが、仲町のみろく謡は、元々は大町よりも古いものが伝えられていたとする参加者も居る。仲町のお酒盛りは大町と同じく七〇才を超えた地区の女性達によって行われる。仲町の女性達は、年齢に応じて以下の年齢集団に加入していく。観音講 仲町に嫁にきた女性はまず観音講に加入する。観音講は、大町と同じく子供を持つ年齢の若妻が参加する講であり、観音様には子育て、安産の御利益があるとされる。月に一度、観音様の掛け軸を区民会館に掛けてお茶を飲んだりして過ごす。

付き合い講 子育てがほぼ終わる五〇代になると、観音講から引退

し、付き合い講に加入する。付き合い講は特に神仏は祀らず、月に一度当番の家に集まってお茶を飲み、談笑するオチャコウ（御茶講か）とされる。五〇代の女性が集まる付き合い講は、六〇才になると引退し、六〇代の者が参加する付き合い講に加入する。

お酒盛り 付き合い講を引退すると、お酒盛りに参加する様になる。

七 変遷

現在の参加者は、大正八年（一九一九）生まれの方が最高齢であり、昭和五年（一九三〇）生まれが二名、昭和八年、九年生まれがそれぞれ二名、昭和一〇年、一五年、一七年が一名宛となっている。準備などの実務は、下の年齢の者が率先して行っているが、参加者の姑世代が引退する際に、仕事をしている者が多く直ぐに引き継ぐ事ができなかった為、十分な継承ができていないという。その為、大町から昭和三十一年（一九五六）のNHK音のライブラリーレコード収録に際して録音したテープを借り、その録音を、地区の教員に頼んで編曲し五線譜に落としたものを、ピアノの伴奏で改めて録音して、現在の練習や奉納の伴奏として用いている（写真6）。編曲を行ったのは、大町の録音の音程が低すぎて歌いにくかった為であるという。

八 所見

仲町におけるお酒盛りでは、既に踊りは継承されておらず、また、歌も、大町の録音に基づくものであり、新しく形作られている部分も見られる。しかしながら、「今日」の歌詞に「井戸神様」など、地区の状況を反映した独自の内容も見られ、また、大町の録音をそのまま用いる事をせず、西洋音階に編曲し直し、譜面化している。

それに基づいて新たに録音し直す事により、新入の参加者でも歌うのを容易にし、継承が可能と成る様に努力している。実際に、本年度の春には四名の新たな参加者を迎える事になっている。

お酒盛りにおいては、供物や料理はその殆ど全てが参加者による手作りであり、謡の奉納の後、卓上に並べられたその料理を楽しみながら女性のみで談笑する姿からは、この集まりが現代における高齢女性達のコミュニケーションの場として大きな意味を持っている事がうかがわれる。お酒盛りは、嫁世代による観音講、主婦層の二つの世代による付き合い講の後に来る信仰的講集団であり、仲町地区の女性を中心とした年齢階梯構造の最も重要な部分を成しているとも言える。

仲町のお酒盛りは、今後も継続が望める状態にあり、みろく謡の保存・継承団体として大きな可能性を持っていると言える。

九 詞章

以下の詞章は、お酒盛りで参加者が利用している「鹿島弥勒謡」に基づく。

其一（今日） ※歌のみ

今日のお酒盛りは 御しん様の御法楽 皆いつれ揃で拝み申す
何事も悪しき事なけれ神々様 けいやう けいか

※なお其一は、詞章の御しん様の部分を、お伊勢様、お三夜様、大神宮様、井戸神様に代えて繰り返す

其二（めでた）

目出度めでたがオヤ三つ重なりて

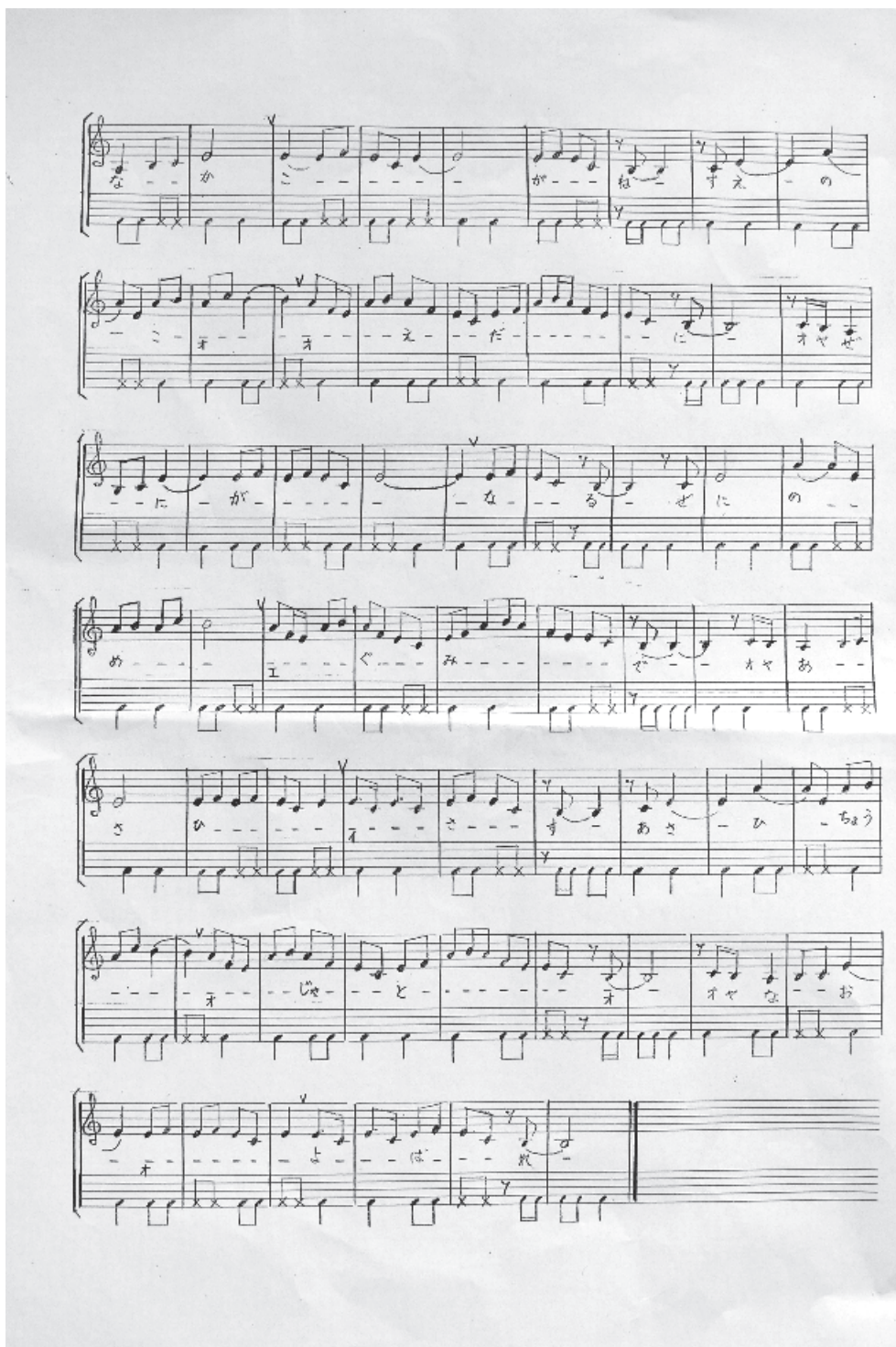


写真6 譜面（鹿嶋市在住・元音楽教諭の大川悠子氏による採譜）

門に七重のオヤ注連を張る

是のお庭の白躑躅

本は白銀（しろがね）中黄金（こがね）末の小枝に銭がなる

銭の恵みで朝日さす

朝日長者と名を呼ばれ

其四（御茶の禮）

是様の初の正月 門には門松門林（かどまつかどばやし）

その松の一の小枝に孔雀の鳥が羽を休め

両羽根に銭を並べて 口には黄金（こがね）を啜へ居るよ

その鳥が又も来るなら 末代長者で暮らすものよな

現在行われていない「鹿島みろく」行事

徳丸重木

今回の現況調査においては、鹿嶋市大町、仲町、角内町において、お酒盛りが行われている事が明らかとなった。ただし、みろく踊りが伝えられているところは、大町のみであり、仲町、角内町においては、踊りは既に継承されておらず、また「みろく」の歌も歌われていない状況にある。

鹿嶋市のみろくについては、鹿島文化研究会が昭和四八年（一九七三）三月に発行した『鹿島みろく』（鹿島文化研究会編 鹿島文化特集号一二 一九七三年）に、当時市内で行われていた鹿島みろくの伝承状況が詳細に報告されている（資料1〈四二頁〉参照）。

当時、「鹿島みろく」が継承されていた地区は、大町、神野、須賀、大船津、沼尾、根三田、谷原、泉川、国末、長栖、木滝、下埞、佐田、粟生、鉢形、粟生浜、平井、下津、小宮作、明石、神向寺、清水新田・田谷・神領、猿田、山之上、田之辺、新田、爪木、下生、仲町、桜町、角内、新町、清水、厨の各地区であった。その多くは一〇名から二〇名で維持されているが、一部には既に参加者が数名となっているところもある。みろく踊が継承されていたのは、大町と須賀のみであった。

平成七〇八年（一九九五〜六）に報告された嶋田尚氏による調査（嶋田尚「鹿島弥勒」(一) および同(二)『茨城の民俗』茨城民俗学会 第三四号 一九九五年、および同第三五号 一九九六年）では、一九地区の抽出調査の結果、大町、粟生、佐田、爪木、泉川、角内、仲町、桜町、鉢形、大船津新田、谷原の継承が確認されてい

る（資料2〈四三頁〉参照）。しかしながら、報告では、有力な後継者がいない事から、一〇年後の廃絶が危惧されている。

今回の現況調査は、嶋田氏による調査から一八年後のものとなるが、実際に行事の継承が確認できたのは大町、仲町、角内町の三町のみであり、鹿嶋市の文化財担当者からも、ここ数年で行事を行っている地区が急激に減少したとの話が聞かれた。話者からは、鹿嶋の開発が進む過程において、住民の生活も変わり、高齢者も店番などで忙しく働く事が多くなり、お酒盛りへも七〇代となったからといってすぐに参加する事が難しくなったという話も聞かれた。鹿嶋市の開発に伴う高齢者の生活や意識の変化が会への参加者の減少に結びついているものと思われる。また、お酒盛りへの参加が、自身が高齢になった事を自覚する事にもなり、それを忌避する感覚がある事や、お酒盛りに参加して自身より更に高齢の者と関係を作る事に生活上の積極的な理由を見いだせない事も語られた。

その一方で、お酒盛りの観察からは、この集まりにおいて各参加者が仲間との会話や会食を楽しみにし、また、お酒盛りにおける歌の継承活動に価値を見いだしており、単に義務的な感覚のみで維持されている訳ではない事も確認された。

大町・仲町・角内町の三地区においては、お酒盛りの参加者は一〇名程度を維持できており、ここ数年で途絶する事は無い様に思われる。しかしながら、会の構成メンバーが七〇才以上で、実際に会に参加出来る健康状態にある女性に限られる事に変わりはない為、継続的に七〇才に到った女性達の参加が行われない限りは、行事の継承は常に不確実である状態が続くものと思われる。

今回、「鹿島みろく」の継承が途絶した地区の調査は行えなかったが、お酒盛りという高齢の女性集団による行事としてならば、今

回の調査対象地区以外にも未だ行われている可能性はある。お酒盛りは、基本的には集落内での行事であり、観光資源化が行われているものではないが、現在の参加者にとって、女性が日常の関係から離れ自由な会話を楽しみながら、地域に密着した文化を継承していく機会として大きな意味を持っていると言えよう。

第三章 「鹿島みろく」に関連した芸能の現地調査報告

おの 大野のみろく

中村茂子
(調査者 徳丸重木)

一 名称

大野のみろくばやし 大串のささらとともに昭和四一年(一九六六)三月 茨城県指定無形民俗文化財 昭和四八年一月 文化庁による「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択

二 伝承地

茨城県水戸市下大野

三 期日・場所

- ① 平成二五年(二〇一三) 十一月一日(日) 九時～一五時
第23回 風土記の丘ふるさとまつり(ダイダラボウまつり)
水戸市大串ふれあい公園埋蔵文化財センター前庭仮設舞台
- ② 平成二五年十一月二四日(日) 九時～一四時
第14回 下大野文化祭(下大野サ皆こまつり)
水戸市下大野市民センター前庭仮設舞台
- ③ その他、毎年各種のイベントに出演している(上記①②のほかは毎年異なる)

四 伝承(運営)組織

・組織の構成

伝承団体名 大野みろくばやし保存会
会員一〇名 会長(清水康昌) 副会長(雨貝勝一)

平均年齢(六五才以上)

・経済

茨城県と水戸市からの助成金(一〇万円)・後継者育成資金(三万円)・年会費(三〇〇〇円×一〇人＝三万円)・出演料(①風土記の丘ふるさとまつり一〇万円) 合計二六万円+a

五 行事・芸能内容

(一) 次第

先の期日・場所に記した①と②の両日とも、ほぼ同様の次第で演じられた。

①は途中で雨が降り始めたため、急ピッチで演技を終了した。

②の次第を記す。

平成二五年十一月二四日(日) 第14回 下大野文化祭(下大野サ皆こまつり)

水戸市下大野市民センター前庭仮設舞台

下大野小学校生徒(高学年男女一七人)と保存会長・副会長によって一二時半～一二時四十五分まで

一「みろくばやし」 二「おっしゃいばやし」 三「とつびき」

大野みろくばやし保存会全員と小学生多数(低学年も含む)によって一二時四七分～一三時五分まで同演目

演目・次第は小学生だけの演技と保存会員+小学生以下の子どもたち多数の演技で構成され、同じ演目次第を二度繰り返す。但し、一「みろくばやし」で小学生が舞台上で三体のみろく人形を舞わせたのに対して、保存会員による「みろくばやし」は、仮設舞台下手前面にせり出してきた底無し屋台の中で、屋台前面に紐で固定されていた本物のみろく人形を、保存会員三人が屋台の中で舞わせる。

(二) 衣装・楽器・道具など

演技者の衣装は、保存会員と小学生がそれぞれ別に誂えた舞台用揃いのハッピを普段着の上から羽織る。保存会員用は黒地であり、襟の両側に「下大野みろく保存会」という白抜き文字、背中の中心位置に底無し屋台表面に掲げられた白い変わり瓢箪形に「下大野邑」と黒字で書かれたシンボルマークを染め出し、後ろから前身頃の中心部にぼかしの朱色を使い、裾にかけては黒地に飛び立つ白鶴の群れを染め抜いた特注品である。小学生用は青地に黒襟の両側に「下大野小学校」と白く染め抜き、背中に校章らしい白抜き丸に赤文字、裾は正方形の枠繋ぎ模様になっている。

三体のみろく人形は、着流しの浄衣に、黒い垂れ烏帽子を被る。屋台向かって左側で舞う春日様は黄頭で上向き鼻に大口をあけ、左手に閉じ扇、右手で背中に負った「ナンバンツツコ」をおさえる。中央の香取様は赤頭で眉間が広く口が曲がっている。左手に太鼓・右手にバチを持つ。右側の鹿島様は青頭でヒョットコのよう

な顔の額左にコブがある。左手に幣束、右手に閉じ扇を持つ。中央に位置する香取様の頭だけが左右に動く仕掛けになっており、左右の春日・香取様の振りを気にしながら太鼓を打つことを意図した製作であり、このことによって、三体の人形が同時に演技をし



底無し屋台で三体が同時に舞われる 左から春日・香取・鹿島様
平成25年11月10日 全日本郷土芸能協会撮影

てきたことがわかるという。

底無し屋台の構造は、ほぼ立方体に近い三段の木枠をほぞで組み合わせ、その外側上段は図案化した一匹の蛙を三面に付した黒縁付きえんじ色ビロード地（上幕）、下段は上段より幅広の木綿地に波に朝日と鳥を描いた幕（下幕）で覆う。

上幕から突き出た擬宝珠付き六本の柱（四隅と左右側面中央）で高欄を付け、側面の擬宝珠柱に添わせて「下大野邑」と書いた縦長白大提灯を左右に立て、前面両脇の擬宝珠柱から前に突き出す形で、大御幣に五色の麻（通称ガキダレ）を付けた大串を立てる。屋台の四隅には青笹竹を立て注連縄を張りめぐらす。表面中央に「下大野邑」と書いたシンボルマーク板を高欄上に立て、縦につなぎ合わせて上幕に添って「大野みろくばやし保存会」と三行に書いた円形提灯を下げる。その両脇に別模様の提灯二個（左右合わせて六個）を下げ、後方左側の擬宝珠柱に添わせて保存会の旗を立てる。屋台の内部は、表面に向かって三体人形の心棒が三段枠の上部枠に紐で固定されている。三体を舞わせるための



底無し屋台の内側に紐で固定されたみろく（撮影者・撮影年月は上に同じ）



底無し屋台の上幕（蛙模様）と下幕（波に朝日と鳥）
（撮影者、撮影年月は上に同じ）

スペースを取った後方、中間枠に締め太鼓を固定するに相応しい二本棒を渡し、その後方で締め太鼓を演奏した。締め太鼓打ちの後方、屋台向かって右側の中枠に鉦留太鼓一つり下げ、ここで打つことになるが、現在では屋台の中で演技をするのは三体の人形を舞わせる保存会員三名だけであり、

囃子方は全員が屋台の外で演奏する形式をとっている。

- ・ 鉦留め太鼓 (一) 皮面直径四九^{センチ}、胴 (高さ) 六一^{センチ}

- ・ 締め太鼓 (多数) 直径三六^{センチ}、胴 (高さ) 一四・五^{センチ}、締めの内径二四^{センチ}

- ・ 太鼓バチ (多数) 長さは直径に合わせる。

- 直径二・五^{センチ}程度

- ・ 笛 (三) 七穴 (竹製)

- ・ 鉦 (一) 真鍮製 片手で下げる下げ紐付き、撞木で叩く

- ・ 歌 小学生の部 (小学生二)、保存会の部 (清水会長の独唱)

(三) 演目・芸態

小学生の演技

一「みろくばやし」(二〇分弱)

仮設舞台最後部に人形三体を舞わせる三人が位置する。小学生が舞わせる三体の人形は、屋台の中で舞わせる保存会の本物とは別に



多数の締め太鼓 (この他にもある)
平成25年11月11日 全日本郷土芸能協会撮影 (以下同じ)



囃子方唯一の鉦留め太鼓

清水保存会長が練習用として作成したものである。三体の人形を背にして、上手側に小

学生の身長に合わせた六つの太鼓台に設置した締め太鼓打

ちが位置し、下手に中型の鉦留め太鼓一、大小太鼓に挟

まれた位置の前面に歌方二人 (六年生) が立つ。その後方

に笛二人と鉦一人が位置する。三節で構成される「みろ

くうた」が歌われる間、三体のみろく人形はゆっくり左右に振られている。前奏と間奏の囃子部

分では、人形の心棒を両手で回転させながら左右に振るので、人形の採り物が大きく左右に動く。このような振りを称して

「大野のだだみろく」といわれている。

二「おっしゃいばやし」(三六分)

三体の人形は舞台後方の板に立てかけられ、人形使いは退場、歌役二人が締め太鼓に

まわって、締め太鼓を八人で打つ。鉦留め太鼓と笛役二人

はそのままで演奏が始まると、おかめの面に振り袖を着



小学生の演技「おっしゃいばやし」のおかめ踊り



小学生の演技「みろくばやし」

し黒い頭巾をつけた二人が囃子方の前に出て来て手踊りをする。

三「とつぴきばやし」(二分)

笛役二人が締太鼓に加わり(二〇人)、副会長の雨貝勝一氏が独奏で笛を演奏する。小学生が笛を担当した「みろくばやし」「おっしゃいばやし」とは、全く異なる複雑な音色を聴かせる。

保存会員の演技

一「みろくばやし」(八分)

演目と芸態は小学生の演技とほぼ同様である。仮設舞台下手側の後方で準備を完了していた底無し屋台が、下手前面に押し出される。

屋台表面両側に法被姿の保存会員が、向かって左側に幟持ち、右側に「区長」と書かれた提灯を持って立つ。本来、屋台の四隅には手動で屋台を移動するための担ぎ棒が前後に突きだしていたはずであるが、現在の組み立て屋台には、すでにそれがない。また、大小太鼓をはじめとする囃子方も、全員が屋台の外で演奏するため、囃子方のための装置は屋台内に設置されていない。三体の人形を舞わせる保存会員三名だけが屋台内部に入り、上段囲い板の前面に括り付けられていた人形を各自で舞わせる。人形を舞わせる演技を「人形をする」という。この表現は「棒ささら」に引きつけられた結果の名称であ



保存会員の演技「みろくばやし」底無し屋台内でみろくをすっている三人

ろう。

人形を舞わせる演技は以下のような内容である。

① 最初に笛の演奏が始まると、三体の人形は同時に体を左右に揺り動かし始める。次に、締太鼓の演奏が入ると人形の動きが活発かつ複雑になり、左右の動きに前後の動きが加わる。

② 「みろくうた」(五分) は三節で構成され、現在の会長である清水康昌氏が一人で歌う。一節めが歌い終わったところで、大太鼓が打たれ、その音に合わせて「はんじょう はんじょう」というかけ声がかかる。このかけ声に合わせて三体の人形は二回高く飛び上がる。このような演技を三回繰り返す(三節五分)。保存会の演技には、締め太鼓の数は小学生の演技よりさらに増加し、小学生以下の子ども達も加わる。屋台内の人形の舞わせ方は、舞台上で舞わせる小学生の演技とは、細部でちがいが見られる。「みろくうた」を小学生が歌うのには無理があり、保存会の演技では会長が歌うことになっている。

③ 「おっしゃいばやし」(五分)

小学生が扮するおかめの踊りが三人になり、途中小学生の部で踊った二人はおかめの衣装をつけたまま締め太鼓を打つ。小学生の部で控えていたおかめの一人踊りが中心になる。

「おっしゃいばやし」が囃子の中では最も演奏しやすく、最初に習う。

④ 「とつぴきばやし」(五分)

小学生の演技と同様に副会長の雨貝勝一氏の独奏で、清水会長が子どもたちの打つ締め太鼓を指導してまわる。「とつぴきばやし」は最も難しい曲であり、現在雨貝副会長以外には演奏することが出来ないという。

六 由来・信仰

由来について記された文献は、現在に至るまで全く発見されていない。しかし、伝承地には以下のような三種類の起源伝説がある。

① 徳川光圀公が農村巡視の折、現在の水戸市東大野にある極楽橋にさしかかった時、馬が突然進まなくなった。その理由を知るために周辺を尋ねさせると、橋の下で三体の人形を発見した。これを拾い上げると馬が動き出して光圀公は無事に巡視を終えた。この人形が後に下大野の住人に渡され、大野のみろくが行われるようになった。

② 鹿島に発生した「鹿島踊」や「みろく踊」が基礎となり、これを人形をあやつる踊りとして伝承した。

③ みろくを演じる底無し屋台を覆っている幕の図柄は、朝日と碎ける波であり、大野の古老たちは「みろくは海からきた」という海上渡来説を記憶している。

①②は『常澄村史』^①にも記されている知られたものであり、①は文化庁選択民俗芸能『大串ささら・大野みろく』^②に②③とともに記されているもので、昭和四八年（一九七三）十一月五日付で文化庁の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択された時に作成された報告書である。

信仰についても文献はない。後に記すひたちなか市の通称「元町みろく」も三体の人形を底無し屋台の中で舞わせる。その芸態は、大野のみろくと同様である。しかし、「元町みろく」は向かって左側に位置する赤頭が鹿島様、中央の青頭が春日様、右の白頭が住吉様である。神名の鹿島・春日は同様であるが、もう一体は大野が香取であるのに対して、元町は住吉である。また、頭の色も赤（大野は香取、元町は鹿島）、青（大野は鹿島、元町は春日）、黄（大野は

春日）、（元町は白い住吉）である。大野の「みろくうた」詞章の第三節は、「ともえには伊勢と春日の中には鹿島の大社 繁昌 繁昌」であり、伊勢にかえて香取を加えている。元町の場合は伊勢にかえて住吉を加えているが、その理由については不明である。

① 下大野の鎮守社は「鹿島香取神社」であり、春日、鹿島とともに香取が人形の一体として加えられているのは鎮守神として納得できる。歴史的にも春日大社は、平城京造営とともに武神である鹿島・香取を勧請して創建されたのに始まる。

② 「鹿島の事触れ」は、世情不安が発生すると鹿島の神人が御幣を持って災いを祓ってまわったもので、その姿を根底として芸能化したといわれている「鹿島踊」「みろく踊」にヒントを得て、祭の行列風流の一端を担うことで、天変地異の災害を避け、豊年祈願とした。

③ 鹿島神（武甕槌）、香取神（経津主）は土着の神々を征服後、海路から利根川を経て現在の地に鎮まったと伝えられ、海の彼方から米俵を満載した「弥勒の舟」が来訪する先導役に位置づけられているのが鹿島神である。

七 変遷

「大野のみろく」は、大串稲荷神社の宝永五年（一七〇八）に始まった水戸への出社祭礼に供奉することで、その伝承を保ってきた。江戸時代の大串稲荷神社祭礼は水戸藩主導であり、正徳期（一七一〇～一六）から江戸末期まで寺社奉行の所管であった。明治以後、出社祭礼は大串地区の責任下で継承され、八月二日～三日または一〇月六日～八日の三日間実施された。大串では、出社祭礼を決定すると下大野を含む管内二一カ村に招待の使いを出した。招待を

受けた下大野みろく当番区の区長は、世話人を集めて参加の協議をし、祭礼当日の二〇日以前から練習や用具類の準備にかかり、みろくの顔塗りと衣装は二区の庄司新四郎氏が奉仕した。当日は一戸一名参加が義務で、お供と屋台担ぎを担当した。

出社祭礼の当日午後、みろくは大串の接待係が三回以上迎えに来ないと腰をあげず、区長宅と氏神鹿島香取神社に奉納してから、神輿渡御途中の東前御飯屋で行列に合流した。夕方、神輿が水戸の仮殿に到着、「安着式」があり、ささらとみろくの演技で行列は解散する。ささらとみろくは時間が許す限り奉納者宅をめぐって演技をし、祭典事務所へ道具類を預けて帰宅する。三日目の還幸祭は仮殿で「出立式」があり、ささらとみろくの演技後、還御行列を繰り出す。市街地では、ささらとみろくが商店などをめぐりながら大串へ向かう。神輿は、人々に迎えられて社殿におさまり、ささらとみろくが最後の演技をして出社祭は終了する。一般供奉者はその場で御神酒を頂いて解散したが、みろく一行は神楽殿に上がり、祭司以下から「酒・赤飯・煮しめ」などの接待を受けた。出社祭礼は昭和一年（一九三六）を最後に断絶し、宝永五年以後二二八年間に何回実施されたかは不明である。また、大野のみろくは下大野の共有物で、一区・二区の区長が交代で自宅に保管してきた。

昭和三七年「大野みろくばやし保存会」が結成され、大串のささらと対で一般公開されるようになり、昭和四一年三月に「大串ささらばやし・大野みろくばやし」として、茨城県無形民俗文化財に指定された。保存会では鹿島香取神社境内に収納庫を建設、屋台や衣装も新調した。昭和四八年十一月、文化庁「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択され、昭和五三年三月発行と思われる資料³には「芸能大会出場記録」「みろく保存会員名簿」等が付

されている。前者には後継者育成に乗り出し、一五名の青年が入会して川又正氏の指導によって演技が完全になったと記されている。

また、後者には当時の保存会長宮本正己氏のもとに、現在の保存会長清水康昌氏（笛・大太鼓）・副会長雨貝勝一氏（笛・大太鼓）が、他一九名と共に会員として名前を連ねている。平成二五年の調査で現役として残っているのは清水・雨貝両氏のみである。

平成元年頃から後継者育成の目的で下大野小学校で「大野のみろく」を指導するようになり、現在では毎週土曜日の一九時～二〇時三〇分まで、清水会長が子ども達の指導に当たり、保存会員は同時に練習する。現在の小学生の中には、初期に清水会長の指導を受けた人の子どもたちもいる。現役保存会員の中で若手の一人で、一〇年ほど前に保存会員になった上野氏が、以下の話をしてくれた。子ども二人が小学生の時「みろくばやし」の指導を受け、子供たちの卒業を機会に自身が保存会員になった。下大野の出身でありながら、関わる機会がなかった伝統芸能を継承したいと考え、小学生で指導を受けた人たちが保存会員として入会するまでの中継ぎとして、荷物運び等の雑用を引き受けることにした。

八 所見

「大野のみろく」は、伝統的によその地域の催しに招待されることで伝承されてきた。保存会結成後も各地のイベントに招かれるだけでなく、保存会員個人が囃子方の助っ人を依頼されることがあり、そのような状況の中で会員それぞれが芸を磨いてきたという。現在、その経験を有するのは清水会長と雨貝副会長のみであるが、最後の演目³にしている「とっぴき」では、雨貝副会長が素晴らしい演奏を聞かせてくれる。雨貝氏によれば、「おっしゃいばやし」「とっぴき」

は県内各地で演奏されている囃子で、地域によって微妙な違いがあるので、そのちがいを習得する目的で練習に励んできたという。この経験を後継者育成に生かすことは不可能であろうか。

九 詞章

みろく歌⁽¹⁾

(第一) 世の中はまんごう末代みろく世にとつんづいた。

(第二) てんじくでは一三姫が米をまく ただはまくまい日本繁昌とよねをまく。

(第三) 鹿島浦には宝の御船がつんづいた ともえには伊勢と春日中には鹿島の大社
繁昌 繁昌。

註

(1) 常澄村史誌編さん委員会編 一九八九『常澄村史』常澄村 五六八頁

(2) 茨城県東茨城郡常澄村教育委員会編 発行年月記載なし 文
化庁選択民俗芸能『大串さらら・大野みろく』

(3) (2)に同じ

(4) (2)に同じ

水戸市周辺地域都市形祭礼の「棒みろく」

中村茂子

はじめに

別稿として、茨城県に伝承されている三種類の「鹿島みろく」について記した。また、水戸市内に伝承されている「大野のみろく」については、続けて二度調査の機会があったことで、特に別稿とした。

したがって、現在「棒みろく」を伝承している三カ所は、多くの場合「大野のみろく」と比較対象的に見られることが多い、ひたちなか市中央の天満宮祭礼（八朔祭）で、神輿渡御に供奉している「元町みろく」と、小美玉市竹原の竹原神社祭礼（祇園祭）に供奉している「裏町みろく」の二カ所について、可能なかぎり記した。なお、「元町みろく」については、現地調査を実施する余裕がなく、現在の「元町みろく」保存会長である関山興道氏に度々の電話で話を伺い、FAXによる資料の提供を受けて執筆した。また、「裏町みろく」も、竹原神社祇園祭の実地調査はできなかったが、幸運にも多くの方々のご厚意によって、平成二五年十一月二四日の午後、保存会役員の方々七名に集合していただき、公民館で話を聞くことができた。併せて、現存六体のみろく人形をはじめ、祭の際に用いている諸道具、現在は使用していない収蔵品等を拝見することができた。

中断の伝承とした、石岡市総社宮祭礼に際して、木之地町の社務所に展示されている「みろく人形」については、「裏町みろく」保存会の方々から聞いた話と資料をたよりに記した。筆者はかつて、石岡の総社宮祭礼を見学した時、木之地町の社務所に展示されている六体の「みろく人形」を見た記憶があり、その時に解説を読んだ

はずであるが、そのまま忘れ去ってしまった。しかし、後々まで気持ちのどこかに引っかかるものが残っていた。「木之地町みろく」、および廃絶事例とした石岡市三村の須賀神社祭礼（祇園祭）に登場していたという「諸士久保みろく」については、俵木悟「その他」の鹿島踊——祭礼行列に出る鹿島踊・弥勒踊を中心に——⁽¹⁾、および氏の取材メモと資料を提供していただいた。

大洗町磯前神社八朔祭の「大貫みろく」については、かつて存在していたという伝承があるだけで、具体的な資料は全く発見できなかった。したがって、神社の歴史を辿ること、およびひたちなか市天満宮との距離の近さや「八朔祭」であることから、その伝承を推測してみた。

一 現行三カ所の伝承

1 大野のみろく（水戸市下大野 別稿参照）

2 元町みろく（ひたちなか市

もとまち

中央 天満宮祭礼（八朔祭）

（一）名称 元町みろく 昭和

五五年那珂湊市無形民俗文化財・同年文化庁「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選択される。

（二）伝承地 ひたちなか市中

央 天満宮

（三）期日・場所 八月第一土・



元町みろく（茨城県ひたちなか市教育委員会提供）

日曜（本来八月二日～四日）の天満宮御祭礼 天満宮と市内全域

（四）伝承（運営）・組織

・組織の構成

現在の「元町みろく保存会」の会長は関山興道氏である。彼は地域内にある天満宮と柏原神社の氏子として、二一町内から出ている総代八〇名を束ねている重役の一人であり、上記二社の祭礼全体にも重要な役割を果たしている。「元町みろく保存会」の構成員は、会長以下一三名の役員と二三名の若連で構成され、総勢三五名である。若連は、現在元町住人だけではなく、他町内からの参加者も多い。練習は役員と若連が一体となり、様々な機会に演技向上の努力をしている。この練習が、後継者育成の役割も果たしている。

・経済

年間の運営資金として約五〇万円が必要であり、その基本となるのは元町町内会から「みろく育成資金」として六万円、ひたちなか市から無形民俗文化財に対する補助金として六万円、合計一二万円である。現在保存会員個人からは会費徴収はしていないので、費用の不足分は地域で「町渡し」「笠ぬき」などと称している商売繁盛、大漁、豊作などを祈願して「棒みろく」を舞わす「御奉仕」をすることで、ご祝儀を得て賄っている。

（五）行事・芸能内容

・次第

八月二日、全員で天満宮境内で人形の着付け、屋台の組み立てなどをして本番の準備をする。その日のうちに元町地区内をまわり、三日と四日は神輿の渡御・還御に行列のしんがりとし

て供奉する。それ以外の時間を利用して、他町内の祭典事務所や商店の前などに底無し屋台を移動し、「棒みろく」を舞わせる。

・衣装・楽器・道具など

装束は、保存会員と若連は揃いの祭り半纏を着用する。

人形三体の扮装は、屋台前面に向かって左側に立つ鹿島様は赤頭で左手に笏、右手に扇を持ち、南蛮を包んだツトを背負う。中央の春日様は青頭で、左手に太鼓、右手に太鼓バチを持つ。右側に立つ住吉様は白頭で、右手に扇、左手に御幣を持つ。三体とも頭の色に合わせた浄衣を着け、小型の黒烏帽子に黄土色系の同色袴を着ける。

楽器は、太鼓（大・小二）、笛と鉦（各二）である。

底無し屋台は四個のキャスターつきで、表面二四五センチ・側面三七一・八センチ・高さ一八九センチの枠を、三方向に赤地に黒で梅鉢紋を二個ずつ染め出した上幕を張る。枠の上部を黒塗りの高欄で囲み、左右に三個ずつの擬宝珠つき柱を立てる。高欄の下部には笹竹を四隅に立て、注連縄を張りめぐらして「元」と書いた赤提灯を下げる。四隅には「元町」と書いた大提灯を下げる。前面の高欄中央には「元街」の標示板を飾り、両脇に紅白の吹き流しを立てる。屋台の下側を下幕で覆う。

・演目・芸能

底無し屋台の移動中に人形を舞わせることはない。屋台を移動する場合には「下がり」を演奏し、演技の場合は住吉・春日の二神は従来通りの「振りばやし」を演奏し、最後に舞う鹿島様だけが変型曲を演奏する。底無し屋台の表面に向かって右側に位置する住吉様から春日様、鹿島様の順番で一体ずつ舞われるのが「大野のみろく」と大きく異なる芸能であり、「元

町みろく」の特色になっている。三体の神々の舞の意味は、住吉様がお祓いをして災害を除き、春日様が太鼓を叩いて「神楽」をあげ、最後に鹿島様が悪魔・悪疫を祓い祝詞をあげると説明されている。棒人形を舞わせる役を「振り師」といい、一人が一体を担当するが、演技上の注意としては基本的に人形の直立姿勢を保ち、三体それぞれに特色を持たせる。住吉様は静かにきめ細かい動きに特色をだし、春日様はリズムミカルに舞い、鹿島様は躍動感を持たせて左右に激しく振る動きを特色としている。「元町みろく」には歌の伝承はない。

(六) 由来・信仰

文献等の資料は皆無であるが、地元の伝承では、二代藩主光圀公の時代には底無し屋台で子供踊りが行われていた。元禄年間（一六八八～一七〇四）になって人形を作り、神幸行列の風流物として参加するようになり、今日に伝承されてきたという⁽²⁾。

(七) 変遷

天満宮の祭礼は通称「御祭礼」「湊まち」などとも呼ばれ、元禄八年（一六九五）に光圀公が菅原道真の像を祀って古来からの祭礼を改め、四代藩主宗堯公（藩主時代は享保三年～一五年（一七一八～一七三〇）の命により、祭礼行列はいっそう華やかなものになった⁽³⁾。江戸時代末期（文政二年（一八一九）、および弘化三年（一八四六）の「天満宮祭礼当元取扱留」に記された行列順の先頭には、「六丁目の獅子」と「和田町の火消」が記され、それ以外は、行列順番を定めた町名だけが記されている。棒みろくの底無し屋台を出していたはずの元町は一番と記されている。なお、江戸時代的那珂湊村は、水戸藩領最大

の港町であつたという⁽⁴⁾。

(八) 所見

地元の伝承では、祭をいっそう華やかに行うよう命じた四代藩主宗堯の時代以前から、「元町みろく」を伝承してきたことになる。別稿に記した延宝七年（一六七九）の記録があるという水戸市「向町のささら」の例から、光圀公が祭礼様式を改めたという元禄八年の祭礼行列に、「六丁目の獅子舞」とともに「元町みろく」が行列に供奉していた可能性は大きいことが推測できる。

3 裏町みろく（小美玉市竹原 竹原神社祇園祭）

(一) 名称 裏町みろく

(二) 伝承地 小美玉市竹原区裏町（竹原区は坂下・上町・仲町・横町・裏町で構成されている）

(三) 期日・場所 小学校が夏休みに入った週の土・日曜（かつては旧六月二三日）竹原神社祇園祭の神輿渡御に、上町ささらとともに供奉している。

(四) 伝承（運営）組織 ・組織の構成

「裏町みろく」保存会の構成は、会長を町内の世話役である



平成25年度 竹原神社祇園祭渡御行列に供奉の裏町みろく
(土浦市立博物館 萩谷良太氏提供)

酒川賢治氏が兼ねている(平成二五年度現在)。世話役五名(現区長・元区長・他三名で構成され、七月一五日に五名のうち二名は毎年交替する)が中心となり、保存会員は裏町三二戸の全戸で構成されている。

・経済

町費五〇〇〇円×二回＝二万円＋会費一〇〇〇円×三二戸＝四万二〇〇〇円

その他(臨時収入があった場合は世話役が管理する)

但し、平成二三年の東北大震災以後、竹原区から出ていた一万円は打ちきりになった。

(五) 行事・芸能内容

・次第 祭の度に、公民館に保管している底無し屋台を組み立て、人形に装束を着けて、全長一〇〇メートル程の渡御行列(①上町ささら・②神輿・③裏町みろく)に供奉している。
・衣装・楽器・道具など
六体の人形の頭は、赤・青・黒・黄・白二



使途不明の収蔵品 鐘(囃子に使用?)
(撮影年月、撮影者は右に同じ)



裏町公民館に収蔵されている六体のみろく人形の頭
(平成25年11月24日 全日本郷土芸能協会撮影)

体(うち一体は天冠をつける女性(じらさの姫))で、男五体は揃いの下着の上から、頭の色に合わせた羽織様の上着をはおり、黒烏帽子を被って、左手に五色の幣束を持つ。じらさの姫は赤系統の布で別仕立ての装束をつける。

・演目・芸能

現在は、囃子や口上を行わずに神輿渡御の行列に底無し屋台で参加しているだけである。かつては囃子や歌が歌われていたらしい。その名残として小型の鐘一個と「じらさの姫」命名の元歌と考えられる「弥勒歌」が残されている。

(六) 由来・信仰

裏町には、大正四年(一九一五)六月に記された「裏町守御尊彌勒由来小史」という資料が存在し、この文書によれば、六体の頭は古く竹原神社に祭祀されていたものを、いつの頃から裏町に勧請し、竹原神社祇園祭の神輿渡御に供奉する風流物「棒みろく」として、「豊年の奇瑞」と言い伝えてきたという。

(七) 変遷

勧請された六体のみろくは、安政年間(一八五四～六〇)に焼失した。現在の六体は安政五年(一八五八)に裏町の信者によって模作されたものであるが、明治五年(一八七二)頃に人手不足によって、祇園祭渡御の供奉を中断した。大正四年の御大典を機に復活したが、昭和三四年～六一年(一九五九～八六)までの約三〇年間、再度の中断があり、これによって演技のほとんどがなくなった。裏町公民館には、六体の人形と共に「安政五年戊午六月」と記された屋台幕の一部が残されている。

(八) 所見

大正四年に記された記録では、竹原神社に祀られていた時代に六体の頭が「みろく」と称され、五色に塗り分けられていたか否かまでは記されていない。筆者が平成二五年一月二四日に拝見した人形頭六体の印象は、人形浄瑠璃の頭を「棒みろく」として流用したように思われた。何らかの理由で、竹原神社に保管されていた六体の頭は、人形浄瑠璃のそれであつた可能性を拭いきれない。その理由は、三体で伝承されている水戸市大野とひたちなか市元町の「棒みろく」とは、全く異質の頭であることによる。⁶⁾

(九) 詞章「弥勒歌」(『竹原村誌』⁷⁾)

千早振る みな神々の 仰せなれば 弥勒をむとり めーで
たやー

天じくの雲のあへまに じらさー姫が 千代むすぶ 何事も
かなへ給へや なむ鹿島の神々(上記のような詞章は残されているが、節はわからなくなっている)

二 中斷一カ所

一 木之地町みろく(石岡市総社宮祭礼)

現在も石岡市の総社宮祭礼には、木之地町の会所に六体の「みろく」人形が飾られている。以下は註(1)～(7)を参考に記してみよう。明和年間(一七六四～七二)の町年寄御用留の断簡「ぎおん御祭礼之次第」に「五番 みろく 木之地」とあるが、これは嘉永四年(一八五二)を最後に記録から消えているという。⁸⁾ 木之地町では、昭和九年(一九三四)人形と屋台を竹原の裏町から借りて復活した。現在、総社宮祭礼に木之地町の会所に飾られる六体の「みろく人形」

は、昭和九年の復活時に奉仕した加藤要之助氏が、平成二年(一九九〇)に「裏町みろく」を参考にして復元したものであり、加藤氏は復活時に唱えられた口上「みろく歌」ではない⁹⁾も記憶していて、石岡市教育委員会に記録が残されているという。昭和九年以前の木之地町の「棒みろく」が、どのようなものであつたかは不明であり、復活に際して「裏町みろく」の全てを借り受けた事実から推察して、竹原神社に祀られていた六体の人形を「裏町みろく」として祇園祭に奉仕した時点から、祇園祭という共通項を通して六体の棒みろく圏ができあがつたのではないだろうか。

筆者が木之地町の「棒みろく」を中斷と考えた理由は、六体の人形を所有して会所に飾っている木之地町の気運が高まれば、総社宮祭礼行列の風流物として「富田のささら」と対をなしても、違和感なく受け入れられる状況にあると考えたからである。

三 廃絶二カ所

一 諸士久保みろく(石岡市三村須賀神社祇園祭)

石岡市三村須賀神社の祇園祭に供奉していたという「諸士久保みろく」は、廃絶してから久しいため、ほとんどのことが不明である。大正一四年(一九一五)生まれの瀧口正義氏の話として、日中戦争が始まった(昭和一二年)頃、ある家の倉から人形が出てきた。虫に食われて損傷がひどかったので燃やしてしまった。人形は六、七体あつて地元出身の長男(青年)だけが使うことができた。神輿の露払い役であり、底無し屋台の中で使った。人形は口が開くようになっていたので、何かいったのかもしれないという。

また、かつての三村は常陸国府中の一村であり、独立後も旧府中の総鎮守である総社宮と関係を維持してきた。総社宮祭礼の神輿渡

御に不可欠な「富田のささら」が、昭和三〇年代から一〇年間ほどの中断を経て、昭和四四年に復活を果たした時、富田町の若者に一カ月かけてささらの振りを教えたのは、三村吹上のささらを担当していた福田勇氏であったという。

さらに、総社宮祭礼に多くの山車が参加するようになった大正期、山車で演じる囃子や踊りを提供したのは三村であったという。

現在、総社宮祭礼に木之地町が会所に飾る「みろく」人形が六体であり、昭和九年の復活に際して躊躇なく「裏町みろく」を頼り、その名残を継承している事実を考えると、「諸士久保みろく」は、六体であったと考えられる。

二 大貫みろく(大洗町 大洗磯前神社八朔祭)

大洗磯前神社の八朔祭に、風流物として「みろく」の底無し屋台が出されたという資料は、残念ながら全く発見できなかった。大洗磯前神社は古くから東国屈指の神社であり、祭神は俗に福の神といわれている大貫己命と少彦名命で、病氣平癒、災害除去、福利増進にご利益が認められてきた。山上の社殿は、戦国時代に戦火を受けて浜辺の粗末なものになったが、元禄三年(一六九〇)に光圀公が元の場所へ移し、享保一五年(一七三〇)に三代目綱條公が現在の場所に移した。¹⁰⁾

八朔祭は、古来旧八月一日に鹿島神宮の神官が来て神事を行っていたが、近世に茨城町の鹿島神社から「鬼板」と呼ばれる盾を迎え、浜辺を馬で駆けて曲松で注連切りを行う行事(年占)とともに神輿が町内を渡御したが、騎馬調達が困難になり注連切りは絶えた。現在の八朔祭は、八月二五日頃の土・日曜に神輿の渡御があり、商工会が中心になってさまざまなイベントが行われている。山車は商工会青年部や漁業連などから出される年があり、キツネ、おかめ、ヒ

ヨットコなどが囃子に合わせて踊る。現在、磯前神社八朔祭には「棒ささら」「棒みろく」ともに神輿に供奉することはない。しかし、神社から鹿島灘を少し北上し、那珂川の河口を遡った対岸には、現在も「棒ささら」「棒みろく」を伝承しているひたちなか市天満宮が鎮座している。磯前神社と天満宮の歴史には光圀公が深く関わっており、藩政時代を通して両社の「八朔祭」が賑わいを見せていたことは明らかであり、風流物として「棒みろく」が神輿渡御に供奉していたという伝承は事実として受けとめることができる。

おわりに

茨城県内六カ所の「棒みろく」について、現存三カ所、中断一カ所、廃絶二カ所を以下のように整理してみた。

- ① みろく人形の数 ↓ 三体系(大野・元町・大貫)
六体系(裏町・木之地・諸士久保)
- ② 祭礼の種類 ↓ 祇園祭の神輿渡御に供奉(六体系)
その他の祭の神輿渡御に供奉(三体系)
- ③ 伝承地域 ↓ 六体系(小美玉市・石岡市)
三体系(水戸市・ひたちなか市・大洗町)

右のような簡単な整理からも、「棒みろく」は二種類の性格で伝承されてきたことがわかる。三体系のもものは、水戸藩主が関与して行われるようになった市街地の祭に、風流物の一種として神輿渡御行列に供奉するようになったものであり、人形は鹿島・春日・一体(香取・大野・住吉・元町)で構成され、三体の頭は当初から「棒みろく」専用に制作したものである。六体系のもものは、竹原神社に保管されていた人形浄瑠璃の頭を流用して五色に彩色し、姫を加えて六体で祇園祭の神輿渡御に供奉したもので、当初から目的も異な

っていたように思われる。三体系は豊作・豊漁・商売繁盛など、人々に福をもたらす「みろく」として、御輿渡御に供奉する他に、信者の所望に応じて三体を舞わせることで、ご祝儀を得ていた。この伝統は、「元町みろく」の他町内会所をめぐって舞わせる「町渡し」、商家などの祈願に応じて舞わせる「笠ぬき」に継承されている。また、別稿に記した「大野みろく」は、出社祭礼が実施されていた時代に、神輿が御飯屋に滞在中、水戸市街地の信者の家々をめぐってみろくを舞わし、喜ばれたと伝えている。六体系は「裏町みろく」の〈じらさの姫〉意外に五体に名称はなく、御神体〈牛頭天王〉とともに悪疫を祓い清める役割を負っている。但し、大正四年に記された「裏町守御尊彌勒由来小史」には、竹原神社祇園祭の神輿渡御に供奉する風流物「みろく」として、「豊年の奇瑞」と言い伝えてきたことが記されている。

註

- (1) 俵木悟 二〇〇六「その他」の鹿島踊——祭礼行列に出る鹿島踊・弥勒踊を中心に——『芸能の科学』33 独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所『芸能の科学』編集委員会、および氏提供による取材メモと資料「裏町守御尊彌勒由来小史」
- (2) 現在の「元町みろく」保存会長・関山興道氏からの聞き書きとFAXによる資料によってまとめた。
- (3) 茨城県神社庁編 一九八九『茨城の神事』 茨城新聞社
- (4) 秋山高志・水庭久尚 一九八五『茨城の人形芝居』 崙書房出版
- (5) 俵木悟氏提供による。

- (6) 「裏町みろく」保存会会長以下七名からの聞き書きによる。
- (7) 俵木悟メモ〈二〇〇六年二月三日〉『近世の宗教と文化』
- (8) 註7に同じ。
- (9) 註7に同じ。
- (10) 山本秋廣 一九五一『茨城めぐり』 茨城経済社

徳島のみろく踊り

俵木 悟

一 名称

みろく踊り

二 伝承地

茨城県潮来市延方徳島

三 期日・場所

期日…①水神祭（大祭）は旧暦二月一五日。

②お酒盛りは旧暦正月、五月、九月は一日と一五日、それ以外
の月は一五日。ただし七月は盆の月なので、一〇月は神
無月なので行わない。また旧暦正月は一日に代わって七日
に「オメザメ」として行う。

場所…徳島田園都市センター

四 伝承（運営）組織

・水神祭

水神祭は、集落を五班に分け、班ごとに年番で当番を担当する。
翌年の当番の班を下番、翌々年の当番の班を下々番と呼ぶ。この班
は水神祭の執行のみに関わる組織で、集落全体の戸数（現在は約一
二〇戸）をほぼ五つに等分して編成されている。日常生活において
は、徳島区が東・中・西という三つの行政単位に分かれるが、これ
と水神祭の班は必ずしも一致しない。

当番組の中で、水神を迎えて祀り、また水神祭当日の会場となる

家を当主（または当番主）として、またこれを補佐する役を祭事係
として定めていたが、祭礼会場が徳島田園都市センターに移ってか
らは、当主は定めていない。代わって当番の祭事係（祭事係の長）
宅で水神を祀っている。当主を務める際には、一年間、肉食が禁じ
られるなどの禁忌があった。

毎年の水神祭の実施に関する協議は、区長、当主（祭事係）、社
惣代（延方の吉田神社の惣代。神職を吉田神社から呼ぶことから）、
町会議員、本家株と呼ばれる二〇軒の草分け入植者の家などが集ま
って開かれる「神前会議」で行われる。

・お酒盛り

お酒盛りは、水神祭の当番が次の水神祭までの一年間の当番を務
める。水神祭で当番を受け渡した後、最初のお酒盛りを「初酒盛り」、
水神祭の直前のお酒盛りを「しまい酒盛り」という。

お酒盛りに参加するのは徳島区内の六〇才になった女性で、七〇
才になると（当番が二巡すると）引退する。ただしお酒盛りへの参
加は任意で、当該の年齢になっても参加しない者もあるという。

みろく踊りを踊るのはお酒盛りに参加する女性たちで、太鼓が二
名、歌が数名（太鼓と歌が合わせて五名は必要という）、それ以外
は踊り手となる。踊り手のことをウジコと呼ぶ。

なお平成二三年以後は、東組の有志の六名のみで、簡略化した形
で行事を受け継いでいる。

五 行事・芸能内容

（一）次第

・水神祭の次第

徳島の水神祭は男性の部と女性の部に分かれて行われる。みろく

踊りが演じられるのは女性の部のみであり、それゆえ男性たちはほとんどこの踊りについて関知しない。

午前一〇時頃からまず男性の部が行われ、それが終わった後、午後二時からいから女性の部が始まる。この両方を合わせて水神祭という。

以下に、男性の部、女性の部それぞれの水神祭の次第を記す。ただし年によって、また当番の班によって多少の次第の異同がある。

〔男性の部〕

- | | |
|-----------|---------------|
| ① 御茶 | ① 御茶 |
| ② 御茶菓子 | ② 御茶菓子 |
| ③ 神前拝礼 | ③ 神前拝礼 |
| ④ 修祓の儀 | ④ 修祓の儀 |
| ⑤ 御神楽奏上 | ⑤ 御神楽奏上 |
| ⑥ 祝詞奏上 | ⑥ 祝詞奏上 |
| ⑦ 玉串奉奠 | ⑦ 玉串奉奠 |
| ⑧ 御着席 | ⑧ 御着席 |
| ⑨ 御本膳 | ⑨ お酒盛り（みろく踊り） |
| ⑩ 御神酒 | ⑩ 御本膳 |
| ⑪ 御飯 | ⑪ 御神酒 |
| ⑫ 御高盛 | ⑫ 御飯 |
| ⑬ 燗酒 | ⑬ 御高盛 |
| ⑭ 御浜焼 | ⑭ 燗酒 |
| ⑮ 御刺身 | ⑮ 御浜焼 |
| ⑯ 宝来山・御祝儀 | ⑯ 御刺身 |
| ⑰ 御手打 | ⑰ 花見 |
| ⑱ 三番叟 | ⑱ 御手打 |
| ⑲ 祝宴 | ⑲ 座婆（三番叟） |

〔女性の部〕

㊟千秋楽

㊟祝宴

このうち特色のあるものを挙げると、男性の部の「宝来山」の次第で、相撲に見立て、当番から横綱二名、下番から大関二名を出し、謡曲に合わせて酒を飲み交わす。この次第が当番の受け渡しを表すという。女性の部では、「お酒盛り」の次第（「花見」の直前にする場合もある）でみろく踊りが踊られる。「花見」では、謡曲に合わせて、当番から下番へ水神さまの受け渡しが行われる。なお祝宴では男性・女性とも、「高砂屋形」の踊り（これも「高砂」と呼ばれるが、謡曲とは別の歌）、歌謡曲の手踊り、大漁節などを演じる。またすべての次第が終わると、男女とも祭頭囃子で来客を囃す。

なお、かつて水神祭は三日間にわたる祭礼だったと言われている。当主（祭事長）宅に祀られた水神と、それとともに受け渡される書類箱（二箱）、などは、水神祭本番の翌日に、新しい当主（祭事長）宅に遷される。

・お酒盛りの次第

お酒盛りは、当主（祭事長）宅の床の間に祀られた水神の前にコの字型に机を並べ、一〇時頃から昼を挟んで一五時頃まで行われる。お酒盛りの次第は、担当する当番によってかなり異なるという。ここでは聞き取りによる一例を挙げる。

- | |
|---------------|
| ① 御茶 |
| ② 御神酒 |
| ③ 御飯 |
| ④ お酒盛り（みろく踊り） |
| ⑤ ご馳走（昼食） |
| ⑥ 余興（順の舞） |
| 余興の順の舞（ジンノエ） |



祭事長宅に祀られた水神

とは、参加者が順番に一名ずつ好きな歌を歌いながら踊るものである。また余興の最後は大漁節で締めることが多いという。

お酒盛りの行事には、当主をはじめとする当番組の参加者が、親族などから預かった大量の奉納品（おみやげ）を持ち寄り、お酒盛りの最後にすべての参加者で分けて持ち帰るならわしになっている。

（二）衣装・楽器・道具など

・衣装

水神祭およびお酒盛りに参加する女性は、自前の着物を着る。近年では、着物は当番が回ってきたときに、班のメンバーで揃いのものを仕立てることが多いが、かつては銘々の着物を用意していた。女性にとっては、新しい着物を誂える理由にもなり、着飾って出かける楽しみの機会にもなっていたという。お酒盛りに出るために、姑に新しい着物をもらったことなどが、良い思い出として語られている。みろく踊りも着物姿で踊られる。歌・太鼓役などは着物の上に黒の羽織を着る。

・楽器・道具

水神祭には様々な道具立てがあるが、みろく踊りに関しては、鉦^{びやう}打^{うち}剥^むり抜き胴の太太鼓一つを使用するのみである。踊りの輪の中央に太太鼓を据え、それを二名の太鼓役が両側から撥で打つ。

（三）演目・芸態

みろく踊りには、大きく「おさかもり」の歌と「ぢゅうよしち」の歌の二曲がある（「九 詞章」参照）。

「おさかもり」では、中央に置いた太太鼓を両側から太鼓役の二名が叩き、その脇に座った歌役が歌を歌う。この曲では踊りはない。次の「ぢゅうよしち」では、踊り手が太鼓役と歌役の回りを取り

囲んで円になり、時計回り方向に回りながら手踊りを踊る。最後の「せんねん せんねん…」の囃し詞の部分で回るのをやめて中央を向き、手を叩きながら踊る。踊りは四分半ほどを要する。「ぢゅうよしち」の曲のみに踊りがついていることから、この曲のことを「みろく踊り」だという者もあった。

六 由来・信仰

みろく踊りの由来に関しては、「昭和五七年二月十五日 松本廣謹書」とされる由来書き（「巻物」と呼ばれる）が残されており、今も地区の人々によって語られている。以下にそれを引用する（かな遣いを一部直し、必要に応じて句読点を加えた）。

みろくおどりの由来歴史は、古い江戸正保年間、鰐川を挟んで旧延方村と対岸下幡木村との間に、葺や真菰の生い茂る中州の所属問題で寛永十一年十月より寛文十一年迄四十年程の間、所有権の問題について争いが絶えなかった。而して耕地として仕附けた作物を双方で互に抜き捨て、論争は絶えず続いた。遂に寛文拾二年子の年、双方にて御判紙申受け公事に取組み、訴訟沙汰となった。延方村にては先年洩の始めに高八拾石を水中に御上納申上げて置かれた証拠を差上げた。然る処下幡木村にては壹畝壹歩の証拠が無かったので、早速非分に被仰附御評定所に於て延方村



再現してもらったみろく踊り

の所有であることの御裁許が寛文拾貳年壬子拾貳月六日御裁許なされ、延方村地内と確定した。寛文拾参年改元延宝元年丑の年、延方より十八人潮来より式人計式十人の者が草切衆として入植した。勝訴と豊作の喜びに湧き躍る新らしい徳島村人には信仰のより所とする鎮守の守護神はなかった。そこで喜びに湧き躍る部落民達は、心のより所として鹿島神宮の分神として村の中心部に境内を造成し、巖島神社を鎮守の祭神に奉安申上げることとなった。暦代古老の申伝えにより毎年度の正月七日には部落代表者達が鹿島神宮に初詣でして一年間の部落の平和にして円満繁栄を祈願し、神のお告げを当番として祭り飾られてある神前で待ち構えて居る氏子達に披露し、御酒盛りを催し鹿島神宮より伝授された御宝楽の唄に合わせてみろくおどりを踊り廻して、大いに幸福ならんことを祈願申上げる行事を執り行つて居る次第でございます。このみろくおどりの行事は毎月一日、十五日に催して居つたのでありましたが、大東亜戦終戦後の現在は毎月の十五日に行事を行うことに改善し、お祭りを厳かに執行して居る次第であります。永久に変わることなく伝統を尊重し続けられることと信ずるものであります。最初に入植されました草切衆の名は徳島創立開基録に明記されてあります。

このように、内容は実質的にはムラの開基に関わるものであるが、その草切衆二〇軒が今も「本家」と呼ばれて大切にされていること、一月七日に鹿島神宮参拝を行い、その成果（現在はおみくじを引いてくる）をお酒盛りの場で報告し、みろく踊りを踊る「オメザメ」の行事など、現行の慣習がこの由来によって説明されている。

徳島水神社の開基は延宝年間（一六七三～一六八一）とされ、開

村の年代とも一致するが、別に徳川光圀が水難防災の守護として祀ったという言い伝えもある。徳島の水神は村をあげて管理されており、水神祭も徳島の最大の祭礼であるが、地理的には隣接する福島区内にある。村氏神はより集落の中心部に近い巖島神社（弁天さま）であると考えられている。ただし、水神祭の記録として当番に受け継がれている文書では、水神祭が「鎮守祭典」と記されており、地区の守護神と考えられているのは間違いない。

宝永四年（一七〇七）には、水戸藩主徳川綱條より原野百間四方が下賜され、この中に水神祭の費用にあてるための耕地が設けられたという。今もその耕地は徳島区の共有地で、「神田」あるいは「うぶすな田」と称される。当番と下番がそこを耕作し、一町二反というその田の収穫によって毎年水神祭の費用がまかなわれてきた。

七 変遷

現在、祭事長宅で祀っている水神とともに、二つの書類箱が当番に引き継がれている。その中に、水神祭の変遷をうかがうことのできる文書がいくつ含まれている。今後詳細な検討が望まれるが、その中からいくつか近年のトピックを取り出してみる。

昭和一六年（一九四一）の水神祭にあたって、以後当番の振る舞いを節約し、その差益金を毎年五〇円ずつ積み立て、付廻金とすることが定められた。

昭和五六年の水神祭にあたって、時代の変化により農家の減少、物価の高騰などが見られたことから、祭礼の執行改善が図られた。当主宅での水神祭の開催をやめ、新たに作られた田園都市センターを会場として利用するように変更することが決定された。これによって当主という役職がなくなり、水神は祭事長の家で祀ることになった。田園

都市センターの舞台中央には大きな祭壇が設けられ、水神祭は祭事長宅で祀られていた水神をここに遷して催されることとなった。

平成二三年三月一日の東日本大震災によって、この田園都市センターが大きな被害を受けた。センターが使用不可能になったことで、以後、水神祭は中断となり、あわせてお酒盛りの行事も簡略化されて行われるようになった。



田園都市センターに設けられた水神の祭壇

八 所見

徳島の水神祭と女性たちのお酒盛りに踊られるみろく踊りは、鹿島みろくの実態と伝播をみるうえで非常に貴重な事例であるとみられる。月例のお酒盛りに踊られるみろく踊りは、「今日のお酒盛りは…」で始まる歌や、祭頭囃子で締められることなど、今では鹿島地方でもほとんど途絶してしまった鹿島みろくの特徴をよく伝える。一方で、年に一度、当渡しをとまう初春の祭りの中で踊られること、その式を「花見」と称することなどは、千葉県のおどり花見や、印旛沼周辺に伝わっていたみろく踊りとも共通する特徴であり、両者の関連を証明する事例といっても良いだろう。水神祭そのものも、たいへん興味深い次第を伝えている。

それだけに、平成二三年の東日本大震災以来、水神祭・お酒盛りとも中断しているのは惜しいことであった。しかし中断中も、これ

を復活しようと婦人たちの有志が熱心に活動しており、当渡しの儀式も続けられていた。

そして平成二六年三月一日、中断されていた水神祭のうち、女性の部が水神社境内を会場として復活し、みろく踊りも奉納された。行事のなかの振る舞いの式や祝宴は簡略化されたものであったが、今後は本格的な復活が大いに期待されよう。



復活した「みろく踊り」(平成26年3月15日)

九 詞章

※伝承者から提供された書き付けより。

《おさかもり》

こんにちのおさかもりわ

おぶすなさまいのごほうらく

みないつれ そろいもうして

はなのあそびを さしあげる

みちしばを ふみわけて

まいりもうす おぶすなよ

とうねんのあしきことよば

けのげて たまいよ おぶすなよ

あれみよや いその はまべで
おなが たいを つりあげて
あれこそよ おぶすなさまいの
かけのねおとみそろう

《ちゅうよしち》

ちゅうよしちが
めしたこそでわーさー
なぜにすそがー
おなよ やぶれたー
このごろわー
かしまさんけいでさー
それですそがー
おなよ やぶれたー
かしまでわー
おもしろいのかさー
ごまんどうでー
おなよ みたらしたー
みたらしでー
ちごがまいそうたー
ごまんどおでー
おなよ ごまたくー
ごまたけどー
ただもたかねでさー
あとでみろくー
おなよ つずいたー

おもしろやー
おぶすなごもりー
こがねさざんー
うしろでわー
きよき かみだちでー
まいにわ おどり
おなよ たちそろう

① せんねん せんねん せんねん

よおい よおい よいやさ
よいやさと はやせば

かあみも よろこぶ よおいやさ

よおい よいやさ

② そらそら にかしよの べんざいてん

あくまを はらって よおがんべ

よおい よいやさ

③ よおがんべ よおがんべ

あくまを はらって よおがんべ

よおい よいやさ

参考文献

- ・ 潮来町史編さん委員会編 一九九六 『潮来町史』 潮来町役場
- ・ 額賀熊雄 一九九三 「徳島水神祭・酒盛行事」 『水郷の民俗』
- 一 水郷民俗研究会
- ・ 藤島一郎 一九九五 「潮来町の水神社」 『水郷の民俗』 二 水郷民俗研究会

洲崎のミノコドリ

俵 木 悟

一 名称

ミノコドリ

昭和三十六年（一九六二）の千葉県無形文化財指定時の名称は「洲崎踊り」。また昭和四八年の国記録作成等の措置を講ずべき無形文化財選択時の名称は「洲崎踊」だが、地元では一貫してミノコドリと呼んできた。県指定名称は平成二十二年（二〇〇九）に「洲崎のミノコドリ」に変更された。「洲崎踊り」の名称が採用されたのは、この踊りを構成する「みろく踊り」と「かしま踊り」が異なる芸能と見なされ、両者を一括して呼ぶ名称が必要と考えられたためという『洲崎踊り——その概要と歌詞——』一七。

二 伝承地

千葉県館山市洲崎

三 期日・場所

期日…①毎年二月初午の日

②八月二〇日・二一日・二二日の洲崎神社例大祭

場所…洲崎神社

境内には一四八段もの石段があり、その石段を登ったところに本殿・拝殿や末社がある。石段下には隨身門^{ずいじんもん}、手水舎^{ていずい}、社務所などがある。ミノコドリが踊られるのは石段上の拝殿前と、石段下の社務所前の広場の二カ所である。

祭典は、初午の祭では拝殿脇に祀られた稲荷社で行い、夏の例祭

では神社拝殿と、かつて役行者^{えんのぎやうじや}がこの地にもたらしたと言い伝えられる御神石^{ごしんせき}の置かれた海岸（浜の鳥居があり、この地先を明神下^{みょうじんした}という。ここでは「お旅所」とする）で行う。

四 伝承（運営）組織

洲崎区は八つの班によって構成され、神社側の一～五班がカザゲ、灯台側の六～八班がミヨと呼ばれる（五～六班を中間と区別することもある）。

祭礼の執行を司るのは、八班から一名ずつ選ばれた氏子総代と、区長（区長代理）・漁協組合長である。神輿は青年団が担うが、近年は団員数の不足から、坂田^{はんだ}・波左間^{はさま}・見物^{けんぶつ}など近隣の青年団員や、洲崎神社の祭神である天比理^{あめのひり}乃咩命^{のめのみこと}を勧請して創建されたといわれのある品川神社（東京都品川区）の氏子らが協力している。

ミノコドリを踊るのは小学生・中学生の女児である。ただし近年は人数の不足から、成人女性が加わることも多い。他に音頭取り（歌い手ともいう）として太鼓一名と歌い手二～三名が加わる。音頭取りは男女問わないが、実質的にミノコドリの指導者となるので歌・踊りともによく知る年配者が務める。

昭和三十六年に県の無形文化財指定を受けたことから、昭和四〇年に洲崎踊り保存会が結成されたが、これは規約上、洲崎の住民（洲崎神社の氏子）すべてが会員となる組織である。誰が保存会の会員であるかはほとんど意識されておらず、芸能大会等にも「洲崎区」として出場するなど、地区をあげて伝承しているという意識が強い。なお県指定の際の保護団体は「洲崎区」、国選択の際の保護団体は「洲崎神社氏子会」である。

五 行事・芸能内容

(一) 次第

・夏の例大祭の場合

二〇日(ヨイマチ)

一二時半頃から拝殿にて前日祭典が行われる。

一五時頃から、社務所前の広場でミノコオドリが奉納される。演目は「みろく踊り」

「かしま踊り」の二曲。

数年前までは、翌日ホンマチの奉納に向けた最後の仕上げという意識で、衣装などは着けずに演じられていたが、調査を行った平成二五年はホンマチ同様の衣装を着けて演じた。

二二日(ホンマチ)

一一時頃から神社拝殿にて祭典が執り行われる。まず神職が社務所前の手水舎脇の注連の張られた場所(ミコシハライジヨ)で修祓を行う。その後、神職のお祓いを受けた氏子総代や地区役員らが拝殿に上り、祭典が行われる。祭典の次第は、①一拝、②開扉、③献饌、④祝詞、⑤玉串奉奠、⑥撤饌、⑦閉扉、⑧一拝。祭典が終わると、参列者は社務所に下り、食事をいただく。

一三時頃、拝殿脇に据えられた大神輿に、宮司が御霊を遷す。

一四時頃、拝殿前にてミノコオドリが奉納される。演目は「みろく踊り」「かしま踊り」の二曲。

一四時半頃、社務所前にてミノコオドリが奉納される。演目は同じく「みろく踊り」「かしま踊り」の二曲。



ヨイマチの踊り(かしま踊り)

一五時頃、大神輿が青年たちによって揉まれながら石段を降ろされる。およそ四〇分かけて降ろされた大神輿は、手水舎脇のミコシハライジヨに中神輿・子ども神輿と並べて安置され、その前で神職が氏子らをお祓いする。

お祓いが済むと、浜出しの行列が調えられ、順に境内を出て浜のお旅所に向かう。行列は、①旗(錦旗一对と社名旗)、②神職、③太鼓、④天狗(猿田彦)、⑤長持、⑥神輿台、⑦子ども神輿、⑧中神輿、⑨大神輿によって構成される。神輿を担ぐ青年らは、道中は威勢良く木遣りを歌う。土地ごとに詞章や節回しが異なるため、これだけは地元の青年が歌わなければならないという。

一六時頃に三基の神輿が海に向けてお旅所に安置され、浜での祭典が行われる。修祓、祝詞、玉串奉奠の他、天狗による祓いの所作や、御神石と磯に対して神酒と塩を捧げる次第などがある。

浜の祭典が終わると、それぞれ神社に戻っていくが、このとき大神輿は所々で激しく揉まれ、最終的には石段を上って拝殿前に納められる。かつては日が落ちて暗くなっても神輿が納まらないこともあったというが、現在は一八時頃には納めるようにしているという。

二二日(スギマチ)

一一時頃から拝殿にて後日祭典が行われる。



ホンマチの踊り(みろく踊り)

一五時頃から、社務所前の広場でミノコオドリが演じられる。演目は「みろく踊り」「かしま踊り」の二曲。

ヨイマチと同様、スギマチの踊りもかつては衣裳を着けなかったが、調査を行った平成二五年はホンマチ同様の衣裳を着けて演じた。

一八時半頃から、社務所前の舞台で演芸大会が催される。

・初午の祭りの場合

一二時半頃から拝殿脇の稲荷社にて祭典が行われる。

一五時頃から、拝殿前、次いで社務所前の広場でミノコオドリが奉納される。演目はどちらも「みろく踊り」「かしま踊り」の二曲。

初午の祭りのミノコオドリは、かつては銘々の着物（とくに七つの祝衣着を仕立て直したもの）を着て踊ったというが、近年は夏の例大祭と同じ衣裳を用いる場合や、寒さが厳しいので普段着で演じる場合など様々である。

（二）衣裳・楽器・道具など

・現在の衣裳

踊り手は、木綿の白長衣に柑子色（こうじ）の麻布の上着を着る。上着は衿



現在の踊り衣裳

の縁取りが赤で、袖をくくるための赤い緒が付いている。背中の中央に、赤と白の菊綴（きくじ）状の飾りが付く。同色の細帯を絞める。足は白足袋に赤い鼻緒の草履である。近年は子どもの不足から成人女性も踊り手に加わることがあるが、その場合は銘々の浴衣を着る。

音頭取りは白長衣に、女性（ひ）は緋（あざ）の袴（はかま）を着ける。ただし袴の色に特段の決まりはないらしく、とくに男性は持ち合わせの袴を履いているようである。また男性は烏帽子（えぼし）をかぶる。

・楽器

音頭取りの一名が、杵（き）付きの締太鼓（しめだいこ）を右手の撥（はら）で打つ。

・道具

踊り手は右手に日の丸の扇、左手にオンベと呼ばれる採り物（とりもの）を持つ。オンベは夏の例大祭と初午の祭りでは異なるものを使用する。

夏の例大祭に使用するオンベは、角材状の白木の柄の先端に切り込みを入れ、そこに白紙で折った幣（ぬさ）を差し込む。柄の先端に近い側に銀色の円形の飾り（鏡という）を付ける。かつては柄の中央部に白紙を巻いていた『洲崎踊り——その概要と歌詞——』一六。

一方、初午の祭りに使用するオンベは、二本の青竹をテープで束ねて中央部に白紙を巻き、先端に榊の枝と五色の紙を重ねて折った幣を取り付ける。

（三）演目・芸態

演目は、本来は「みろく踊り」「つくば山」「かしま踊り」の三曲があったとされるが、「つくば山」の曲は、戦後は演じられたことがない。この「つくば山」は「みろく踊り」と同じ踊りであったと伝えられている。

・みろく踊り

はじめ踊り手は円形に並んで屈（かが）んで待つ。音頭取りは円の中心に

椅子を並べて座る。音頭取りが太鼓を三つ打ち、歌の冒頭「ありがたやすさきみなとに」と歌い出す。この一節の間は、踊り手は屈んだままで待つ。そして上記の一節の最後に打たれる太鼓を合図に、全員が立ち上がって、時計回り方向に回りながら踊る。左手に持ったオンベは常に肩に担いでおり、右手の扇を①手首を返して中央に向けて立てて構える、②右上から左下に向かって大きく払う、③身体をやや中央に向け、腰をかがめて胸の前あたりに構える、という動作を繰り返す。

歌は五・七・七・四（五）の詞形で、詞章は一四連から成るが、このうち現在は八連だけが歌い踊られる。全体で六分三〇秒ほどの踊りである。

・かしま踊り

踊り手は、先端が踊りの輪の中心に向くようにしてオンベを地面に置く。この踊りではオンベは一切使わない。右手には扇を持ち、左手は手のひらを上向きにして衣装の袂（たもと）を軽く握る。音頭取りが歌い出すと、その場で中央を向いたまま、①扇を頭上から前方に向かって大きく回し、②右足を軽く上げながら、扇を左脇から膝の前を通るように水平に払う、という動作を繰り返す。また音頭取りの囃子詞（はやしことば）に合わせて、膝の前で横向きに八の字を描くように扇を返す動作が所々に入る。

歌は七・七・七・五の詞形で、現在歌われているのは四連分だが、伝えられている歌詞はその倍ほどで、近世の流行歌のメドレー形式であることが聞き取れる。全体で四分ほどの踊りである。

六 由来・信仰

洲崎神社に関しては、役行者や源頼朝（みなもとのよりつね）にまつわる伝説や、東京

湾に入る船から寄進を受ける「お初とり」の習俗（松田 一九六一・一四）など、古今にわたる豊富な伝承を聞くことができるが、ミノコオドリの由来等については、地元にはこれといった言い伝えがない。

踊りの目的としては、初午の踊りが大漁と豊作を祈願するもので、夏の例大祭の踊りはそれに対する感謝を表しているといわれる。初午のオンベに五色の幣を使うのは、五穀の豊穡なる様を表しているという。また海上安全や悪霊退散など、様々な目的があわせて語られている。夏の例大祭では、ミノコオドリの奉納をしないと神輿が動かせないとも言われており、同様の伝承が波左間にもある。

初午に踊りを奉納する稲荷社は、もとは平島家が勧請した一族の氏神であった。後に洲崎神社の境内に遷され、地区の人々によって祀られることになった。しかし現在も平島家との結びつきは強く、地区の平島一族の一軒であるサジベエという屋号の家で、供え餅を用意したり、祭りの準備を担っている。

七 変遷

洲崎のミノコオドリは、かつて男性の踊るものであったと言われている。日露戦争の頃に地域の青壮年男性が兵役に取られたり、男性が遠方に漁に出て不在がちになったことから、女性が踊るようになったという。その踊りはオンベを持たず、頭に菅笠（すががさ）をかぶり、音頭取りと踊り手がかけ合いで歌いながら踊る男壮なものであったという（『洲崎踊り——その概要と歌詞——』）。また別の聞き取りでは、白張・烏帽子姿であったともいう。しかし男性のミノコオドリの体験談や直接の見聞は記録にも無く、詳細は不明である。

また以前は現在よりも年長の女性も踊っていたことは、現在の年

配の女性たちの話から明らかである。娘と呼ばれる年頃であれば誰でも踊れたといい、祭りに集まってきた若い女性が、場当たりで踊りの輪に加わるようなこともしばしばあった。いつの頃からか、月の障りさよのある者は踊れないということになったらしい。

他に変遷が明らかなのは衣装である。戦後しばらくまでは各自の浴衣で踊っていた。『房総文化』四号には、昭和三十三年（一九五八）の例大祭で撮影されたミノコオドリの写真が多数掲載されているが、踊り手は銘々の浴衣を着ている。

だが二年後の昭和三十五年七月一日に、第二回関東ブルック民俗芸能大会（於神奈川県横浜市）に「洲崎のみろく踊り」として出演した際の舞台の写真（東京文化財研究所蔵）では、踊り手は揃いの浴衣を着用し、さらに頭には編み笠をかぶっている。洲崎神社事務所には、これと同じ姿で境内で踊っている写真も残されている。おそらく大会出演のために衣装を揃えたものであろう。この出演がきっかけとなり、翌年、県の無形文化財に指定された。



昭和30年代と思われる写真

その後、昭和四八年には国の記録作成等の措置を講ずべき無形文化財に選択された。翌昭和四九年に現地公開補助事業の対象になった際に、あらためて揃いの浴衣・足袋・扇子を新調した。

さらに、昭和六三年に第三八回全国民俗芸能大会（於日本青年館）に出演する際に、富士市に本拠を置く普明会教団ふみえいかいからの寄付を受けて、現在使用している踊り衣装一式を新調した。この衣装の作成に

あたっては、地区の一軒の家から、その家の祖母の時代に踊りに使用していたという濃緑の上着が見つかったことから、それを参考にして現在の衣装を作成したという〔日本民俗芸能協会編 一九八九：一一〕。

八 所見

洲崎のミノコオドリは、早くに県の文化財指定を受けたために安房のみろく踊り系芸能の典型と考えられてきた。しかしその姿は近現代になっても大きく変転してきたことが、これまで述べてきたことから明らかである。一方で、他に現存するミノコオドリや、途絶してしまったミノコオドリ、さらにミノコオドリの類例についても調査が進んできており、洲崎のミノコオドリの特徴は、これら近接事例との比較によってはじめて浮かび上がってこよう。その際、いくつか注意すべき点を挙げてみる。

まず成人男性が踊るものであったという伝承である。他のミノコオドリがほぼすべて子ども、とくに女兒の踊りであることから考えると異質であり、一方で相模湾西岸の鹿島踊りとの関係が示唆される。しかしその姿について伝わっている情報は、現在のミノコオドリの姿とは大きく異なり、それほど古い時代のことではないことを勘案かんあんしても、検討の余地を大いに残している。

次に、洲崎のミノコオドリは「みろく踊り」と「鹿島踊り」の二種を踊り分けているという見解である。この見解の根拠は薄く、あくまで曲名に過ぎないものを一般的な踊りの種類と取り違えている。洲崎で「みろく踊り」として伝わる踊り歌が、至近の波左間では「かしま」と呼ばれていることから明らかだろう。むしろ両者の違いは、後者が近世の流行歌の収合である点に求められると考え

る。

初午の祭りでの奉納や、神輿の先払いと考えられる言い伝えなどは、他所のミノコオドリにも見られるもので、踊りの伝承を支えてきた心意を明らかにするためにも、今後の解明が望まれる。

九 詞章

*みのこ踊り映像記録作成委員会編（二〇〇九）所収のものを引用。平成二〇年まで音頭取りを務めていた田邊由造氏（大正二年（一九一三）生）の書き付けを、入江宣子（いりえのぶこ）が採録したもの。なお、行頭に✓がある行は、現在は歌われていない。

○みろく踊り

打出し三つ

ありがたや すさきみなとに みろくのふねが つづいた
ともへには いせとかすがの なかにはすさきの おんやしろ
すさきは 一にめいしょ ごまんどろを みたらして
みたらして ちごがおどれば おほやきと ながつく
七ひきの こまをてにもち かみにまいるも めでたい
一たびは まいりもうさうよ こがねさごう まかうもの
✓こがねさごうは およびもござらぬ よねさごう まこうもの
✓おびといて おびをむすべば かみにごえんが むすばるる
✓すのさきは いつも正月 おのこがみずを いただく
✓そのみずを おろしみたれば こもちこがね 九つ
✓二つおば これにさしおく 七つでくらを たてそうよ
✓てんじくの くものあいから さんじゃのかみが よねをまく
よのなかは まんごまつだい みろくよが つづいた

なにごとくも かないください なむや当所の 氏神様

○かしま踊り

打出し三つ

そろたそろたよ よくまたそろた
かしまおどりが よくまたそろた
✓じじもでてみる まごつれて
✓ことしやよがよい ほにほがさいて ますはいらぬで みではかる
うれしめでたの わかまつさまよ えだもさかへる はもしげる
✓さてもみごとな 八丈がしまよ ねからはいたか うきしまか
✓さどといちごは いよすじむかい はしをかけようもの ふなはしを
✓はしの下なる いようのとりが こぶなくわえて ふりさりと
五尺てぬぐい いよなかそめて わしにくりより やどにおけ
やどがよければ なもたたぬ
おさめのすさき さらばさらばの いとまごい

打終り三つ

○つくばやま（みろく踊りに使う）

*この曲は、戦後は歌われていないとのこと。ここに掲載したのは、『洲崎踊り——その概要と歌詞——』からの引用。

ありがたやつくばやまから
かんばいふみをかよはす
そのふみをひらきみたれば

なかはかごやまはなやま
 はなよりもつくばおやまは
 ごひやくよそんできがやく
 みたらしでこりをとりやれば
 ごまんどうでごまをたく
 ごまたかなばんとたきそよ
 とうしよきとうとごまをたく
 てんじくがちかいかけてそよ
 たたらふみがきこゆる
 たたらをばなんとふみそよ
 たたらたんと八つふむ
 十七がめしたこそでが
 なでにすそがやぶれた
 こうほどのほなみおどりで
 それですそがやぶれた
 てんじくのあまのかはらで
 しろいおけがながれた
 たなばたのみたなばたの
 ちよずおけがなされた
 てをだしてとらうとすれば
 七つなみがうちくる
 うつなみにはながさきそよ
 もどすなみにはながちる
 十七のそでがぬれそよ
 たすぎかけそよ七つ
 十七がさわいさがりて

こがねひしゃくで水をとる
 くれないはぬれていろます
 よのなかよかれと水をまく
 よのなかはまんごまつだい
 みろくよがつづいた
 なにごともかないください
 なむや当所のうじがみさま

参考文献

- ・成城大学民俗学研究班 一九六一 「房州洲崎部落の漁業民俗」『傳承文化』二一
- ・田村勇 二〇〇四 「南房総のミノコオドリ」『房総の祭りと芸能——南房総のフィールドから——』大河書房
- ・日本民俗芸能協会編 一九八九 『民俗芸能現地習得報告書 手踊りの系譜Ⅱ』日本民俗芸能協会
- ・俵木悟 二〇〇四 「ミノコオドリの系譜——鹿島踊・弥勒踊の源像から距離をおいて——」『芸能の科学』三一
- ・松田章 一九六一 「弥勒踊と鹿島踊」『房総文化』四
- ・松田章 一九七二 「房総の弥勒踊」『千葉県の歴史』二一
- ・みのこ踊り映像記録作成委員会編 二〇〇九 『DVD「安房のみのこ踊り」解説書』千葉県伝統文化伝承事業実行委員会
- ・（著者・発行年未表記）『洲崎踊り——その概要と歌詞——』洲崎踊り保存会・館山市教育委員会

川口^{かわぐち}のミノコオドリ

吉川 祐子

一 名称

セノコイ（勢之声）

二 伝承地

千葉県南房総市千倉町川口^{ちくわちょうかわぐち}

三 期日・場所

期日 一月一九日 一四時から

場所 川口の鹿嶋神社および川口地内

四 伝承（運営）組織

保存会はない。川口地区の女性たちによって踊られてきた。しかし、歌は七つの組から出ているウジコ（氏子総代、男性）七人がうたう。

五 行事・芸能内容

（一）次第

新春祈禱^{きとうびしや}社式典 ウジコ（当地では氏子総代をウジコと称す）や招待客が参列して、鹿嶋神社で通常の神事が行われる。拝殿に入る前の八時半から、境内にある要石^{かなめし}の前でも簡単な神事がある。

湯立式^{ゆたてしき} 境内に設けられた二つの釜では湯が沸いている。湯は早朝からビシャダイ（後述）の男性が沸かし始める。湯立ての神事が九時一〇分頃から始まる。湯釜の前で宮司による神事があり、終わ

ると神饌の酒や塩、洗米を湯に入れて清める。湯立ては、セイメイノマツリ屋敷（ミヤモトとも呼ばれる）といわれる家の主が代々担当してきた。白衣で麻の襷（両襷）をし、鉢巻きをする。束ねた熊笹を両手に持ち、これで二つの釜の湯を人々にかける。この湯に当たると無病息災だといわれている。また、氏子は土瓶を持って集まる。湯立てが終わると釜の湯を土瓶にもらって帰宅し、家族で飲んで無病息災を祈る。鳥居下では、ビシャダイ（当番）の女性たちが帰宅する人々へお神酒を振る舞う。

直会 一〇時から川口青年館において直会が始まる。新春祈禱備社参列者の、漁協の主催者・漁協連絡員七名・区長以下区の三役・組長（七名）・鮑海士・営漁部会・若海会・海老網会・小学校長・老人会長・消防団長・青年会長・農耕部長・副部長・鹿嶋神社宮司・氏子総代（七名）が列席する。

この行事の主催者は、昔はムラだったが途中から地元の漁協にかわった。漁協が広域合併して東安房漁業協同組合となった今でも、旧川口漁協の生産者が主催し、神社の式典や直会の経費の全額を負担している。なお、湯立式とセノコイはウジコの担当である。

直会の食事は仕出し料理に変わったが、かつてはビシャダイの女性たちによって作られた。今でも神饌だけは料理して直会で共食^{きうしょく}する。魚（金目鯛）は煮付けにし、野菜はすべて刻んで煮込む。直会は、神事の後すぐに始まるために会場の台所は大忙しである。餅は人数分に切り、オサゴ（洗米）といっしょに参加者に配られる。

直会が始まりしばらくすると、ビシャダイの女性たちによる「セノコイ」が始まる。次に「めでたいな」が踊られ、宴会のお開きには「大漁節^{だいりやうせし}」が踊られる。この「セノコイ」「めでたいな」「大漁節」は、川口の祝いの席では欠かせない踊りで、祭りに限らず自宅での

祝い事では必ず踊られてきた。しかし、料理屋で祝いの宴席を設ける時代になり、この習慣にも陰りが見え始めている。

セノコイ 一四時から鹿嶋神社でセノコイ（ミノコオドリ）が始まる。少女が踊ってきたが現在は三人しかおらず、ビシヤダイの女性たちも参加して踊る。終わると川口地内を次のように踊りまわる。区長宅・神明様（個人でまつる）。夜泣きの神さま・漁業組合長宅・青年会長宅・弁天様（個人でまつる）・淡島様（個人でまつる）・オオビシヤ（ビシヤダイのドウモト）・八雲様（個人でまつる）。神像は牛頭天王で、天王様と呼ばれている、最後はミヤモトである。終了は一五時だった。

ドウワタシ いっぱう、それぞれのドウモト（宿になる）ではドウワタシが行われる。ドウモトは組ごとにある。川口は七組に分かれているので七つのドウモトがある。なお、この「組」をかつてはダイ（台）と称していた。一組は川口台、二組は下台、三組は上台、四組は西台、五組は浜台、六組は中台、七組は新しくできた組なので旧名はない。

ところで、当地のオビシヤは「御歩射」ではなく正月行事をさす民俗語彙である。したがって、ビシヤダイは正月の祭礼を担当する当番台という意味で、「ビシヤ台」と表記するとわかりやすい。七組あるので、ビシヤ台は七年ごとに順繰りにまわってくる。今年は一組、来年は二組である。なお、ビシヤ台の年にドウモトになる家をオオビシヤ（大ビシヤ）あるいはホンビシヤ（本ビシヤ）といい、なかなか巡り合わないことなので慶事として喜ばれる。

さて、ドウワタシの方法は組ごとに異なる。一組の場合は、ドウモトの床の間に掛けられた天照皇太神の掛け軸（個人持ち）の前で、次のドウモトが「ご苦勞様でした」と今年のドウモトにお神酒をつ

ぐ。今年のドウモトは、「来年よろしくお願いします」と次のドウモトにお酒を注ぐ。魚（金目鯛）の煮付けを皿に配り肴の用意をする。金目鯛を肴に酒をいただく（といっても儀式的に飲むだけである）。「来年はうちですからよろしくお願いします」と新ドウモトが挨拶をする。ついで、全員にお神酒を回して互いに「ご苦勞様でした」と飲み、ドウワタシは終わる。

ドウワタシの出席者はその組（台）全戸の主婦である。主婦がない場合は男性が出る。一組は今年のビシヤ台だったが、ドウワタシは組の行事でビシヤ台のドウワタシではない。ビシヤ台にはドウワタシはない。

なお、一組をはじめ大半の組は順番でドウモトを渡すため選ぶ儀式はないが、二組は籤引きをする。紙縫籤こやうくしを用意してすでにやった家を抜いて籤を引く。籤を引きあてると、自宅に帰る時には籤を冠にして新ドウモトを先頭に参加者一同は旧ドウモトを出る。組の人々に新ドウモトを知らしめる手段なのであろう。

ドウワタシが終わると直会が始まる。この席でも「セノコイ」「めでたいな」、そして「大漁節」が踊られる。

以上でオビシヤの一連の行事は終わる。

（二）衣装・楽器・道具

衣装 踊り手は自前の着物の上に白いシタタレを着る。宴席で踊る場合はシタタレは着ない。歌い手は、左右に金色の丸がついた立烏帽子を被り、白袴にシタタレを着る。

楽器 小太鼓（締め太鼓）一つ。明治五年（一八七二）の銘がある。昔は笛もあった。

道具 オンベ（白い御幣）と団扇（「祭」と文字が書かれる）が

採り物である。オンベの柄の長さは約九〇センチ。現在は木材できて
いるが、かつては身長に合わせて竹で各自用意し、紙垂もつけて出
来上がったものを持って参加した。

(三) 演目・芸能

「セノコイ」「めでたいな」「大漁節」が土地の芸能として伝わっ
ている。いずれも慶事の宴席で踊られる。しかし、「セノコイ」は
祈願の踊りで、宴席以外の神の前で踊るのが本来である。

セノコイ セノコイには「口上」がある。ミヤモトが口上を始め
ると、要所要所で関係者が「ヤアー」と返事を入れる。そして、口
上の最後に「それもようござりましょう」と返すと踊り出す。口上
の間は、オンベを左肩に置き団扇を右手に持って左回りにまわる。
踊りが始まってでも幣束は肩から外すことはなく、団扇を振って左回
りに踊る。踊るのは、「九 詞章」の「鹿嶋神社舞歌」(一) 全歌と

(九) の後半だけで途中は省かれる。(九) の後半は「ヨー何ごと
もナ叶えくだされヨ ソリヤー南無や当所のオイナ氏神 大神ペロレ
トレ大神ペロレトレ」である。セノコイは祈願の踊りなのである。
昔は笛もあった。吹いたのはミヤモトで、先々代までで終わった。

歌い手はウジコだが、実際にはうたうことができずテープを流し
ている。しかし、テープに吹き込まれているのは女性の歌で、その
後継者がいるにもかかわらずテープが使われる(「八 所見」参照)。

めでたいな これは手踊りで採り物はない。宴席でうたいながら
踊る。歌の半分が終わると漁協組合長が「こりやまーた一座 川口
繁昌すんまーいた」と入れ、参列者が「ヨーイサアー そこよしこ
こよし おっしやんしやんのしやん」と手を打って締める。このと
き踊り手は踊りをやめ正座して「ヨーイサアー……」に声を揃えて



右上 直会でのセノコイ 大人だけで踊る。うたうのはウジコだが、
実際には女性がうたった。

左上 鹿嶋神社でセノコイ 主役は少女で、全員がシタタレを着る。
うたうのはウジコである。このあと川口地区を踊って歩く。

左下 ドウワタシでのセノコイ 幣束ではなくドウモトが用意した
熊手を使って踊る。うたうのは女性である。

撮影：全日本郷土芸能協会

手を打つ。歌の最後も同様に祝い言葉を述べて手打ちで締める。

会場がドウモトの場合は、踊りが終わって腰を下ろすと「こりゃまーた一台中繁昌すんまーいた」「ヨーイサーそれよしここよしおっしゅんしゅんのしゅん」と手を打つ。

大漁節 これも手踊りで、宴席の最後を締めくくる踊りである。

オビシヤの直会の場合は、漁業組合長の「こりゃまーた一座 皆様繁昌すんまーいた」、参列者の「ヨーイサーヨイヨイサ そこよしここよし おっしゅんしゅんのしゅん」の手打ちで締める。

六 由来・信仰

信仰 オビシヤは、古くはムラが主催していたが途中から漁協にかわった。金銭的な理由だったようだが、川口は漁業が生業の主体であり、漁業の隆盛と海上安全祈願は人々の共通の願いである。

湯立てとセノコイは、ムラの費用でウジコが中心となる。セノコイは、「何ごととも叶えくたされ 南無や当所の氏神」と唱えて締めくくるように、生活全般の祈願として伝えてきたとみられる。湯立ての湯に無病息災の信仰があるのにも通じる。

セイメイノマツリ屋敷 神社の入口に、セイメイノマツリ屋敷といわれる七郎左衛門（屋号）という民家がある。ミヤモトともいわれる。鹿嶋神社の神霊が普段とどまっている家で、祭典で本殿が開けられると神霊は本殿に移動すると当家では伝えている。当家の屋敷の裏手に石像があり、この伝承に関わる石像だろうと信じられてもいる。当家の裏手の道路側に池があった。御手洗池といわれたようだ。当家は鹿嶋神社境内の入口にあり、神がとどまるといふ伝承から、あるいは先祖が鹿嶋の神を奉じて川口にやってきて住み着いたとも考えられる。過去に移転を試みたが、「元の屋敷に戻りたい」

という夢のお告げがあり、建物を戻したといういい伝えを持つ。

ミヤモトにはいくつかの世襲の役割がある。祭典の神饌の準備（昔は餅もついた）・湯立て・セノコイが区域をまわる時にウジコにフリダシのお神酒（無事に終わるように）、戻ってきてミヤモトで踊り終わった時にフリコミのお神酒（ご苦労様）を振る舞う・セノコイの口上を述べる・セノコイの笛を吹くなどである。

普段はミヤモトに鎮まる神だが本殿が開くと村の神になる。その名は鹿嶋であり、セイメイと呼ばれる。祈願の踊りのセノコイとも深く関わる。示唆に富んだ伝承を持つセイメイノマツリ屋敷である。

七 変遷

ミノコオドリとして知られているが、この名称は地元の高齢者には通用しない。セノコイが伝統的な名称で、テンジクと呼ぶ古い世代もいた。現代の口上役のミヤモトによれば、受け継いだ二〇数年前にはミノコオドリだった。さらに古く、昭和二年の記録（『芸能の科学』31）には「めの子踊り」とある。しかし、明らかに大正時代から踊ってきた女性たちはセノコイという。いつからどうして名称が変わったのか、当事者にはわからないという不思議な変化である。なお、最近では「鹿島踊」ともいわれるようになり、若い人にはこの名称が広がりつつある。

踊り手の年齢にも変遷があった。大正生まれの時代は少女の踊りだった。そのころはシタレはなく、戦後から着るようになった。次に婦人の踊りになり、また少女の踊りに戻った。今は立て前は少女だが三人だけしかおらず、今後増える見込みもなく、成長とともに減る。再び大人が主役になる時代が近づいている。

八 所見

セノコイは神社の正月祭りが終わると始まる。直会がはねると再度神社に集まるのは、双方をきちんと区別しているからであろう。当地のオビシヤは、明治以降の神社神道の祭りと土地の民俗祭りとを上手に融合させてきた祭りなのである。

そのセノコイは、祈願芸能として、また宴席で踊る祝いの踊りとして踊られる。全く同様の踊りだが、踊る場と踊り手が変わり、歌い手が男性から女性に変わるだけである。会館での直会ではウジコも歌い手として踊りの輪の外側にいたが、実際にはビシヤ台（一組）の女性がうたった。各台のドウワタシは女性ばかりの集まりなので女性がうたって踊る。つまり、女性の間では確実に歌の伝承があり、うたえないウジコにこだわる理由はない。もちろん、かつてのウジコはうたっていた。しかし、難しいからうたうのは大変だと高齢の男性の発言があり、歌の伝承に消極的である。だが、ウジコの歌にこだわる。

漁業が盛んだった頃には男たちは漁に出ていて、陸の仕事や台の付き合いは女性の役割だった。こうした日常生活の女性の役割と、神事の踊りを女性が担ってきたことは深い縁があるにちがいない。

しかし、ウジコの歌にこだわるセノコイの歴史に目をやると、今とは違う姿が浮かんでくる。それは口上がヒントになる。口上では、「ニギ達がおもしろいみのご踊りをはじめ申そう」と宣言する。ニギ達、すなわち禰宜が踊るといっているのである。この口上が生まれた頃、踊り手は禰宜であった。当地のウジコには、単なる氏子総代ではない歴史があるとみてよい。これを解明するためには、セノコイと深く関わってきたセイメイノマツリ屋敷の解明が不可欠である。

九 詞章

ここには、現在地元で所持している歌詞を掲載した。「鹿島神社舞歌」が一から九まで番号があり九番まであるようだが、頻繁にうたわれてきたのは一・二・四・九番であろう。記録はこれだけである。「ミノコオドリの系譜」（『芸能の科学』31参照）によればほかの歌の記録もあるが、今回は見られなかった。なお、掲載にあたって実際の様子がわかるよう説明的部分を若干付け足した。

「鹿島神社舞歌」

口上

（ミヤモト）ヤーレヤレ鹿島では 目出度い事が来たりや申そう

（一同）ヤアー

（一同）ヤアー

（一同）ヤアー

（一同）ヤアー

ずつと上なるニギが三百三十三人
ずつと下なるニギが三百三十三人
オイラの様なカスニギが三百三十三人
合わせて九百九十九人のニギ達が おもしろいみのご踊りをはじめ申そう

（一同）それもようござりましょう

（一）ソリヤーてんじくがなナ ちかいげでそよ

ソリヤーたたらふむが オイナきこえる

（踊り手） ハー大漁大漁

ヨーたたらをばナ なんとふみそよ

ソリヤーたたらタンと オイナやつとふむ

ハー大漁大漁

（二）ソリヤーてんじくのナ くものあいからナ

ソリヤーさんじゃのかみが オイナよねをまく

ハー大漁大漁

ヨーまくよねはナ やほではちこくヨ

ソリヤーよのなかよかれと オイナよねをまく

ハ―大漁大漁

(四) ソリヤーじゅうよしちがナ めしたこそではナ

ソリヤーなぜにすそが オイナやつれそよ

ハ―大漁大漁

ヨーあらほどのナ はなみおどりでヨ

ソリヤーそれですそが オイナやつれそよ

ハ―大漁大漁

(九) ソリヤーよのなかはナ まんごまつだいヨ

ソリヤーみろくみよが オイナつづいた

ハ―大漁大漁

ヨーなにこともナ叶えくだされヨ

ソリヤー南無や当所のオイナ氏神 大神ペロレトレく

「鹿嶋神子舞歌」

○ソリヤー天じくがなナ ちかいげでそよ

ソリヤーたたらふむがオイナー きこえる サ―サ大漁く^{（踊り手）}

ヨーたたらをばナ なんとふみそよ

ソリヤーたたらくとオイナー やつとふむ サ―サ大漁く

○ヨーありがたや かしまうらからヨ

ソリヤーみろくのふねがオイナー つづいた サ―サ大漁く

ヨーともへにはナ いせとかすがのヨ

ソリヤーなかはかしまのオイナー おおやしる サ―サ大漁く

○ヨーよのなかはナ まんごまつだいヨ

ソリヤーみろくみよがオイナー つづいた サ―サ大漁く

(踊り手) ヨーなにこともナ叶えくだされヨ

ソリヤー南無や当所のオイナ氏神 大神ペロレトレく

「目出度いな」

一、めでたいナーヨ^{（踊り手）}（チヨイト） めでたいものはヨー

ヨーめでたいものは お船玉だよナーヨ

（アーチヨイトメく^{（踊り手）}）

一、朝おろすナーヨ（チヨイト） 朝おろす晩にやヨー

ヨー朝おろす晩にや黄金^{（こがね）}つんでくるナーヨ

（アーチヨイトメく）

一、ここにしがナーヨ（チヨイト） ここにしが吹かばヨー

ヨーここにしが吹かば船橋のり込めナーヨ

（アーチヨイトメく）

一、船橋のナーヨ（チヨイト） 船橋の茶屋でヨー

ヨー船橋の茶屋でのんだるその酒ナーヨ

（アーチヨイトメく）

一、みりん酒ナーヨ チヨイト みりん酒さけかヨー

ヨーみりん酒さけかお江戸の地酒かナーヨ

（アーチヨイトメく）

(組合長) こりやまゝた一座 川口区繁昌すまゝいた

(参列者) ヨーイサアー そこよしここよし おっちゃんしゃんの

しゃん

一、銚子のナーヨ（チヨイト） 銚子の河でヨー

ヨー銚子の川で鯉鮒つりあげナーヨ

（アーチヨイトメく）

一、君様にナーヨ（チヨイト） 君様につらせヨー

ヨー君様につらせ酒の肴にナーヨ

(アーチョイトメく)

一、磯村のナーヨ (チョイト) いそ村の名主ヨー

ヨー磯村の名主小唄が好きそだナーヨ

(アーチョイトメく)

一、小唄にナーヨ (チョイト) 小唄にのせてヨー

ヨー小唄にのせて三味を弾くそだナーヨ

(アーチョイトメく)

(組合長) こりやまーた一座 川口区繁昌すまーいた

(参列者) ヨーイサアー そこよしここよし おっしやんしやんの
しやん

「大漁節」

へ一番とせ 一番づゝに積み立て、 川口押込む大矢声

(踊り手) 浜 大漁だネ

へ二つとせ ふたまの沖から外川 (とがわ) まで つゝいてより来
る大いわし 浜 大漁だネ

へ三つとせ 皆一同にまねをあげ 通わせ船のにぎやかさ

浜 大漁だネ

へ四つとせ 夜昼たいてもたき余る 三杯いつちよの大いわし

浜 大漁だネ

へ五つとせ いつ来見てもこの浜は あき間もすき間も更になし

浜 大漁だネ

へ六つとせ 六つから六つまで粕割が 大割小割で手におわれ

浜 大漁だネ

へ七つとせ 名高き利根川高瀬船 粕や油を積み送る

浜 大漁だネ

へ八つとせ 八だの沖合若い衆が 万祝揃えて宮まいり

浜 大漁だネ

へ九つとせ この浦守る川口の 明神御利益あらわせる

浜 大漁だネ

へ十とせ 十がかさなりや百となる 千をとびこす万両年

このおめでたや

(組合長) こりやまーた一座 皆様繁昌すんまーいた

(参列者) ヨーイサアーヨイヨイサ そこよしここよし おっしや
んしやんのしやん

参考文献

- ・俵本悟 二〇〇四「ミノコオドリの系譜」『芸能の科学』31 東京文化財研究所
- ・田村勇 二〇〇四『房総の祭りと芸能 南房総のフィールドから』大河書房

成田のおどり花見

星野 紘

一 名称

成田のおどり花見

二 伝承地

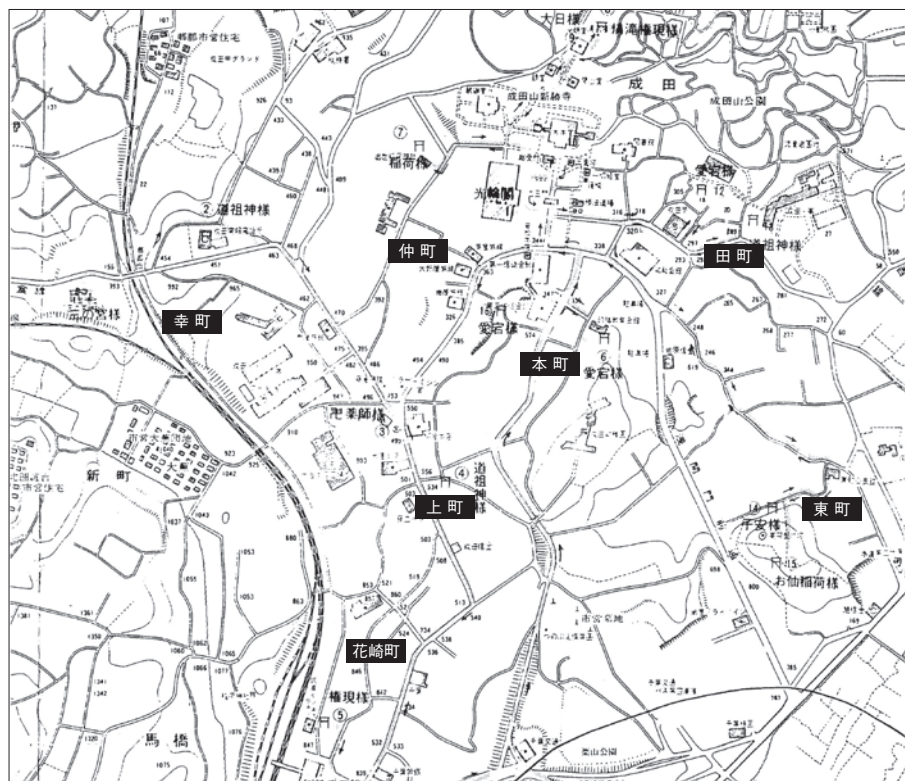
千葉県成田市

成田市といえば、今は国際空港の所在地として知らない人がいなくらい著名となった千葉県北部の市であるが、周知のようにここは、江戸時代から不動明王で名高い成田山新勝寺の門前町として栄えて来た所である。明治二年（一八八九）の町村制施行の折に成田村などの四つの村が合併して成田町となり、さらに昭和十九年（一九五四）に他の六カ村を合併して成田市となった。現在の市域のうち旧成田村に相当する現在の七カ町、すなわち本町、仲町、田町、幸町、上町、東町、花崎町は成田山新勝寺の門前町を形成している。これら七町にある女人講の人たちが年番交替でこの行事を実施して来た。

三 期日・場所

毎年四月三日に行われる

これが踊られる場所は、七カ町の一六カ所ほどの神仏のある所で、その年の当番町の女人講の一行が早朝から夕方暗くなるまで、一つ一つ巡拝しながら執り行う。はじめに各神仏への「たたえ歌」が一同で詠唱され、当番町の女人講の面々と接待する各町女人講の面々との間での「ほめ歌」の応酬があり、それからこの「おどり花見」が踊られる。聞き取り調査時の平成二五年時（その年の四月三日）



図I 「おどり花見」巡拝路（昭和54年4月3日 仲町子安講中の場合）

は、当番町が本町で、次のような順序で十六神仏を巡ったとのことである。一番目が郷部の埴生神社での三の宮様、八雲神社、続いて薬師様（幸町）、道祖神様（上町）、権現様（花崎町）、愛宕様（仲町）、その後成田山へ行き、御不動様、清龍権現様、ひらい堂（大日様）、稲荷様、新勝寺を巡り、その後道祖神様（田町）、愛宕様（田町）、子安様（東町）、愛宕様（東町）、愛宕様（本町）であった。この巡

拝のまわり方にはきまりがあつて、当番町が今回の本町のように台の町一帯に所在する町内の場合には、最初に三の宮様を拝んだ後に下の町一帯の町内の神仏を拝み、それから成田山の諸神仏を巡り、その後に台の町一帯をめぐり、その最後に台の町内の当番町の神仏を拝む。これに對して、下の町の方の当番町の女人講の場合は、最初に三の宮様を拝んだ後に、成田山に行つてその諸神仏を巡り、その後に台の町方面の町内を巡り、それから下の町方の各町内の神仏をめぐり、最後が下の町の当番町の神仏を拝んで閉じる。

四 伝承（運営）組織

七町それぞれの女人講ごとに共通した行事内容が伝承されていて、毎年輪番でそれを執り行つており、その活動内容と組織は小倉博氏の一文によれば次のようである。活動は、四月三日のおどり花見の神仏巡拝行事と、その前年の二月一八日の女オビシヤが主なものである。平成二五年おどり花見の当番町の本町の女人講の場合は、前年、二四年の二月一八日の女オビシヤの時に、その前の当番町（東町）の女人講からオカゴと称する御神体（竹籠、縄などでくるまれている子安観世音）を受け取り、一年間それを大切に祠守りして来、二五年の二月一八日の女オビシヤの時に次の当番町（仲町）の女人講の人たちにオカゴを受け渡していた。そして当年のおどり花見の行事を仕切つたのである。

組織について言えば、各町の女人講ともに、元老、世話人、一般婦人とで組織されている。元老は、女人講に入っている年寄りのことで相談役に相当する。元老といつても資格上の規定はなく、年をとつてくれば自然と元老とみなされる。世話人は、女人講の中心になる人たちで、諸雑用から会計まですべてを受け持っている。踊り

花見の時間割り、練習の日時、衣装選びなども世話人がする。町内や他町との連絡もしなければならず、このため特に顔がきくといったような人が選ばれる。世話人の選出は選挙ではなく、その前の世話人が適当な人物を指命する。一般婦人はその他すべての婦人である。この女人講への仲間入りは、古くは酒一升といわれていて、二月一八日のオビシヤの時に持参し、ここで皆に紹介された。今はこの酒一升をやめて、入会金システムをとっている町内もある。女人講の経費は、会費、入会金、おどり花見の時にあがる商店や個人からのご祝儀その他で賄われている。

女オビシヤは二重に展開されている。先述のオカゴの受け渡しが行われるオビシヤは、当該年の当番町と来年の当番町との間のみで行われるもので、女人講の町々からすれば、それは七年に一度まわつて来る大事である。これとは別に、七町の女人講内ではそれぞれに個別に毎年オビシヤを行つてなのだ。その当番は各町内の女人講を構成している隣組（班ともクルワとも呼ぶ）の人たちが毎年輪番につとめている。それは六年に一度まわつてくる。この時はご神体の受け渡しはなく、ただ子安観音や十九観音などの尊像や掛軸を安置して、その前で飲み食い歓談をしているとのこと。

五 行事・芸能内容

七年に一度の当番町の女人講の一行が、各町内の神仏を巡拝しながら神仏への「たえ歌」を詠唱し、そして訪問先の女人講の人たちと「ほめ歌の応酬」を行い、さらに広い場所で弥勒踊りを歌い踊るのである。これらに関わる歌は一括して花見歌と称されている（ちなみに、各町の女人講の人たちが持っている歌詞集はいずれも『花見歌』と題されている）。これについては次の六のところで補足したい。

その實際を筆者は昭和五四年（一九七九）の四月三日に見学しており、たまたまその折の記録を誌した一文がある⁽³⁾ので、それを引用再構成してここに紹介したい（この年の当番町は仲町であった）。折りしも当番町の女人講の人たちが田町の道祖神様、愛宕様を巡拝に訪れた時のものである。

① たたえ歌

一行が詣でる神様の所に到着すると、神仏の前に太鼓（締め太鼓）叩きの少女を先頭にたてて、その後方に世話役の人たちが威儀をただして居並ぶ。少女は右手の一本バチを大きく背後からふり降ろすようにしてゆつくりと、トントン、トントン、トントンと三回皮面を叩く。最初の二回は右斜め上方から打ちおろし、最後の一回は左肩上方からバックハンドのかたちで打ちおろす。これに合わせるようにして歌われる道祖神様のたたえ歌が、

～ 当年は世なみよければ

よなみよしの風がふく

夜よさめひるはひでりで

みなこうさくが八重にさく

さかえめでたきはるをこと⁽⁴⁾。

② ほめ歌の応酬

これはたたえ歌が終わった後に行われるものだが、この日の行事に携る女人講の人たちの気持ちがかがえ、その歌のやりとりの晴れやかさはこの行事のゆかしさを物語っているように思う。白髪毛庵^{しらげ}という堂内に招じ入れられた当番町の女人講の人たちは、田町の人たちと対面するかたちで居並ぶ。はじめに田町側から、先刻の当番町の人たちのたたえ歌への声ほめの歌が、

～ 今日の お客様の

花見の声の うつくしさ

春なれば 梅に鶯

八千八声の 時鳥

と返される。

次いで田町側から客人にお茶を出す、その時の歌、

～ 今日の お客様に

何か何よと おもえども

おさかなは と、のえ申さず

おすすめ申すは お茶ばかり

と、粗末なものしかお出しできないが、どうぞ召し上がって下さいと勧めるのだ。すると、それを受けた当番町側から、いやいやそんなことはありません、大変おいしいお茶ですよと返される。

～ これさまへ まいり申して

いろよきお茶を いただいて

手にとれば しんのかおりで

ふくめば宇治の かんばしや

この後、白髪毛庵下の駐車場で弥勒踊りほかが演じられたが、田町側から赤飯、煮しめなどの祝いのごちそうが当番町の一同に配られた。二一才の時嫁いで来た年から六十数年間、ずっとこのおどりは花見に携って来たという上町の後藤ちよさんによれば、田町という所は昔からごちそうの沢山出るところで、以前はイモの煮ものなども鍋ではなく釜でたいいていたという。それを大きな皿に山盛りに出したのだという。だから田町に行った時には、

～ これさまへ まいり申して

ことのほかの ごちそうに

やどもとへ かえり申して

二日三日の にさん ものがたり

というごちそうほめ歌を決して歌い忘れてはならないぞと言いな
わされて来たという。

③ 弥勒踊り (歌)

右のほめ歌のやりとりの後、境内などの広場で花万灯を中にした
りて一同輪になり、輪の中に位置した太鼓 (締め太鼓) 役の打音の
リズムにあわせて、弥勒踊りが時計まわりに踊られる。まずはじめ
に一同輪の中心に面したまま拍手をした (一〇回程度) 後、次の口
上が唱えられる。

みなかみがみの お、せなれば

みろくおどり おもしろや

引き続き踊りとなる。ア、右足を左方向に一步運んで左半身と
なり、左手を耳のあたりまで持ちあげ、その袖の袂を右手で抱え込
んでから払う。イ、それから左足も左方向へ運んで身体全体が円の
中心向きとなつて、右足を輪の中心方向に踏み出し、両手を下から
すくいあげるようにして胸前に持つてくる所作を二回くり返す。ウ、
続いて右足を右斜め後方に引いて右半身となり、右側面の下方で拍
手を打つこと二回。以上のア、イ、ウの三動作を繰り返す。

その間に左の歌詞が女人講の人たちによって歌われる。

へまことやなら (誠) かしまふなといヨ (鹿島船戸へヨ)

みろくぶねが ソリヤ ついた アノ

ともえにはナ (伊勢) いせとかすがのヨ (春日)

なかはかしまの ソリヤ(中) おやしろ (鹿島) (大社)

おやしろのナ (御愛堂) 一の名所はヨ (御手洗)

ごまんどうでエナ (龍見) みだらし

みだらしでナ (龍見) ちごがおどればヨ

ごまんどうでエナ おまつり

おまつりはナ (何) なにとまつるやら (祀)

うきよゆたかとアト よねへまく ソリヤ(浮世)

かまくらはナ (鎌倉) いつも正月ヨ (汲)

おとこが水をオナ (汲) くみそろう (候)

そのみづをナ おろしみたればヨ

かまくらえびがアノ ソリヤ(鎌倉海老) 九つ (三)

五つをばナ (神) かみにあげそろヨ (土)

四つをばくにのオナ ソリヤ(国) みやげに (土産)

四つをばくにのオナ ソリヤ みやげに

あんば大杉大明神

悪魔を払つて ヨイヤサ

なお、右歌詞の最後の二行での動作は調子が変わる。右足を一歩
後方へ引くとともに、右手を
大きく振りあげて後へ引き、
続いて右足を一步輪の中心に
向かつて踏み込むとともに、
前かがみとなりながら右手を
前方へ持つて行き、下方で拍
手を打つこと二回。この動作
を三回繰り返す。

六 所見

○花見と弥勒踊りについて

当該行事の呼称「おどり花



平成21年幸町女人講による弥勒踊り (成田市教育委員会提供)

見」に見られるように、^{ハナミ}花見^ミという用語は、千葉県方面の祝い歌や行事名称となっている独特なものである。隣接する埼玉県や神奈川県などの関東南部の地での祝い歌は、^ミはつうせ^ミとか^ミこれさま^ミなどと呼ばれていて、花見とは称されていない。このことは何を物語るのだろうか？ その来歴は不明であるが、参考までに、弥勒歌（踊り）が、当該「おどり花見」のように、行事や祝い歌の花見歌（踊り）の一つとして登場するオビシヤの事例を紹介しておきたい。

まず「おどり花見」についての解釈を、大野政治氏の一文から引用しよう。⁽⁶⁾

普通ならば「花見おどり」というべきものを「おどり花見」といつている。おどりが主で花見を従としていたためであり、またこの場合の「花見」ということは、花を觀賞するというより一種の行事を総称しているようで、「花見おこと」と書かれた歌詞もあり、神いさめの行事として伝承されたものであろう。

確かに^ミ花見^ミは花の觀賞ではなく、一種の神行事を指しているであろうという見方は筆者も同感である。先述のように神仏への^ミたたえ歌^ミ、^ミほめ歌の応酬^ミ、^ミ弥勒踊り（歌）^ミの全てを一括して^ミ花見歌^ミと称していることから、^ミ花^ミとは祝いや踊りなどの歌ということとも言える。あるいは、例えば^ミ立ち花見^ミという用語があるが、これは客人の一行が訪問先を辞する時のものであり、このように辞儀、あいさつといった儀礼的な交際のやりとりといった意味ももっているようだ。それでは、なぜ「おどり花見」と称されているかについて筆者が感じていることは、二月一八日のオビシヤの時

には^ミほめ歌の応酬^ミの^ミ花見^ミ歌だけなのだが、四月三日には^ミ弥勒踊り^ミの^ミ花見^ミも歌い踊られるから、そのことが強調されてこの呼称になったのではないかと推している。

ところで、成田以外の地でのオビシヤの折に弥勒（鹿島）歌の踊りがおどられる事例には次のようなものがある。例えば桜井徳太郎氏は『日本民間信仰論 増訂版』の中で、千葉県、茨城県の太平洋側にまたがるオビシヤについて言及しているが、⁽⁷⁾その中で旧茨城県稲敷郡の金江津村（現稲敷市）周辺のオビシヤの折りのハナミ行事を紹介している。ご神体を本年当番の方から次年度当番の方への受け渡しの花見歌の中で、次のような安波弥勒の歌詞が歌われる。

安波弥勒始まる。誠や、神が島を船で降りさ、おやそんでは、弥勒つゝいつゝいた、チャファイ、ファイ、リイイヤ、イイがつゝいつゝいた、とんぼには、伊勢と春日、中は鹿島の御社、おやそんでは、一度は詣りもろしや、しいつで金のいさいご（三合）で詣ろ、やれ／＼皆さん聞かんせ、今年しや世がよい豊年としよ、浜が大漁で岡万作で、枅なんてめんどくせ、箕でもつて計り込め、計らないでどうするもんか、おやからどっこい、おやからどっこい、弥勒がつゝいつゝいた。

ご神体を受け取る花見歌の中では、「この安波弥勒を箒を使って踊りながら謡う。」と註記されていて、これを踊っていたことが解る。次に、踊りは踊られないものの、ご神体の受け渡しの際のたたえ歌の中に、弥勒歌が歌われている事例を、今井福治郎氏が『房総の祭』の中で、旧千葉県香取郡小見川町一の分目（現香取市）鎮座の境宮神社の初午祭における老婆連のおつとめを紹介しているが、⁽⁸⁾ご

神体の受け渡し行事の折、受け当番の家で花見歌が次のように唱えられたという。次の(七)と(十)はまさに弥勒歌である。

(五)、これさまの御座の内に、産土神がおつつきて、七段の棚を飾りて、七重の七五三を八重張る張る。

(六)、わらわらが花の遊び、神の前の御法楽。御法楽が叶ひ申せば、いくさに勝たせ給はれや、いくさに勝たせ給はれや。

(七)、世は四十よねんせばよ、あとに弥勒が続いた、あと四年。弥勒よなみ、天から米が降りやくる。その米をはきよせて、みな東国へひろめる。

(八)、四国から荒い風が吹いてくる。麦稲にあへがせぬやう、神に任せおき申す。

(九)、鹿島神風そよと吹く、吹けどあれねど、さくにあたるな、さくにあたるな。

(十)、産土のや、三笠、三笠山で、黄金の花がソリヤ三つ咲く、その花はなんと咲く、その花はなんと咲く、世間弥勒と三つ咲く。香取^{カントリ}では面白や、護摩堂ではソリヤ、護摩たく。御神井^{ミトラシ}では稚子^{チゴ}が踊る。護摩堂でソリヤ、護摩たく。まこ

とやら、鹿島浦で弥勒のや、ふうふうねがソリヤ、続いた。とも辺には、伊勢と、伊勢鹿島、伊勢と春日、なかとや、

鹿島ソリヤ、大社。

さらにまた、オビシヤ行事は、前述の著で桜井徳太郎氏が述べていたように房総半島の南の方の安房地方でも行われている。別項(九三〇頁)で記載の、南房総市千倉町川口のミノコオドリは、オビシヤ(平成二六年は一月一八日に行われた)の折に踊られているが、踊り歌の文句の中に「はなみおどり」と「はなみ」の一語が入っていた。当地のオビシヤの構造は成田の女人講のものと共通

していて、七組の人たちが輪番で七年間に一度夏祭りとオビシヤを担当する。それとは別に、毎年オビシヤだけを女性たちだけで組内の家を順番に当番と定めて行っている。オビシヤの折にはご神体の受け渡しに伴うほめ歌の応酬の次第はないが、ミノコオドリと称して弥勒歌の踊りが踊られている。

以上の伝承例から、弥勒の歌、踊りと「花見」という用語の結びつきが強くあるのではないかと思われる。

また安房の洲崎や波左間のミノコオドリの「つくばやま」「ツクバ山」の曲の歌詞に「はな」の用例があり、これらの例から、山に咲く花とも関わっているのかもしれない。いずれにしても千葉県以外の地で「花見歌」という呼称がないのは謎である。

註

(1) 大野政治 一九八〇「おどり花見」の由来『国選択・千葉県無形民俗文化財 成田のおどり花見』成田市 所載 八頁

(2) 小倉博「成田女人講の組織」(1)のカッコ内ものと同著 九―一〇頁

(3) 星野紘「おどり花見」についての一解釈(1)のカッコ内ものと同著所載(二〇―二二頁)

(4) 成田市史編さん委員会 一九八二『成田市史 民俗編』成田市 所載 五一八頁と五一二頁

(5) (1)のカッコ内ものと同著 一六頁

(6) (1)に同じ 七頁

(7) 桜井徳太郎 一九七〇『日本民間信仰論 増訂版』弘文堂 三五九頁

(8) 今井福治郎 一九六五『房総の祭』桜楓社 六二―一六三頁

小河内の鹿島踊おこうち かしまわどり

吉川 祐子

一 名称

小河内の鹿島踊

二 伝承地

「小河内の鹿島踊」は、旧東京都西多摩郡小河内村（現奥多摩町）に伝承されていた民俗芸能である。小河内村は小河内ダムの建設により大部分が水没し、多くが離村した。現在は、その元の住民の子孫により伝承されている。したがって、伝承者の住所と芸能の旧来の伝承地とは一致していない。旧伝承地は、小河内村大字河内の小字日指・岫沢・南の人々で、彼らの多くは羽村市・立川市・昭島市はじめ多摩川中流域に移転した。行政の窓口は、奥多摩町教育委員会文化財係である。

三 期日・場所

九月第二日曜日の奥多摩町の小河内神社祭礼において踊られる。小河内神社社務所前広場が踊りの庭で、ここで神社方向に向かって踊る。踊りの庭には、畳程の厚さで広さ一五畳程の板の間を設置する。このほか正面奥に下方の座を設ける。伝承者は舞台で踊るという意識はなく、板の間はあくまでも臨時の場で地面で踊るのが本来だという。

『東京都民俗芸能誌』上巻には、小河内村にあった加茂神社の境内図が載っている。この図に庁屋があり、これが舞台になったと記録されているが、この庁屋は大正の終わり頃から昭和にかけて建造

されたもので、それ以前の庁屋の存在は不明である。が、舞台がない時代は地上で踊ったのだろう。「地上で踊るものだ」という意識を伝承者の説明から聞き取った。ちなみに、庁屋はかつて盛んだった地芝居にも使い、地芝居が衰退してからは鹿島踊のあとに大津絵や相撲甚句などの余興をして楽しむ舞台となっていた。

鹿島踊は、加茂神社と御霊社の祭りで踊るものだった。加茂神社は四代目保存会長（大正一四年生まれ）の曾祖父が資格を取って神主になり、鴨別雷神をまつり加茂神社と改称した神社である。『小河内貯水池郷土小誌』によれば、それは文政年間（一八一八―三〇）だが、天保六年（一八三五）銘の鰐口には賀茂大明神とあるようだ。加茂神社は、それ以前は大宮大明神、あるいは秋政明神（一七世紀半ば）とも称していた。いっぽう御霊社は、早良親王・橘逸勢・伊予親王・文屋宮田丸（麻呂）・藤原夫人・吉備大臣・藤原広嗣・火雷神の八所御霊をまつるとある。なお、御霊社には別に神主がいた。

現在では小河内神社の祭りのほか、東京都立奥多摩湖畔公園山のふるさと村の春と秋の祭りにも踊っている。

四 伝承（運営）組織

鹿島踊保存会 昭和四五年（一九七〇）に保存会が結成された。それまでは、村内残留組（数名）の鹿島踊愛好会と、村外転出者の鹿島踊保存会とに二分していた。この両者が一つにまとまったのが昭和四五年である。初代から三代までの保存会長は奥多摩町在住者が務め、四代目からは村外移転者が務めている。会員は男女で四〇名ほどいる（二〇代から参加している）。現会長宅（屋号はオカンヌシ）の敷地の一隅に稽古場を建て、ここで練習を積んでいる。

過去の伝承組織 旧小河内村の頃は、高等小学校を卒業した男子はすべて若い衆に入った。この若い衆が鹿島踊の伝承者になった。おおむね二三歳ころまでの青年が踊ったが、中には二五歳まで踊ることもあった。その頃は、ヤド（宿）で祭りの前一週間ほど稽古をした。宿はマワリド（一年交代）で住民が務めた。養蚕をしていたのでどの家も大きく、宿になる家に困ることはなかった。

若い衆の人数が多い時には、二日間（昔は二日間かけて二社の祭りをした）の祭りの午前・午後とも踊り子を変えた。しかし、サンバ（三番叟役）は踊り子とは別で、村の有力者の長男が長年務めた。踊り子が終わると下方の笛にまわる。囃子方を下方という。歌（太鼓役）はさらに上の五〇代が務めた。

祭り当日は、定まった宿元^{やしろもと}からお練りが出た。これは稽古場になる宿とは異なり、日指・岫沢の宿元はオカンヌシ（屋号）、南はヤシキ（屋号）だった。双方とも神社の鍵取^{かぎとり}であり、オカンヌシは加茂神社の神主家、ヤシキは御霊社^{ごれい}の総代だった。

五 行事・芸能内容

（一）日程

小河内神社の祭り 神社の神事と同時進行で伝承の民俗芸能が奉納される。神社は長い階段を上がった山上にある。奉納場所は階段下の社務所前広場で、神社の祭典の様子はわからない。なお、神事と芸能とは連動していない。これは小河内村の当時から変わらない。

平成二五年（二〇一三）は、神事が午前十一時開始、川野獅子舞（午前九時五〇分）、原の獅子舞（午前一〇時二五分）、鹿島踊（午前一時〇五分）が奉納予定だった。しかし、あいにくの雨模様となり、川野獅子舞は奉納を取りやめ、原の獅子舞は温泉神社での奉納

を終えて一〇時四〇分に到着して始まった。鹿島踊は一時二〇分に到着し、踊り場の設定が終わると始まった（神事が始まる一時には芸能類は終わる約束になっているが、最近では遅れがちだという）。神社が終わると、どちらも次の演じ場へと急いだ。次の会場は、奥多摩水と緑のふれあい館という小河内ダムの施設である。ふれあい館のホールでは川野獅子舞も加わった。原の獅子舞は、ふれあい館では館の内外で数回にわたって踊っていた。

加茂神社と御霊社の祭り 小河内村があった頃、宿元で衣装を着け、太鼓（加茂神社は小太鼓、御霊社は大胴^{おおどう}を用いた）と笛の道囃子^{みちばやし}で練って神社に移動した。加茂神社に着くとただちに庁屋^{ちやうや}（御霊社は拝殿）に入って踊る。神社へのお参りはしない。

なお、前日が加茂神社の場合はオカンヌシで衣装を着け、練って神社に移動する。終わると再びオカンヌシに戻り衣装をとく。翌日はオカンヌシから衣装類をヤシキに運び、ヤシキで同じように衣装を着けて御霊社へ行き、ヤシキへ帰る。衣装や楽器類は後のヤシキが一年間保管し、翌年はヤシキからお練りが出て御霊社から祭りが始まった。

昭和初期には、祭りは養蚕や作物の刈り入れのひと段落した九月になっていたが、それ以前は六月の祇園祭に踊っていた。祭日は九月一四日一五日か一五日一六日で、日程は定まっていなかった。村中の神社の祭りが同一日のため、お互いの祭りに芸能はあっても見ることができず、鹿島踊を村人が知るようになったのは、昭和一〇年（一九三五）の日本青年館出場以降である。

（二）役・衣装・楽器・採り物

役 サンバ（三番叟）と踊り子、下方の役がある。サンバは一人、踊り子は六人、下方は四人で、太鼓二人と笛二人である。

衣装 サンバは黒地に赤い丸が左右についた立烏帽子を被り、狩衣・袴・白足袋の衣装で、鼻頭に白粉で白い一筋の線を引く。

踊り子は白塗りの化粧をして女装をする。紫の小振袖（昔は麻だった）に縞の木綿帯を締める。帯は結び上げないで垂らす。さらに帯の上部（帯揚げの位置）からしごきを回して左脇で長く垂らす。白いしごと赤いしごきが三人ずつに分かれる。このしごきの位置は昭和五〇年代には帯の真ん中（帯締め位置）で、位置が動いている。

頭には小さな布団状のものを載せ、ようろ（瑠瑠）といわれる冠を被る。瑠瑠の土台は金物でできているが、昔は桐の割り貫きの土台だった。この土台に桜の造花を飾り、中心には金の鏡形を立てる。現在はずべて業者に発注しているが、割り貫きの頃は花は手作りをした。おそらく、割り貫きも地元の手作りだったであろう。

下方は黒い紋付を着て袴をつける。

楽器 楽器は小太鼓（締め太鼓）二、篠笛二（穴は六）。歌は太鼓がうたう。昔は大鼓と小鼓、そして三味線が入った（『東京民俗芸能誌』上巻）が、前会長（大正生まれ）は三味線も鼓も見ていないが使った経験はないという。昭和一〇年（一九三五）の日本青年館出演の折には小鼓を入れた。写真が残っている。なお、「コキリコ」や「浜ヶ崎」の詞章の「チョン／＼」、「小倉」の詞章の「チン／＼カン／＼」（「九 詞章」参照）などは鉦の口唱歌とみられ、ほかにも同様な部分があり、鉦が用いられていた時代があったと想像される。

採り物 サンバは日の丸扇（白地に日の丸）と幣束（赤い幣束で柄は竹。踊り子用より少し大きい）を用いる。

踊り子は、日の丸扇と幣束（赤い幣と青い（緑を用いる）幣があ

る。柄は竹で、御幣と同じ色の紙をだんだんに巻く）、網（紙を網状に切り抜いたもので、赤三本、青三本がある。柄は竹製）、こきりこ（赤いこきりこと青いこきりこを用いる。二本でひと組で、三セットずつある。赤いこきりこには赤い紙をだんだんに巻き、両端には紅白の房をつける。青いこきりこには青の紙を巻き、青と白の房をつける）を曲により使い分ける。

（三） 演目・芸態

1、演目

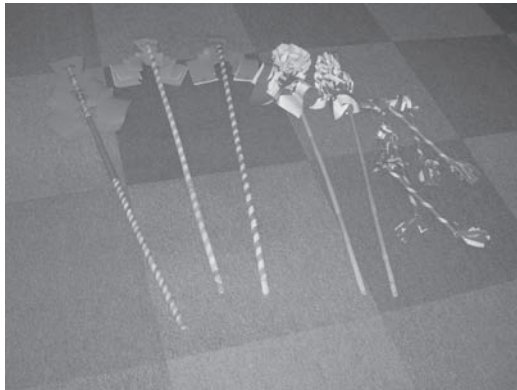
一二曲あったといわれているが、今日では一曲だけが伝わっている。失われた一曲については題名も伝わっていない。

伝承曲は三番叟・毬踊・月は八幡・コキリコ・浜ヶ崎・さんころりん・小倉・かつこ（羯鼓）・桜川・念仏・三拍子の一曲である。最初は三番叟、最後は三拍子と順番が定まっているが、ほかの曲には順序はない。平成二五年（二〇一三）は、毬踊・浜ヶ崎・かつこ・桜川・三拍子が踊られ、三番叟はなかった。

2、芸態

下方は、観客から向って右奥に右から太鼓方二人、笛方二人が並んで座る。歌は太鼓方が歌う。踊り子は下方の前に横一列に並ぶ。向って右から赤のしごきが三人、その隣に白のしごきが三人並び、右足を一歩下げて腰を落として構える。すると打囃子が入る。ついで、出端の囃子が始まると踊り子は立ち上がり、右回り（時計回り）にひと回りして、紅白が向かい合って下方に対して垂直に二列に並ぶ。ここから踊りが始まる。これは踊り始めの基本である。

踊り納めには「尽せは浮名の立つにもんど」がうたわれる。これ



1 採り物 左の幣束はサンバ、次の2本は踊り子の幣束、次の2本は網、右側はこきりこである。



2 下方 小太鼓二つと笛2本である。小太鼓の直径は35センチ、厚さは16センチ、桴の長さ34センチ。笛は6穴。



3 瓔珞 踊り子の被る花冠である。花の真ん中には金の鏡が立つ。冠の回りには珠玉や金属片の飾り、鈴の装飾がつけられている。



4 踊り場 下方は神社方向を向いて座り、その前で踊り子が踊る。



5 三番叟 「鹿島踊」の名がついたといわれる演目である。サンパー人と踊り子がともに踊る。



6 三番叟のサンバ役 サンバの鼻筋には白い線を1本入れる。

1～4 撮影 全日本郷土芸能協会
5～6 提供 鹿島踊保存会

には鳴り物はなく、早口で小声で唱える。このとき踊り子は、腰を落としてその場で自転する（右にひと回りする）。そのまゝ、片膝を立てて控え、入端の囃子になると立ち上がり、踊り場を右にひと回りしながら下方の前に戻る。踊り納めはすべての演目で同様に行われる。次からは出端から始まる。なお、詞章は「九 詞章」参照のこと。

三番叟 サンバ（三番叟役）は、踊り子のすぐ後ろの中央で正座をする。踊り子は左肩に幣束を置き、右手の閉扇を幣束の柄の先にあてて構える。

出端の囃子で踊り子は立ち上がり、踊り場をひと回りする。このとき、幣束は肩に置いたまま水平にして閉扇を真一文字に持って幣束の柄の先にあてる。下方の前に戻ると再び腰を落とす。

次にサンバが登場する。サンバは男踊りできびきび踊る。幣束と閉扇を踊り子と同じように構え、赤いしごきの踊り子の前に立つ。「加志摩大明神様は……」と歌が始まる。この歌の間に、サンバは右回りに角々を取って踊り場をひと回りする。角々では右左右（諸本には左右左とある）と反問を踏んで四方堅めをする。これを「サンバを踏む」という。「世の中は……」からは踊り子も立ち上がり、サンバの後ろについて七人で踊る。幣束と閉扇の構え方は先と同じで、右回りに回りながら閉扇で幣束の柄を打って拍子を取り、袖をひるがえしながら踊り場を巡る。

以下は、平成二五年の様子を簡単に説明する。

毬踊 出端で、閉扇を真一文字に両手で持って踊り場を右回りに回り、下方の前で二列に並んで向き合う。開扇を右に持ち、左手は袖口を持つ。扇を左右に振りながらその場踊りをし、「イヤ毬の踊は面白や」では、両手を胸の前にして扇を水平にして扇ぎながら一

同は右回りに回る。二度目の「イヤ毬の踊は面白や」で元に戻り、扇を水平にしてトントントンと足踏みをする。以上を繰り返す。

浜ヶ崎 出端で登場して二列に並び、扇を開いて毬踊と同じように踊り出す。扇を上げたり下げたり、その場回りをしたり腰を下ろしたりと、毬踊より複雑な踊りである。しかし、毬踊のように歌の切れ目ごとに踊り場をひと回りすることはなく、向かい合ったまま、接近したり離れたりと隊形を変化させる。

かつこ（羯鼓） 出端で登場して「毬踊」のように二列に並ぶ。採り物は扇のみ。「イヤオハ」で扇を開いて踊り始める。「ばらんく……」の歌では、左手は袖口を持って胸の高さに構え、扇を持つ右手を輪の中心に向けて広げたり、胸に持ってきたりして右回りに踊る。この部分は三回繰り返す。

「(1) せんのかく地蔵が……」からは紅白は向かい合う。扇は閉じて、双方は接近して二人ずつ背中合わせになる。右手は閉扇のまま、左手は拳を作って羯鼓を打つ所作をする。左右をかえて同じ所作を繰り返す。「ソレ チンくチリテツ……」で、両手で扇を振りながらもとの位置に戻り、二列になって向かい合い、羯鼓を打つ所作をする。リズムに合わせた足踏みもある。

桜川 網を肩に置き閉扇を右手に持って出端の囃子で出て「毬踊」のように二列に並ぶ。「イヤオハ」で扇を開く。

「(1) 地主の桜はハンサ……」で扇を振って踊り出す。網は肩に置いたまま下ろさない。向かい合ったり、正面を向いたり下方を向いたり自転して踊る。「チリテツトン……」で紅白二人ずつ組になり右回りする。二列に戻り向かい合い自転を繰り返す、網と扇を下げて右回りに自転し内向きになる。さらに自転を繰り返して内向きに向き合い、網を左肩に戻す。歌ごとにこの繰り返しをする。

「(5)高尾の紅葉に……」は、向き合って扇を上げ下げし自転したあと腰を下ろす。しばらくそのまま「花は深山の」で立ち上がり、六人は輪になって右に回り出す。入端は扇を上げて回り、元の座に戻る。

三拍子 閉扇を両手で持って「毬踊」のように二列になる。扇を腰に差し輪になって素手で踊る。手を打ち、両手を大きく振りながら右回りに踊る。

六 由来・信仰

由来 『東京都民俗芸能誌』上巻によると、「いつの頃伝えられたか明らかではないが、京都から公卿の落人が岫沢に来て隠れ住み、土地の人たちに教えたとも、ある旅僧が伝えたともいわれている」とあるが、村に在住中に、これを村人から直接聞いた覚えはないと大正生まれという。村に行き渡った伝承ではないとみられる。しかし、御霊社にまつられていたのは八所御霊である。京都から来た人に教えられたという説には、何か隠された事実があるように思われる。

信仰 鹿島踊への民間信仰はとくに伝承されていない。

七 変遷

旧六月一五日の祇園会に「祇園踊」と呼ばれて踊ったといわれているが、この経験者はいない。近世までの伝承のようだ。明治以降は九月一五日前後の二日間の祭りで、加茂神社と御霊社が年番で祭日を前後した。のちに祭りは一日になり午前と午後に奉納されるようになる。その後、小河内ダムの建設により水没地域の神社は新設の小河内神社に合祀され、当社であらたな祭礼が始まった。鹿島踊

も保存会ができると奉納するようになった。

八 所見

「小河内の鹿島踊」の鹿島踊としての要素は、最初に演じる「三番叟」にある。「三番叟」は、サンバが四方堅めをする間に「加志摩大明神様は、加志摩大明神様は、遂にむくりん、加奈和津志、加志摩踊を、いざ踊る」とうたう。これはおそらく、呪力ある民間宗教者の出番だったのであろう。この役だけは若い衆の中から選ぶのではなく、有力者の家の長男が務めるしきたりだったという。定まった家ではないが、不特定多数の中から選ぶのではなく条件があったのである。当地は、鹿島関係の民間宗教者が出入りした時代があったと推測される(第一章「東京都・相模湾西海岸の鹿島踊概説」参照)。あるいは、その民間宗教者の関与がこの部分にあったのかもしれない。

あとの部分はミロク歌によるミロク踊になり、「世の中は四百四十五年あとに、弥勒^{みろく}続いた……」とミロク世のめでたさをうたう。ここからは若い衆が加わって踊るが、小河内のミロク踊は歌が少ない。次からは室町小歌での踊りや念仏踊である。本田安次は、「三番叟」は加茂神社系、そのほかの風流踊は御霊社系と分類している(『奥多摩町誌』民俗編)。たしかに異なる芸能が合体している。

加茂神社系と御霊社系があったと仮定して推論すると、加茂神社には「三番叟」と「鹿島踊」があり、これをまとめて鹿島踊と呼んでいたと推測できよう(加茂神社になった一九世紀初めの文政年間から踊り開始か。それまでは加茂神社の元社は小さな社だったとオカンヌシ家では伝えている)。両社の芸能をまとめるにあたって「三番叟」と「鹿島踊」を一曲にし、最初の曲という意味で「三番叟」

と名付け、「鹿島踊」の詞章を取り込んだ。「三番叟」の詞章はあきらかに「鹿島踊」の詞章である。

現在は一曲を伝えているが元は一二曲だったという。一曲を失ったのだが、じつは「三番叟」が二曲分を伝えていて失われていないのではないだろうか。所在不明だが、安政二年（一八五五）の「おふ踊 こ踊」の歌本がある（『東京都民俗芸能誌』上巻）。「おふ踊」は三番叟、「こ踊」はそのほかをさすとみられる。すると、安政二年にはすでに現在の状態になっており、両社の芸能がひとつになったのは近世後期だとみられる。「鹿島踊」はこうした変化の中で、この芸能の総称となったのであろう。だが、以上は推定の域を出ない。

なお、「三番叟」は小留浦の神楽にもあるが、『奥多摩町誌』民俗編によると、こちらは三番叟本来の反閨に近い。小留浦は神楽なので猿田彦の姿で「三番叟」を演ずる。始まりの演目という意味での「三番叟」だが、小河内が反閨の簡略化した形を伝えるところから、双方には何らかの影響関係があるとみられる。

九 詞章

以下は、鹿島踊保存会が作成した『国指定 重要無形民俗文化財 鹿島踊』（一九七九年）を用い、ルビを必要とする部分には現行のうたい方を示した。なお、歌本『安政二卯歳 おふ踊 こ踊 うたほん 武州多摩郡小河内三田領 川野村岫沢 藤原氏』があるが、現在は所在不明となっている。

打囃子……笛、太鼓

(一) 三番叟

出端……笛、太鼓

加志摩大明神様は、加志摩大明神様は、遂にむくりん、加奈和津志、加志摩踊を、いざ踊る

歌詞

イヤオハ

世の中は四百四十五年あとに、弥勒続いた、天竺の叔母の方より、かつらほそのおえて来た、これこゝで染めて下され、播磨の総社の紺屋さん 紺屋なれば染めてもやろが 型は何をつけましよう 肩裾に梅の折枝 中に五丈のそり橋 中に五丈のそり橋

尽せば浮名の立つにもんど

入端……笛、太鼓

(二) 毬踊

出端……笛、太鼓

歌詞

イヤオハ

様は小鼓太鼓の調べ かわをへだて、ノウサテかわを隔て、目にも寄る ハ

(1) 先ず春はソレ柳が、りオンソレ毬遊び 終りて廻るオンソレオンスメ遊ばせ 真夜迄もハ イヤ 毬の踊りは面白や 毬の踊りは面白や

(2) 先ず夏はソレ櫻が、りオンソレ毬遊び……以下同

(3) 先ず秋はソレ紅葉が、りオンソレ毬遊び……以下同

(4) 先ず冬はソレ松の木が、りオンソレ毬遊び……以下同

イヤ毬の踊りは これまでよ、ハ

尽せば浮名の立つにもんど

入端……笛、太鼓

(三) 月は八幡

出端……笛、太鼓

歌詞

イヤオハ

(1) 月は八幡^{やはた}の末だ奥に 月は八幡の末だ奥に たまさかに来て
寝て打置いて 寝ぬぬと仰言^{おしやる}は恨めしや 恋の踊りはいと盛り
ハ

イヤテレ イヤテレレ ソレテレ シキテレレ

かわむきはらに露^{つゆ}や電^{ひび} オンソレ 露や電に あるらるうに

ウーポーポーホポポン イヤ恋の踊りはいと盛り ハ

(2) 沈^{じん}の煙りと命の様はア 沈の煙りと命の様は 幾夜^{いくよ}泊めても泊
め明ぬ たまさかに来て寝て打置いて 寝ぬと仰言^{おしやる}は恨めしや

恋の踊はいと盛り ハ

イヤテレ イヤテレレ……以下同前

イヤ恋の踊はこれまでよ

尽せば浮名の立つにもんど

入端……笛、太鼓

(四) コキリコ

出端……笛、太鼓

歌詞

イヤオハ

面白の花の都や何と書くともつきせん

東には祇園清水 落ちくる滝の音羽の嵐や 地主^{じしゅ}の櫻もちりち

り 西は法輪嵯峨^{わんてら}の御寺廻らば 廻れの水車の輪のりせん堰の

川柳 川柳水にもまるゝ ふくら雀は目笹にもまるる 都の牛

は車にもまるる 茶臼^{ひきき}は挽木にもまるる 実に誠忘^{まこと}れたりや

コキリコは放下^{ほうか}にもまるる コキリコの二つの竹を代々^{よよ}を重ね

て打ち治りたる 御代哉 ハ

チョンくくく ハンヤウポーポーター

チョンくくく (二回) ハンヤ ストコくくく

チョンくくく (二回) ハイヤ チョンくくく

(1) 時雨の雨はしー ソレ時雨くれゆく

時雨の雨はしー ソレ時雨くれ行く

ハ チョンくくく (以下同前)

(2) 忍ぶ夜の笹の葉 ソレ鳴るはサアンく笹の葉

チョンくくく ハイヤ ストコくくく チョンくくく

(二回)

尽せば浮名の立つにもんど

入端……笛、太鼓

(五) 浜ヶ崎

出端……笛、太鼓

歌詞

イヤオハ

(1) 浜ヶ崎から汐見れば 浜ヶ崎から汐見れば ソレやぐらくが

アン ソレ打見ゆる

今日の日も日和よかれ 明日もよかれ今日の日もハ たゞんさ

らに出て ソレ 浜のうはらそう 浜のうはらそう ハ (二回)

汐を汲もう汐をくもうハ(二回)

くもう桶なる汐よりも 我^{われ}が殿ごに汐がーんソレ ツンポコ
くくハイヤ ツンポコくくハイヤ とろとろとんと
ろとんハイヤ ウポポ チョンくく

あの浜見さい この浜見さい 戴き連れたる汐桶を 糸より細
い腰をしぐれば いとゝいとゝ尚可愛^{いと}しハ

(2)今日は沖がのどかに御座る 日は沖がのどかに御座る やぐら
くがアンソレ打見ゆる(以下同前)

尽せば浮名の立つ

入端……笛、太鼓

(六)さんころりん

出端……笛、太鼓

序

山々の谷の清水はよごめに落ちて 名も高き浅ましや 女の身
なれば 一夜に落ちて名を流す それとても大事ござらぬ 若
いが二度とあるにこそ

歌詞

イヤオハ

(1)京の島原はサンコロリンサア 四億^{しおく}の町ちやよ サンサトサ
サーサーアーン

(2)金がなければ サンコロリンサア 便りがござらぬ サンサト
サ サーサーアーン

(3)君に貰うたよ 紫鹿の子ぢや

(4)わしとお前は 恋松茸ぢやよ

(5)君に貰うたよ 柄つきの鏡ぢや

(6)とかく我が身は

(7)我を思わば

(8)とかく我身は

(9)君に売られて

(10)わしとお前は

尽せば浮名の立つにもんど

入端……笛、太鼓

(七)小倉^{おぐら}

出端……笛、太鼓

歌詞

イヤオハ

(1)小倉ののーんく野辺イナハ

「ヒホホく」一本すーんくすゝきハ

「ヒホホく」いつさてほーんく

穂に出てハ「ヒホホく」みだれのやーんくやおいなハ

「ヒホホく」

ハア おたまこがねんねんよいわけ

こがねつらいの 鳴物「チンく カンく」

「^笛ピー」ハ「ヒホホく」ハイヤ「ヒヒヒホホ」(二回)

(2)武蔵野ののんく野辺にな(笛)

一本すーんくすゝき(笛)(以下同前)

(3)笛によるしーんく鹿は(笛)

妻ゆえにしーんく死するな(笛)

我等もさーんく様ゆえ(笛)

身をば又すーんくすうじよいな(笛)

匂松茸ぢやよ

よしくもれや

先ずならぬや

身をもやすや

白木の弓ぢやよ

ハアおたまこがねんねんよいわけ
こがねつらいの

笛

(4) さいたる木戸をたーんく叩くは(笛)

誰ちや このやーんく夜ちゆうに(笛)

宵の約束なーんくなければ(笛)

叩くともあーんくあくるな(笛)

ハアおたまこがねんねんよいわけ

こがねつらいの

笛

(5) 長崎ではーんく流行は(笛)

玉の緒のたーんくたすき(笛)

みやいちがよーんくよければ(笛)

しよじよがのなーんくなさけ(笛)

ハアおたまこがねんねんよいわけ

こがねつらいの

笛

尽せば浮名の立つにもんど

入端……笛、太鼓

(八) かつこ(羯鼓)

出端……笛、太鼓

歌詞

イヤオハ

ばらんくと吹き訪ずる、しらで明けたる 未ださそうかの

うばらん(三回)

(1) せんのか地蔵が た、らせんの地蔵が 錫杖を杖について
浮世めぐりをめいしやれる

ソレ チンく チリテツ チリテツトン イヤボンく ア

リヤボンく イヤボン ポンく

(2) 茗荷というのも草の名 生姜というのも草の名 富貴自在徳あ

りて みやかあらせ給えな ソレ チンく チリテツく ト

ン イヤトンく アリヤトンく イヤトンくく

(3) さす様よでさ、ぬが 人待宵の盃 さ、ぬ様でさすは 又思ふ

仲の盃 ソレ チンく チリテツく トン イヤトンく

アリヤトンく イヤトンくく

(4) てんじんの前の鶯 鶯が巢をかけ 風吹かば何としようぞ

穴に宿れ鶯 ソレ チンく チリテツく トン イヤトン

く アリヤトンく イヤ トンくく

(5) てんじんの前の薄雲 薄雲が十四しゆうなれば さても人のお

ほみごろ ソレ チンく チリテツく トン イヤトンく

アリヤトンく イヤトンくく

尽せば浮名の立つにもんど

入端……笛、太鼓

(九) 櫻川

出端……笛、太鼓

歌詞

イヤオハ

(1) 地主の櫻はハンサ 散るか散らぬか見たかのん ソレ散るやら

んサ散らぬやら 嵐こそ チリリ チリテツトンく ステレツ

トンく チリテツトントツトン

おりおりてンサ 花の櫻川は三味^{しゃみな}中に清き ソレ流れに浮ぶ花
すくわんサ

チン／＼チリテツトン／＼ステレツトン／＼ チリテツトント
ツトン 流るゝ花をすくわんサ

(2) 加賀の櫻ハンサ (以下同前)

(3) 嵯峨の櫻ハンサ (以下同前)

(4) 吉野の櫻ハンサ (以下同前)

(5) 高尾の紅葉に 吉野の櫻 何れ思わばどなたにも 花は深山^{みやま}の
岩つゝじ (三回)

尽せば浮名の立つにもんど

入端……笛、太鼓

(十) 念佛

出端……笛、太鼓

序

月と色あれ山の端に 月あれ山の端に

歌詞

イヤオハ

(1) わけ登る麓の道は多けれど

同じ雲井に月を眺むる南無阿弥陀ハ イヤタタポ イヤポーポー
ポン／＼／＼

(2) 我が親の佛になるを夢に見た

嬉しながらも濡る袖かな南無阿弥陀ハ イヤタタポ イヤタタ
ポ イヤポーポー ポン／＼／＼

(3) 地獄極楽は西にあると思ふ人のはかなさよ

地獄極楽は胸にあるぞよ 南無阿弥陀 ハ (以下同前)

(4) 雨、霰、雪や氷とへだつれど

同じとくれば谷川の水よ 南無阿弥陀 ハ (以下同前)

(5) 大川に繋がぬ船はとまるとも

人の命はとゞめ果敢^{はか}なさよ 南無阿弥陀 ハ (以下同前)

尽せば浮名の立つにもんど

入端……笛、太鼓

(十一) 三拍子

出端……笛、太鼓

歌詞

イヤオハ

今度出羽様さアーへ 今朝こそ見た 見たがさ

大小金鰐さアーへ 真紅のさげ緒さげ緒さ

羅紗の羽織にさアーへ 法華経と書て 書てさ

鹿毛のお馬にさアーへ ゆらりと召し 召してさ

城を出ずるはさアーへ ひよりの花 花よさ

城を出ずるはさアーへ ひよりの花花よさ

尽せば浮名の立つにもんど

入端……笛、太鼓

参考文献

- ・ 東京市役所編 一九三八『小河内貯水池郷土小誌』東京市役所
- ・ 鹿島踊保存会 一九七九『国指定 重要無形民俗文化財 鹿島踊』
- ・ 奥多摩郷土資料館 一九八〇『国指定重要無形民俗文化財 小河内
の鹿島おどり』
- ・ 本田安次 一九八四『東京都民俗芸能誌』上巻 錦正社

・奥多摩町誌編纂委員会編 一九八五『奥多摩町誌』民俗編 奥多摩町

・俵木悟 二〇〇六「その他の」鹿島踊——祭礼行列に出る鹿島踊・弥勒踊を中心に——『芸能の科学』33 東京文化財研究所

真鶴の鹿島踊まなづる かしまわり

吉川 祐子

一 名称

真鶴の鹿島踊り

二 伝承地

神奈川県足柄下郡真鶴町真鶴まなづる

三 期日・場所

(一) 期日・場所

期日 七月二七日・二八日の貴船神社きふねじんじやの例大祭において踊られる。
現在は観光化されて「貴船まつり」という。貴船神社は、古くは貴宮大明神きのみやといい、祭日は旧暦六月一四、一五日だった。

場所 町内の各所で次のように踊る。

二七日は、お天王さん（津島神社）・貴船神社の中段・渡御の船上・御仮殿前おかりやで踊る。小学校の体育館（昔は青年団の本部）で待機しているとお天王さんから迎えがくる。迎えられて初めてお天王さんに移動し、神事が終わると踊る。これを「揃い」という。踊り終わると貴船神社へと移動し、階段下の中段で待機する。宵宮の貴船神社神事が終わると待機していた中段で踊る。ここは昭和時代まで神社の社があった位置で、古くからの踊り場である。鹿島踊が終わると神輿は乗船する。鹿島踊も乗船し、この船上でタチオドリ（出発踊り）といって踊る。神輿が御仮殿に到着して御仮殿祭が終了すると、御仮殿の前で踊る。宵宮の踊りはここまでである。

二八日は、御仮殿前◎・西本払い◎・西仲・駅前広場・役場・御

仮殿前◎・船上・貴船神社拝殿前◎・天王さん◎で踊り、終了は二三時頃になる。なお、◎印ではひと踊り（全曲）するが、ほかでは短縮して踊る。短縮形では鹿島唄のうち「一・二・九・一〇～一二」（九 詞章）参照）だけを踊る。

御仮殿での神輿の発輿式のあと御仮殿前で踊る。ついで、西本払いで踊ると神輿が町内巡行を始める。この巡行とともに移動する。神輿が御仮殿に帰り式典が終わると御仮殿前で踊り、還御の船に乗船する。神輿が神社に帰り、還御式が終わると拝殿前で踊る。祭典はここで終わるが、鹿島踊はお天王さんに移動して「納めの鹿島踊」を踊る。

(二) お天王さんの祭り

当地の鹿島踊は「お天王さんで始まりお天王さんで終わる」といい、お天王さんでの踊りが大切とされてきた。お天王さんの正式名は津島神社（祭神は素戔鳴尊で祭礼日は七月二六日。鎌倉時代頃創立と立て看板にある）。しかし、人々は「お天王さん」と呼び続けている。祭りは現在も過去もほぼ同じ日程で行われるが、お天王さんでの「揃い」の期日は過去と現在とは異なる。過去の「揃い」は宵宮前日の二六日だった。「揃い」にあたって、「本日は貴船神社の祭りに備えての鹿島踊の揃いをご高覧に供します。これでよろしいかご検分の程よろしくお願い申し上げます」と警護役が口上を述べる。地域を支配する「荒ぶる神」を鎮める神事がこの「揃い」で、この神さまをおさめないと祭りは始まらないという。還御の後、囃子船がショウテンというゆつくりしたお囃子で御仮殿前の港に戻る。これに並行して鹿島踊は歩いて戻るが、ちょうどお天王さんに着く頃船も戻り、ショウテンが終わる。鹿島踊は最後の踊りを踊る。

これで祭りのすべてが終わる。

なお、お天王さんは近所の人々がまつる神社で、貴船神社とは直接関係はない。社は人が入って神事ができる広さはあるが境内は狭く、鹿島踊は路上で踊ることになる。

四 伝承（運営）組織

鹿島若い衆 鹿島踊は漁民の伝承で長男だけが踊ることができた。これをカシマワカイシ（鹿島若い衆）という。

鹿島踊り保存会 昭和四八年（一九七三）に「鹿島踊り保存会」ができた。現在の役員（会員を「役員」と呼ぶ）は、小・中・高校生が約三〇名、大人が約三〇名の合計約六〇名である。しかし、小・中学生は毎年募集する準役員で、高校生以上を役員としている。会長を理事長といい一名、副理事長二名、会計一名がいる。

後継者問題 子どもの参加は危機にきている。子どもが減ったこともあるが、各町内が子ども神輿を出すようになって鹿島踊への参加が少なくなった。神輿は練習の必要はないが、鹿島踊は祭りの数週間前から練習を積み重ねなければならない。希望者を集めるのは容易でない。しかも、上達し来年も頼みたいと思っても中学生になるとやめてしまう。高校生もクラブ活動が忙しい時期でもあり、学校行事が優先されてなかなか参加してもらえない。保存会の最も大きな悩みである。

踊り手の構成は、一般の踊り手をヒラオドリといい人数制限はない。このほか、鉦二人と太鼓一人、三役といわれる黄金柄杓と日形、月形がそれぞれ一人ずつである。そして、ウタゲ（歌上げ）数人と警護数人で全体が構成される。

ヒラオドリは小学生、三役や鉦太鼓は中学生以上、ウタゲや警護

は長老が担当する。鹿島若い衆だったころは年齢階梯制だったが、今はヒラオドリを小学生に求めているために出入りが多く、下層部が安定しない。ヒラオドリから上がる者がいないのである。しかも、踊り手の人数調整のために大人もヒラオドリを続けなければならぬ。下から上がる者がいないためにウタゲも止まったままで交代ができない。底辺が広がらないために上が詰まっている状態である。

五 行事・芸能内容

（一）貴船まつりの概要

貴船神社の主祭神は^{おおくにぬしのみこと}大国主神である。『新編相模国風土記稿』によると、寛平元年（八八九）に磯に寄り来る桜船があり、この船に神像が降臨していた。これを発見者の現宮司家の先祖がまつたのが起こりだという。船で神がやってきたという由来に基づいて、神が船渡御をして氏子の村へやってくるというスタイルで祭りが展開される。神輿船に何艘かの満艦飾の供船がついて海上を渡御する姿は壮観である。

氏子はいくつかのパーツに分かれて祭りに参加する。鹿島踊もこの祭りのパーツの一つである。おもなパーツは、花漕ぎ・小早船・花山車・鹿島踊・お囃子、そして神輿昇きである。これらのうち、小早船と鹿島踊は漁業者グループ、花漕ぎと花山車は石材関係者グループ、お囃子は若い衆のグループ、神輿昇きは各町内に人数を割り振って担当してきた。

真鶴は、漁業と石材採掘、そして石材運搬業とで生業を構成してきた。この生業の関係者が、職種ごとに分かれて祭りの各パーツを分担してきたのである。さらに、祭りではマチは東西に二分され、それぞれが競い合って盛り上げる。

海上渡御は次のように行われる。花漕ぎといわれる權伝馬（東西二艘）が、小早船（東西二艘）・神輿船・お囃子船（東西二艘）を曳航する。綱で繋いだ五艘の船を曳航するには石船を動かす船乗りの力が必要で、力自慢たちの船漕ぎである。この權伝馬を「花漕ぎ」というのは、漕ぎ手を使う五色の櫓に縮緬が用いられたためだという。精一杯のおしゃれをしての曳航でもある。なおこの櫓は、祭りに後に安産の腹帯として用いられる。乗船するのは一五名くらいで、船頭は漕ぎ衆に掛け声を掛けたり、「松前」「追分」などをうたって櫓の調子を揃えさせる。

小早船は御座船の形式で、さらに提灯や造花で美しく飾り、神輿船に供奉する。船上では詩之助と呼ばれる長老による「黄帝」「四季の歌」などの船歌がうたわれる（中止中）。

神輿船には神輿関係者と鹿島踊が乗船する。鹿島踊は途中タチオドリといって船上で踊る。お囃子船では大太鼓と小太鼓、鉦と笛で「シャギリ」や「シヨウテン」「神田丸」などが囃される。曲はそれぞれ打たれる時が定まっている。

花山車は手指し棒といわれる角棒の上部に万燈をとりつけ、万燈の上には菱形の台を載せ山形にして造花で飾る。その頂点には鳳凰をのせ、造花の部分には蝶の飾りを何本も挿す。万燈には「天下太平・家内安全・大漁満足・海上安全」と書かれている。これは台に乗っているが、台からは造花をつけた篠竹を長く垂らし、内側には角隠しという黒い羅紗地の幕を巡らす。重さは六〇〇程ある。なお、花山車は乗船しない。肩で担がず手差しをするのが自慢である。

花山車は、神輿の町内巡行時には露払いとして神輿を先導し、ついで鹿島踊が続き神輿となる。さらに、神輿の後ろにはお囃子の屋台が並ぶ。現在は自動車が使われるが、かつてはキリギリス籠とい

われた簡素な屋台だった。竹でできていて担いで移動させる。この中で歩きながら大太鼓や小太鼓を打ち、笛や鉦は籠の周りにつきそう。飾りに竹笹（チャップ）を多く使ったために、囃子の若い衆をチャップの若い衆と呼ぶ。今でもこの表現は残っている。

いずれも、現在は保存会として祭りに参加する。昭和四〇年代くらいまでは、羽田の埋め立てなどがあつて石材関係者の仕事もあつたが現在はこうした仕事もなくなり、彼らは陸の仕事に変わった。職業別の分担では祭りが存続でなくなったのである。そこで鹿島踊が保存会を作ったこともあつて保存会組織にした。神輿昇きも保存会になった。しかし、小早船だけは今でも漁業組合が担当し、古くからのしきたりを守っている。

（二）衣装・楽器・採り物

1 衣装

踊り手 浴衣（尻端折り、ピンで止める）・三色の帯（今は使わない）・手甲と白い脚絆（現在は白いストッキング、肌を見せるなどという）・手ぬぐい（現在はタオルを首に巻く）・白足袋が基本の衣装である。戦後の一時期、お上り（神輿が海岸から坂道を上って巡行する）で午前中に払うので、お下りは余興だといつて化粧をしたり頬被りをしたりして楽しんだこともあった。

ウタゲ 着流しに黒羽織を着る。手ぬぐいを首からさげ、足袋を履く。

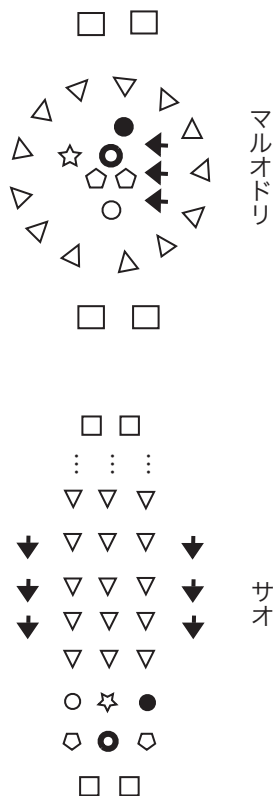
警護 ウタゲと同じ姿である。

2 楽器

小太鼓 小太鼓を一つ使う。締め太鼓で持ち上げて打つ。桴は一

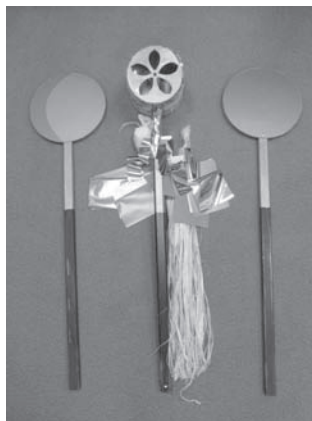
真鶴鹿島踊隊形図

正面



- 記号
- 太鼓
 - ◓ 鉦
 - ☆ 黄金柄杓
 - 日形
 - 月形
 - △ ヒラオドリ
 - ▲ ウタゲ
 - 警護

作図：吉川祐子



1 採り物 中心が黄金柄杓、右が日形、左が月形。黄金柄杓の口の直径は16センチ、厚さも16センチ。日形と月形の直径は25センチ。柄は黄金柄杓は98センチ、日形月形は全長98センチである。いずれも5色の幣束と麻緒がつく。黄金柄杓の中にはヨネといわれる切紙を入れ、日形月形には切紙を入れたヨネブクロをつける。このほか踊り手は柄の長さ84センチの白い幣束と団扇を持つ。



2 楽器 小太鼓と摺鉦を使う。小太鼓の直径は26.5センチ、厚さは16センチ、棒の長さは35センチで房がつく。鉦の直径は10センチで小さな足がつく。撞木は11センチ程度の頭部に30センチの柄がつく。



3 真鶴鹿島踊 マルオドリが終わり、サオになって移動しながら踊る。

1、2 撮影 全日本郷土芸能協会
3 提供 真鶴町教育委員会

本で房がつく。

鉦 鉦を二つ使う。掌に納まる程の小さな鉦すりがねで紅白の小さな布団にのせる。布団には房がつく。摺鉦には足がついている。これは特注している。撞木しもくは木製で丁字型。柄には紅白のんだら巻きがあり、先には房がつく。頭の部分にも飾りが施される。

3 採り物

黄金柄杓 コガネビシヤク（黄金柄杓）という美しい採り物がある。柄杓形の採り物で、麻苧あさおと五色（白・赤・青（緑）・金・銀）の幣束がついている。柄杓の口は、花形に切り込みを入れた蓋をする。その穴から五色の切り紙が飛び散る仕組みになっている。この切り紙をヨネ（米）という。柄杓にはヨネとともに笹を詰める。ヨネをパラパラと美しく散らせる手だてである。柄杓部分の外側も細く切った切り紙で美しく飾る。

日形 柄の先に金色に塗った丸い板を取り付け、麻苧と五色の幣束をたらししたものヒガタ（日形）という。ヨネブクロ（米袋）といい、ヨネを入れた袋も取り付ける。振るとヨネが散る。

月形 柄の先に丸い板を取り付ける。面全体を銀色で塗り、隅を金色で三日月に塗ったものをツキガタ（月形）という。日形と同様に麻苧と五色の幣束、そしてヨネブクロがつく。

幣束 二尺五寸（七五センチ）の黒い柄で五色の幣束がつくものと、白木の柄で白い幣束がつく幣束がある。黒い柄の幣束はウタゲが持ち、白い柄の幣束はヒラオドリが持つ。

団扇 「祭」と印刷された団扇で、鉦太鼓以外の採り物である。柄を持たず骨に指を差し込んで持つ。

青竹 白紙を中心に巻いて紅白の水引を結んだ二トリあまりの青竹

で、警護の採り物である。

（三）芸態

入場 列で踊り場に入る。「ハイエ」と太鼓の打ち込みがあると、踊りながらマルオドリ（円形）の隊形になる。このとき、鉦・太鼓は肩と肩をつきあわせて三角形になる位置に立ち、この周りに三役が立つ。三役はマルオドリの進行方向と逆の方向に向かってしゃがむ。その周りにヒラオドリが進行方向に向いてしゃがむ。ウタゲは円の中に一列に並んでしゃがむ。

口上 「口上」が始まる。口上が終わると太鼓が入ると立ち上がって踊り出す。ウタゲはうたうだけで踊らない。口上は全員で唱えるものだが、子どもが増えたため現在は三役（黄金柄杓・日形・月形）が唱えている。

マルオドリとサオ 真鶴の鹿島踊はマルオドリとサオで構成される。マルオドリは円形の隊形で、中心は太鼓と鉦、その周りに三役、そして外側がヒラオドリである。太鼓と鉦は両手を高く上げた独特の振りで音を出しながら踊る。三役はそれぞれの採り物を高く持ち上げて踊る。ヒラオドリは幣束を肩に置いたり前に突き出したりし、団扇を翻して踊る。幣束を上げ下げするような振りはない。

サオは三列に並んで一方方向を向いて踊る隊形をいう。前列に鉦・太鼓・鉦、次に日形（向かって左）・黄金柄杓・月形（向かって右）と並び、その後ろにヒラオドリ全員が三列で並ぶ。踊りの手はマルオドリと同じである。ウタゲはサオの中には入らない。サオは一方方向に並ぶ隊形で、過去の研究者が方形と名付けた隊形である。しかし、これは方形ではなく一方方向を向く列形で、移動の隊形だといってもよい。

真鶴はマルオドリが中心で、本唄十二（九 詞章「参照」）からサオになり、そのまま移動が始まる。列の先頭としんがりには、警護役が二人ひと組で青竹をバツテンに組み合わせて先導する。

六 由来・信仰

由来 真鶴の鹿島踊の由来についての民間伝承は聞かない。

信仰 五穀豊穰、悪疫退散、大漁・海上安全祈願のために踊るといわれている。ウタゲに赤ん坊を抱いてもらい、ヨネマキをしてもらうと丈夫に育つといわれる。花漕ぎの色帯も安産祈願だという。村を維持するためには何といっても人口が安定していなければならぬ。安産祈願や成長祈願の民間信仰が伝わるのは、祭りの本来の祈願の姿だといえよう。また、生業の安全と生産力の安定、そして命の安全を求める信仰も、祭りを維持してきた基本の思いである。

七 変遷

真鶴町教育委員会生涯学習課の編集した「国指定重要無形民俗文化財 真鶴 貴船神社の船まつり」のパンフレットによれば、貴船神社の祭りは、慶安四年（一六五二）に「舟中の祈禱」が行われた頃を嚆矢とし、元禄時代（一六八八～一七〇四）以降の石材業の隆盛とともに船渡御の祭りに成長していったと考えられている。さらに、「国重要無形文化財指定 貴船まつり運営の手引書（付、貴船まつり例祭御神輿渡御次第書）」には、「貴船まつりは鹿島踊に始まり鹿島踊に終わる」といわれるとある。現在の盛大な祭りになったところには鹿島踊は祭りに欠かせない踊りになっていったことがわかる。しかし、現在の祭りの形成が元禄以降だと漠然としているだけで、祭りの歴史は明確ではない。その始まりについては不明といわ

ざるを得ない。

保存会の伝承では、真鶴の鹿島踊は絶えたことはなく、小田原市米神や同市石橋に伝えたといわれている。石橋では現在は踊られていない。また、人々の伝承では、この近隣では静岡県熱海市初島の鹿島踊が古態だという伝承があるようだ。確証はない。

八 所見

真鶴の祭りは、静岡県伊東市新井の船渡御の祭りと酷似している。祭りの形式をどちらかが学んだとみられる。双方の歴史から考察すると古いのは真鶴である。新井の鹿島踊は円形の踊りだけでサオの隊形はないが、真鶴も円形が主体でサオは移動のための準備隊形である。新井にもかつてはサオで移動する部分があったとも考えられる。さらに、初島はマルオドリとシカクオドリ（サオ）の繰り返しで、最後のシカクオドリで移動が始まる。この点においては真鶴と同形である。

ついで、花山車が出る祭りが伊東市川奈にある。川奈ではマンドウ（万燈）という。現在はないが、やはり船渡御をしていた。祭りの形態は真鶴と同形である。もちろん、鹿島踊も伝承されていた。しかし、これは宮本の天王社のまつりで踊られるものだった。ついで、マンドウは伊東市富戸でも伝承されている。一時は絶えたが最近復活した。富戸にも鹿島踊はある。

お互いに似たような祭りをしてきた近隣が、祭りの形態をどのように学んだのか興味は尽きないが、石材運搬関係者はすべからく江戸に向かいここで交流ができた。石材運搬に関わった人々の動向に注意が必要である。

なお、鹿島踊は「お天王さんから始まりお天王さんで終わる」と

伝えるように、天王信仰とは深い縁がある。いっぽう、貴船神社の祭りは「鹿島踊に始まり鹿島踊に終わる」といわれている。すると、天王さんの祭りの中に貴船神社の祭りを包含したことになる。貴船神社の旧祭日は旧六月一四、一五日で、本来これは天王さんの祭日である。

九 詞章

以下の詞章は、現在鹿島踊り保存会が使用している「真鶴鹿島唄」を基本資料とする。

本唄は長老のウタゲがうたい、脇唄はヒラオドリ（若い衆）がうたう。本唄の「ヲヘヤ」に入る前に「ソコソコソコサーンヤソレ、ソレ ハッ ソコヤレソコヤレオヤーサ」（△印）を全員で入れ、自転して踊る。

口上 千早ふる神々のいさめなれば、弥勒踊めでたい

本唄 一、マコトラヲヤアラーアノヲーナエエマアーナ

ツウウルウウミイーナアアトラランヲーエ

脇唄 そをらあみいろををーくうをーおふうねえーがあ、つうー、いたあと。

★一ノ〔註〕 誠やら真鶴港へ弥勒お船が着いたと。

本唄 二、△ヲヘヤンントヲヲモヲヲヘーニイイワアナエ

セエエトカアースウウガアアンノヲヲー

脇唄 そをらあなあかあ、えあわあ、かあ、かあしいまあ、のを、やあしいろ。

★二ノ〔註〕 艫舳には伊勢と春日の、中は鹿島の御社。

本唄 三、天ヂイークウーワアナエチイーカ

カアイーナアーナアチョンロヲーエ

脇唄 そをらあたあたあえあ、らあふう、ふうむうがあ、えきいーこをーいいる。

★三ノ〔註〕 天竺が近いな、其のた、たら踏むが聞える。

本唄 四、△ヲヘヤンソヲノタアアアアラアナエ

ニイドヲフウーミンヲーエ

脇唄 そをらあたあたあえあ、らたあえたあたあらあ、とをやあーつうにふうむ。

★四ノ〔註〕 其のた、ら二度踏み、たたたらたと八つに踏む。

本唄 五、カシマーデエーワアナエチイーゴ

ゴラガアヲードラルソランヲーエ

脇唄 そをらあごまをまあえあ、んどを、どを、でえ、わあ、ごをーまあをたあく。

★五ノ〔註〕 鹿島では稚児が踊る。護摩堂では護摩を焚く。

本唄 六、△ヲヘヤンソヲノゴラーマアーワアナアエ

ニイドヲタアアキイソラーロヲーエ

脇唄 そをら二本おーんごをえいとおとををーまあを、あたあく。

★六ノ〔註〕 其の護摩は、二度焚き候、二本つゝきと護摩を焚く。

本唄 七、十七イーガアナエサアアアエヲーリイテエー

脇唄 そをらあこがあえあ、ねえひいいひやあくうでえみいずうをくむ。

★七ノ〔註〕 十七が沢におりて黄金柄杓で水を汲む。

本唄 八、△ヲヘヤンミイズウクウーマアーバアナアエ

デエガアヌウーエルソラーンラーエ

脇唄　そをらあたあすう、、、きいかあ、、、かあけえさあ、え十うーををひいち。

★八ノ〔註〕水汲まば、袖が濡れる候を、襷（たすき）をかけさ十七。

本唄　九、カアマアクウーラアノヲナエゴラーシヨウ

シヨウウノヲニイーワアデーンエーエ

脇唄　そをらあ十三あえを、さあ、こをーこをひいめえがあしやあーくうをとる。

★九ノ〔註〕鎌倉の御所のお庭で、十三小姫が酌をとる。

本唄　十、△ヲヘヤンサアケヨラーリイモヲナエ

カアナアヨラーリイモラーンラーエ

脇唄　そをらあ十三あえお、さあ、こをーこをいめえがああめええにいしつう、、、く。

★十ノ〔註〕酒よりも肴（さかな）よりも十三小姫が目にし着く。

本唄　十一、メイニイツウーカアーバアナエツウーレ

レエテエゴラーザアレーンエーエ

脇唄　そをらあえ、え、、、えどをしいいしなが　あ、のをはあーてえ、、、まあで。

★十一ノ〔註〕目に着かば連れてござれ、江戸（えど）品川の果まで。

本唄　十二、◎天ヂイークウーノヲナエクウーモ

モヲノヲアーイイデーンエーエ

脇唄　そをらあ十五をえお、さお、お、えお、ひいめえ、があよをーねえを、まあく。

★十二ノ〔註〕天竺の雲の間で十五御姫が米を撒く。

本唄　十三、△ヲヘヤンソヲヲノヨラーネエーワアナエ

ニイドヲマアーキイソラーンローエ

脇唄　そをらあにいほおんおん、、、つう、、、えつうずうきいいいとをよををーねえ、、、をまあく。

★十三ノ〔註〕其の米は二度撒き候、二本続きと米を撒く。

参考文献

- ・吉川祐子　一九八八「相模湾西海岸の鹿島踊」『静岡県史研究』四
- ・貴船まつり推進本部　一九九七『国重要文化財指定　貴船まつり運営の手引書』
- ・永田衡吉　一九八七『神奈川県民俗芸能誌』錦正社

吉浜の鹿島踊よしはま かしまわらじ

星野 紘

一 名称

吉浜の鹿島踊

二 伝承地

神奈川県足柄下郡湯河原町吉浜

湯河原町は、相模湾に面した神奈川県西端に位置し（伊豆半島の付け根の熱海市に接している）、吉浜は町域の東部にある（素鷲神社の氏子域は、湯河原町内の吉浜区と中央区）。

三 期日・場所（行事次第）

八月一日の吉浜の素鷲神社（吉浜町一〇四七に鎮座）の例大祭の折りに演じられる（神社境内にて）。

この祭日は、昭和三〇年代に湯河原町内の七つの氏神社の祭礼を、当時の婦人会を中心とした生活改善運動の掛け声のもと、一勢にこの八月一日に執り行うこと（統一祭り）として以来の日取りで、その以前は、七月一三日（宵宮）、一四日（本祭）時に踊られていた。なお、江戸時代には素鷲神社は牛頭天王社と記されており、もとは六月一四日の祭礼であった。

鹿島踊りの回数は、今日、八月一日午前九時からの神社社殿内での祭典に引き続いての一度となっている。九時半過ぎから社殿下の境内広場で踊られる。

しかしながら、前吉浜素鷲神社鹿島踊保存会長の島袋文夫氏（一九三三年生まれ）と黄金柄杓役担当の杉山昇平氏（一九四六年生ま

れ）によれば、以前は、神社での踊り（これを出のカシマと言って、踊りの後半にこれから向かう方向に面して列の踊り隊形となった）の後、踊り一行は神輿の先頭に立って氏子域内巡りをした。行列後方にはそれぞれの町内の屋台（囃子）が続いた。必ず小道地藏堂で踊ることとしていた。この地藏堂は歴史的に由緒があり、元は星ヶ山辺の箱根に通ずる山伏道にあった寺堂で、伝えによれば頼朝が建てたものといい、貞享二年（一六八五）に現在地に移されたものという。神輿巡行の踊りは、この地藏堂の後、大下という屋号の家、湯河原貨物のところその他で踊り、海辺に出ても踊ったという。最後に神社に戻って来たが、神社の方向に向かっての踊りをモドリのカシマといい、神社に面して列の踊り隊形となった。なお、宵宮には踊ることはなかったという。この昔語りの内容と関連しているが、神社の説明書によれば、昔は仮殿を海岸に作って、例祭一週間前から御神輿をこれに奉安し、七日目の未明にお目ざめと称して鹿島踊りを奉納する神輿渡御を行っていたとのこと。また『湯河原町史』^①には、

みこしは「浜下り」を行い、花出は八本、引舞台に奴行列^{やつれりゆう}が二〇人、さらに鹿島踊りが続いた

と、かつての鹿島踊りを含めた浜下り行列の盛大さを記している。なお今日練習は祭礼の一カ月前頃から行われているとのこと。

四 伝承（運営）組織

当該鹿島踊りは、今日吉浜素鷲神社鹿島踊保存会によって継承されているが、それは、当該伝承が昭和二九年（一九五四）に神奈川

県の無形文化財に指定されて以降のことで、その以前は地域の若者組の重要行事として執り行われていた。前述の杉山氏によれば、氏の若い頃は、祭りには鹿島踊りか太鼓（屋台の囃子）のどちらかをやることになっていた。以前神輿が海辺に行って踊っていた頃には、若者は神輿を担がされ、また鹿島踊も踊らされるというように忙しかったという。ともあれ若者組として祭りに関わる伝承は今も失われている。保存会としてはできるだけ若年世代の加入を勧めているが、昨今はむずかしくなっているという（もつとも、二〇一三年時に高校生が四人保存会に加わっていた）。素鷲神社の氏子域は、吉浜区（新崎川の東側の地で、約六〇〇戸）と中央区（新崎川の西側の地で、一〇〇〇戸余り）で、東、中、西の三つの部落がある。

ここで参考までに、当該鹿島踊りのバックグラウンドである吉浜の地勢や行政区域の変遷、生業などの地域の概況を田中宣一氏の一文^②を借りて記しておきたい。

吉浜域の東南部は相模湾に接しており、海岸線が新崎川の近から東の方の真鶴半島のつけ根の福浦漁港まで約一キロメートルと続いている。土地はそこから北西方面にかけて傾斜地となつて広がっており、家屋は海岸に面して軒を連ねているものと、傾斜地の小さな谷にそつて奥の方に立ち並んでいるものがある。江戸時代後期には、この地は足柄下郡早川庄の土肥村であり、小田原藩領の地であった。明治二年（一八八九）の町村制施行の時に、隣村の鍛冶屋を合併して吉浜村大字吉浜となり、昭和十五年（一九四〇）に吉浜町大字吉浜となった。さらに昭和三〇年に近隣の町村と合併して湯河原町吉浜となった。当地は海に面しながらも漁業を専門とする家は少なかったし、平地もわずかなためか農家も少なかった。明治から大正にかけては多くの家では石屋稼業をしていた。石を切り出

す山を持つている親方のもとで石を切り出す石工、牛馬を使って石を運び出す人、石を舁船^{はしけ}で親船に運ぶ人、親船で京浜地方へ運送する人などがいた。かつて吉浜は石を運び出す船着き場として賑わっていたが、東海道線の駅が吉浜の地から離れた所に出来てからは昔の殷賑は影をひそめた。第二次大戦後は海水浴場として栄えて民宿を兼業する家が増えたが、近年、海水浴客は激減しているという。

五 行事・鹿島踊りの芸態

上記の三で記したように、素鷲神社の祭礼は今日本祭りだけとなり、またこの折りの鹿島踊も一回だけとなつてしまっている。そこで、以前七月一三日、一四日に祭礼が執り行われていた当時の祭りの準備からの行事次第や、これにともなう氏子域内の若者たちなどの様子を、再度、先に引用した田中氏の一文を借りて説明することとする。

七月に入ると青年たちは太鼓を出して囃子（筆者註：屋台での囃子のこと）の練習をしたり、鹿島踊りを習つたりして祭りにそなえた。一方祭典委員（各部落から二人ずつ）を中心として村寄り合いがもたれ、奉納芝居の相談などが行われた。七日には神輿を出して拝殿に据え、祭りの準備をした。かつては鳥居のもとにお仮屋を作り、そこへお下り^{くだ}と称して神輿をおろしたという^③。一三日には、青年が中心となつて各戸から一人ずつ出て幟を立てたり、芝居の舞台を作つたり、行灯の用意をしたりして準備を整えた。宵宮には青年たちが盛んに太鼓をたたいたりして囃したて賑やかに祝いをした。屋台は二台しかなかったもので、東と中の部落が一つ屋台にのぼり、西部落が一つのぼつて太鼓を叩いた。一四日には、朝早くのオメザメという踊りに続いて鹿島踊りを青年が踊り、参りに来た人々は芝居などを見て楽しんだ。一五日はハチハライで、青年は青

年会の宿で、戸主たちはそれぞれの組でごちそうを作って大いに飲み食いをした。祭典委員だけは神社の社務所に集まってハチハライをした。

鹿島踊りの芸態

次に平成二五年（二〇一三年）八月一日の祭礼で踊られた鹿島踊りの芸態について記す。まず午前九時から社殿の神前で祭典が執り行われ、その終了後、踊りの一同は社前で御神酒をいただき、その後下の境内広場に降りて踊りが始まった。午前九時四五分頃であったが、その踊り方は左の通りであった。

①まず菅笠に袴の装いで青竹を手にした警護役四人がまず踊り場の四隅に位置し、それぞれ塩を撒いた。

②続いて、白丁を着て烏帽子をかぶり、白足袋に草履の装いで、それぞれ黄金柄杓、日形、タタラ棒（月形）を手にした三人（三役）が、この順で一人ずつ左手にそれぞれの持ちものを捧げ持ちつつ、また右手の開き扇（紅白）を、背後から前方へゆっくりと仰ぎまわしながら入場し、大きく踊り場を右旋回すること三回。

③これに続いて、白鉢巻き、白丁着の腕まくり、白足袋草履の装いで、締め太鼓、鉦を手にした三人（太鼓一人に鉦二人）が踊り場中央に歩む。

④引き続き白丁、烏帽子、白足袋草履姿で左肩に幣束をかたね、右手に開き扇を手にした踊り手十九人（うち先行の五人が中踊り役で幣束、扇とも紅白色、他の一四人が外踊り役で幣束、扇とも白色）が三役同様に右手の扇をまわしながら入場して、右まわりに一順する。こうして、図I⁴のような三重の輪踊りの配置隊形を成す。

⑤続いて太鼓役がトントントン、トントントンと叩いた後、さらに続けて早打ちを二回、さらに続けて二回と打ち、これに鉦打ちの奏

打も加わり、その後太鼓がトントントン、トントントンと二回打たれて、他の一同は地面に腰を落としたままの体勢となつて、口上が述べられる。その口上とは次のようである。

チャーロ

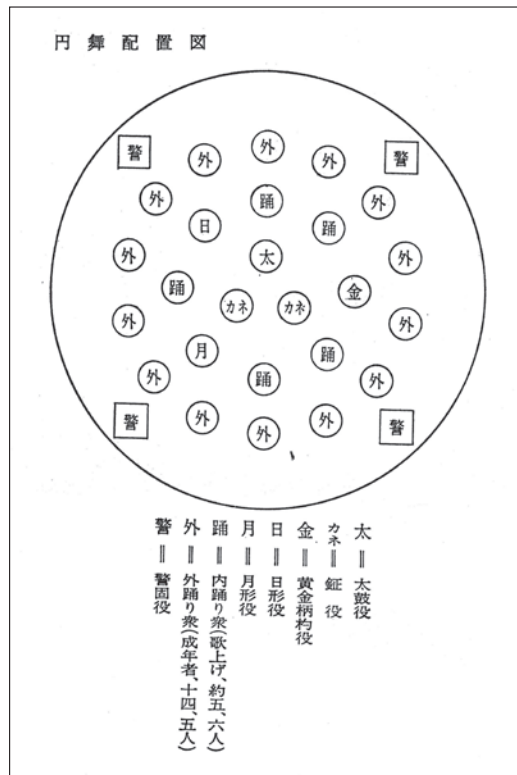
カミガミノイサ メーナーリー

ミロクオドリ

メーデーターヤー

右の一、三行目を三役、太鼓・鉦役、それに中踊り役のウタアゲのグループが述べ、二、四行目を外踊り役が述べるといように両者が分けあつて唱える。

⑥続いていよいよ踊り開始となる。まず、三役や踊り衆が立ち上がり、七の詞章（二三一～二三三頁）⁵の一番から六番の歌詞に合わせて踊られるが、前半の一番から三番の歌のところは一同輪になった形での右旋回の踊り（円舞とも称されている）であり、後半の四番から六番は



図I

楽器、持ち道具



1 楽器 太鼓（締め太鼓）。寸法 皮面直径35センチ、胴（高さ）14センチ



2 楽器 左は鉦。寸法 直径9センチ。右は撞木。



3 持ち道具 黄金柄杓（中央）（金銀五色の垂れや切り紙で飾り付けられている。数ヶ所穴の開いた紙製の円筒状のもの）。寸法 長さ110センチ、御幣部分の幅25センチ。日形（左）寸法：長さ110センチ、御幣部分の幅27センチ。タタラ棒（月形）（右）長さ86センチ、御幣部分の幅15センチ



4 持ち道具 紅白の幣束、白色の幣束。2点の寸法 長さ94センチ



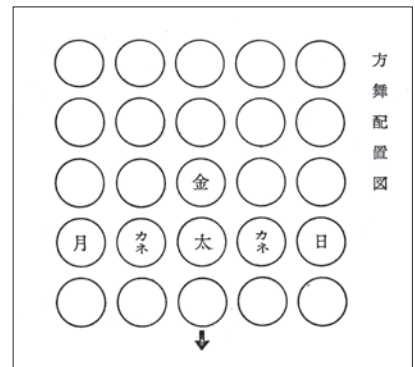
5 持ち道具 紅白の扇、白色の扇。2点の寸法 長さ29センチ、幅（広げた時）51センチ



6 持ち道具 警護の青竹
寸法 長さ130センチ

図Ⅱの隊形のような四角の五列
 になっての踊り（方舞とも称さ
 れている）である。

⑦まず前半の輪になっての踊り
 は次のようである。三重の輪の
 一番内心（一重目）に位置した
 太鼓と鉦役は右手のバチや撞木
 で楽器を叩きつつ所作するが、
 時に天空に向けて打ち（その時



図Ⅱ

太鼓役は太鼓を宙で翻転させて見せる）、また時に地面にかがみこ
 みながらも奏打し、この上下の双方を繰り返す。また三重の輪の二
 重目の三役と中踊り役、それに三重目（一番外側）の外踊り役の踊
 り連中の所作は、最初円の中心に面したまま、右足、左足、右足、
 左足と右旋回で歩を運び、続いて身を翻して円の外側向きとなって、
 足を交互に踏み替えつつ右旋回に歩を運びながら、扇を持つ右手と
 左肩の幣束の柄とを身体の前で交差させること二回。この円の内側
 向きと外側向きのそれぞれの所作を繰り返す。

⑧続いて後半の列になっての踊り（方舞）は、図Ⅱの隊形へと変わ
 り、一同社殿と反対方向（海側）に向いて踊る。左足、右足とその
 場で踏むことを二回繰り返した後、一度腰をおろして、また腰を伸
 ばして立ち上がり、左右の踏み変え足を前同様にする。このことを
 繰り返すが、途中で一瞬社殿向きとなるが、すぐまた海側に向き変
 えて踊り続け、そして終了した。踊りが済むと屋台の囃子がテンテ
 ンテンテン…と軽やかに打ちならされて、踊りの一同は境内から道
 路への石段を下りて行った。

なお右の⑦⑧の踊り所作の間、黄金柄杓役は、柄杓を振りながら

細かく刻んだヨネと称される切り紙（色紙）と麦殻の花を撒き散ら
 すことを繰り返す（これが見せ場である）。

また、⑥⑦⑧の踊りの間の、七の詞章（一三一―一三二頁）で示
 した歌詞の歌い方は、各行の上の句、例えば一番の歌詞の「誠やら
 鹿島の浦に」を⑤で記したウタアゲのグループが歌い、下の句の「弥
 勒お船がついたやら」を、外踊り役が歌うというように上の句と下
 の句を交互に分けて歌い合っている。

途中で掛けられる囃子詞アースレは、三役が掛け、最後のオヘヤ
 は全員での掛け声である。

一同の着衣の帯の右腰には三角形の物忌の白紙が挟み込まれている。

六 所見

如上の記述から解るように、昭和三〇年代の統一祭り化による簡
 略化変容の後遺症が大きかったように見受けられる。しかしながら、
 平成二五年調査時の保存会関係者の言葉から折角の伝承をなんとか
 継続して行きたいとの意気込みが感じられ、今後それがうまく実現
 されて行くことを祈りたいものである。

七 詞章

チヨロー

カミガミノイサ メーナーリー

ミロクオドリ

メーデーターヤー

一、マコートーオンヤ アーラー ナーアエカ アーアア アエ
 シー（アースーレ） マアーノオオオ ウウーウ ウウラーニ

コ オオオーソ オオオエー

ソリヤー ミイ イイロ オーオークウウウ オオオオオ
フーネ (アーソーレ) ネーガア ツウウウウウ ウウウウ
イーイ イイターエト

二、オハヤア トオーモ エエーニイ イーワーナーアエイ イイ
イイイー (アーソーレ) セートーカーア アアスーガ アア
アーノ オオオエー

ソリヤー ナアアアカ アーアーワアア カアア アーシ
ーマ (アーソーレ) マーノオ オオオオ オオオオ ヤア
ア アーシーロ

三、オハヤア テエン ジイイークウ ウーモナーアエク ウ
ウーウエモー (アーソーレ) モーノオオ アアアー アア
イーカ アアアーラ オオオエー

ソリヤー ジュウ ウウウウ ウーサン コオオオオ オー
ヒーノ (アーソーレ) メーガア ヨオオオオ オオオオ
ネーエ エーマエク

四、オハヤア ソーノ ヨーオオネー エーワーナーアエナ アア
ーア アエナ (アーソーレ) ニートオオオ マアア アア
ーキニソ オオオンロ オオオエー

ソリヤーミイ イイロオ オオクウウ ツウウウウ ウー
ツーキ (アーソーレ) キーノオ ヨオオオオ オオオオオ
ネーエエ エーマエク

五、オハヤア ジュウウヒイイーチイ イーガーナーアエサ ア
アアアエフ (アーソーレ) ワーニイイ オーオオオリーテ
エエエーヨ オオオエー

ソリヤー ユオオオ ガアア アーネエエ ビイイイイ

ーシャーク (アーソーレ) クーテエエ ミイイイイ イイ
イイヅウワ ウークエム

六、オハヤア ミイヅー クウメエーエーバーナーアエソ オオ
オオー (アーソーレ) デーガアア ヌウウウ レエーニ
ソ オオオンロ オオオオエー

ソリヤー タアアアスウ ウーキイイイ カアア アー
ケーサ (アーソーレ) アアイイ ジュウウウウ ウウウウ
ウーウ ウーヒーチ (オハヤ)

一、誠やら鹿島の浦に 弥勒お船がついたやら

二、ともえいは伊勢と春日の 中は鹿島の御社

三、天竺の雲のあいから 十三小姫が米を蒔

四、その米を何と蒔き候 弥勒つづきの米を蒔く

五、十七が沢に下りて 黄金びしゃくで水を汲む

六、水汲めば袖ぬれ候 たすきかけさえあいの十七

註

(1) 湯河原町町史編さん委員会 一九八七『湯河原町史 第三卷
通史編』湯河原町 三四七頁

(2) 田中宣一 一九七〇「第2節 年中行事」『県西の民俗 (1)』
神奈川県立博物館 所載 八一〜九三頁

(3) 神奈川県教育委員会編 二〇〇六『神奈川県の民俗芸能』七
二頁には、「古くは海岸に仮殿を造り、祭礼の七日前にはこ
こに神輿を奉安した」と記してある。

(4) 神奈川県教育委員会編 一九七三『神奈川県文化財図鑑 無
形文化財民俗資料編』一五七頁

- (5) 「吉浜素鷺神社鹿島踊り」(湯河原町教育委員会提供)
- (6) (4) に同じ 一五八頁

鍛冶屋^{かじや}の鹿島踊

吉川祐子

一 名称

鍛冶屋鹿島踊り

二 伝承地

神奈川県足柄下郡湯河原町鍛冶屋^{かじや}

三 期日・場所

期日 四月の第三土曜日と日曜日（本来は四月一九日と二〇日）。宵宮は午後一時から始まり、本日は昼前に青年会館から始まる。

場所 五郎神社境内および鍛冶屋地内で踊り、鹿島踊は神輿の渡御について移動する。

四 伝承（運営）組織

鍛冶屋鹿島踊り保存会が保存伝承責任者である。

鍛冶屋では郷土芸能保存会を結成している。これには、鹿島踊り保存会、お囃子保存会、浦安舞保存会がある。鹿島踊り保存会には「母の会」があり、衣装の着付けなどは母の会が担当する。鹿島踊り保存会の役員には代表と副代表がいて、副代表が会計を兼ねる。

五 行事・芸能内容

（一）次第

一九日（宵宮）は、神社でデハノオドリ（出端の踊り）をヒトオドリ（後述）し、区長の家でハンオドリ（後述）、そして午後九時

にオヤスミノオドリ（お休みの踊り）といって鍛冶屋会館で踊る。神輿は御旅所に泊まる。

二〇日（本日）はオメザメノカシマ（お目覚めの鹿島）といい、早朝五時頃に鍛冶屋会館でハンオドリする。氏は一旦帰宅して出直し、一時間会館で踊ると神輿は巡行に出る。鹿島踊もついで移動し、さくらんぼ公園と金山堂^{かなやまどう}で踊り、最後は神社に戻ってオサメノカシマ（納めの鹿島）をヒトオドリする。

（二）衣装・楽器・道具

1 衣装

外踊り 白い幣束を持って踊る踊り手をソトオドリ（外踊り）という。白張・白袴・白足袋・藁草履に烏帽子を被る。

役持ち 太鼓と鉦を三役という。これにコガネヒシヤク（黄金柄杓）とミカヅキ（三日月）を入れて役持ちといい、役持ちは白張・白袴・襷（両襷）・手甲（鈴がつく）・白足袋・藁草履に鉢巻きをする。

歌上げ 歌い手を歌上げ^{うたあ}という。これは二人が古くからの伝承だが、今は三人である。衣装はソトオドリと同じだが、烏帽子は被らず紐を首に掛けて烏帽子を後ろに垂らす。

警護 四人いて踊りが始まると踊りの四隅に立つ。行列時には先頭を歩く。袴を着て、菅笠（一文字笠）を被る。

2 楽器

小太鼓 小太鼓を一つ使う。締め太鼓で、紅白の小さな布団をつけて持つ。小太鼓の鼓面には赤・青・黒で巴紋が描かれている。桴は三二^{サンニ}ほどの長さで持つ部分には白い紙が巻かれる。

鉦 鉦を二つ使う。掌に納まる程の小さな摺鉦で、直径は一二センチ。紅白の小さな布団にのせる。撞木は木製で丁字型。全体に紅白のんだら巻きがしてある。かつての太鼓や鉦にはホウコンジンという小さな人形がつけられた。これは子育て祈願に上げられたものだがしだいに上がらなくなり、女子青年団が作ったこともある。今日ではそれもなくなった。

3 採り物

黄金柄杓 黄金柄杓という美しい採り物がある。太陽をあらわすという。上部に筒がつき、これに柄がついている。柄を振って踊る。筒は直径二四センチ、胴体の部分も同じ大きさで、筒のまわりを五色の切り紙で覆う。筒の口には蓋があり、これには「若」という文字が切り抜かれて、その穴からヨネ（切り紙）がこぼれるようになってくる。この筒に七〇センチくらいの柄がつく。柄の上部は金銀の紙を巻いて装飾し、金色の幣がつく。黄金柄杓は左手だけで持つて振るように扱う。

三日月 三日月を柄の先につけた採り物をミカヅキという。直径二〇センチくらいの三日月で、片面に金、もう片面に銀色の紙を貼る。柄はやはり七〇センチ程度。上部は金銀の紙を巻いて装飾されている。中程に金色の幣束が付き、柄の先は白い紙を回して水引で結ばれている。三日月も左手だけで持つて振るように扱う。

幣束 白い幣束と、金色の幣束がある。柄の先端には白い紙を巻き、紅白の水引をまわす。ソトオドリが白い幣束、歌上げは金色の幣束をもつ。

扇 日の丸扇を用いる。黄金柄杓と三日月、鉦太鼓以外が持つ。ささら 警護の道具である。約一五〇センチくらいの太い竹で、上部

に白い紙を蓋のように巻き下部は竹を裂く。これは四本用意する。

(三) 演目・芸態

隊形 鍛冶屋の鹿島踊は二五人の定数で踊る。マワリオドリとカクオドリの隊形変化がある。マワリオドリは円形の踊り、カクオドリは列形の踊りである。カクオドリの名称の起りは不明だが、おそらく四角踊りを意味するのだろう。しかし、これは一方方向を向く踊りで四角ではない（五人ずつ五列なので四角形にはなるが）。伝承者からも、カクオドリの並び方の説明は横五人の列が五本という意味で説明された。隊形の変化は次のようにおこなわれる。

「九 詞章」の「一から四番まではマワリオドリ、五番と六番はカクオドリ、七番と八番はふたたびマワリオドリとなり、最後の九番と十番はカクオドリとなる。神社で踊る場合の五番と六番のカクオドリは神社方向を見、九番と十番のカクオドリは移動する方向を見て踊り、十番が終わると太鼓を先頭にカクオドリの最後の列から「ハローヤ」の掛け声と鉦太鼓で移動が始まる。前列は移動が始まるまで踊り続ける。カクオドリは移動のための隊形ともいえる。

出端 踊りは次のように始まる。警護四人が、ササラ二本ずつを絡ませて踊り手を踊り場に誘導する。デハ（出端）といい、役持ちの「ハローヤ」の掛け声、そして「チャン／＼／＼ チャン／＼／＼ チャン チャン／＼／＼」の鉦太鼓にあわせて、閉扇で幣束の柄を打ちながら一列でゆっくり入場する。このとき鉦太鼓は頭上高く持ち上げて叩く。このリズムを三回ゆっくり繰り返すと急テンポになり、踊りの隊形を整える。鉦太鼓は三角形になるように中に入り、その周りに黄金柄杓と三日月、歌上げとソトオドリ数名、そして一番外側に残るソトオドリが円形になり三重円になる。役持ちは円心

を見て中腰になり、ソトオドリは扇を開いて「ハーイヤハー」で外側を向き、扇を胸の前で構えてしゃがむ。

口上 「九 詞章」にある口上(千早振るゝめでたや)をとる。
まず「千早振る」と歌上げがゆっくり唱え、「神々の諫めなれば」は道具持ちが急テンポで唱える。最後にソトオドリも参加して「弥勒おどりめでーたーや」とうたいながら立ち上がり、踊りが始まる。「まことやら鹿島の浦に」と歌上げがうたい、「ソーリヤー」からはソトオドリもうたいながら踊る。これを繰り返す。

踊りの手 マワリオドリのソトオドリは、幣束を左肩において右手の扇を回し、肩に置いたまま幣束の柄を高く上げると扇を幣束の柄にそって前に出し、再び扇を回して胸の前に持つてくる。左足を出しながら扇を下し、幣束は後ろからおろし前に高く上げ左肩に置く。扇は回しながら胸の前で止める。これを繰り返す。途中に「オドッコイサー ハー ソコソッコ ソコソッコ ソコエイヤ ソコエイ ソコエイ ソコヤレ ソコヤレ ソコヤレ (腰を曲げて一旦停まる) アー ソーリヤーハ」という掛け声が入る部分がある。このときには中を向いたり外を向いたり自転して踊る。マワリオドリは以上を繰り返す。

鉦太鼓の三役はひと節ごとにしゃがみ、立ち上がって鉦太鼓を頭上高く持ち上げて叩く。これを繰り返す。「ソコソッコ……」の時は、太鼓を回しながら華麗に叩く。鉦も同様で回しながら叩く。三役が集まる時は鉦が太鼓を支えるように集まる。なお、この「ソコソッコ……」は、歌の二・四・六・八・一〇番のうたい始めに入り、歌上げの歌と同時進行で踊りながらうたう。

黄金柄杓と三日月は左手で持ち、右手は軽く握り胸の前で構える。歌に合わせて振りながら踊る。歌上げは、黄金柄杓や三日月と同じ

中の円にいて、踊り手の移動に伴い右回りに移動しながらうたうが踊らない。幣束を左肩に担ぎ、開扇をもっている。

カクオドリの配置は、前の二列がソトオドリで、三列目が太鼓を中心に左右に鉦が、そして鉦の隣の外側に黄金柄杓と三日月が並ぶ。四列目は鉦太鼓の後ろに歌上げ、その隣はソトオドリ、最後の五列目はソトオドリである。

カクオドリのソトオドリは、幣束を左肩において両腕を伸縮しながら扇を回して踊り、両手をあげると次に幣束を肩から下ろして左下に両手とも振り、足をスキップするようにして担ぎ直す。これを繰り返す。「ソコソッコ……」では、幣束を肩に置いたまま幣束の柄を高く上げる所作が入る。しかも右回りに自転し、左回りに戻る。鉦太鼓も、それぞれ独立して並んだまま踊る。

なお、歌のすべてを踊ることをヒトオドリ(ひと踊り)という。これは神社で踊る時だけで、ほかはハンオドリ(半踊り)で一番から六番まで踊って終わる。

六 由来・信仰

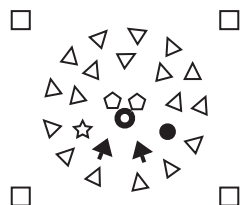
由来 鹿島踊に関する由来は伝わっていないが、大正生まれの人には熱海市初島から移ってきたという話が伝わっていた。前保存会長の世代に初島に確認にいったが、歌も踊りも全く異なり、「初島説は間違っていないか」という認識が前保存会長世代にはある。

信仰 子育ての民間祈願の傾向が強く、踊りの最中に警護に赤ん坊を抱いてもらって輪の中に入れてもらい、成長祈願をする。かつては、ホウコンジン(這う子人形力)といわれる小さな人形を作って太鼓や鉦の飾り物として奉納する習慣もあったが、裁縫が苦手な時代が来てこれは現在なくなった。しかし、赤ん坊を踊りの輪の中

鍛冶屋鹿島踊隊形図

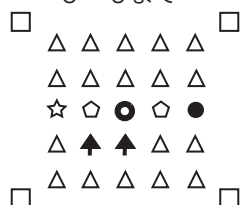
正面

1～4まで



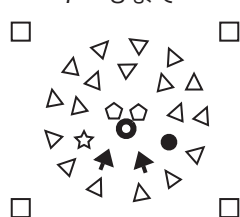
マワリオドリ

5～6まで

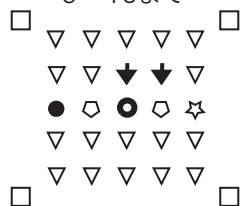


カクオドリ

7～8まで



9～10まで



記号

- 太鼓
- 鉦
- ☆ 黄金柄杓
- 三日月
- ▲ 歌上げ
- △ ソトオドリ
- 警護

作図：吉川祐子



1 採り物、太鼓と鉦



2 出端 警護に先導されてマワリオドリの隊形を作りながら踊り場に出る。



3 カクオドリ 途中で隊形が変化する。一方方向を向いた行進の形になる。

1 撮影 全日本郷土芸能協会

2、3 提供 湯河原町教育委員会

に入れてもらう祈願は続いている。真鶴ではこの赤ん坊にヨネをかけるが、当地ではそのようなことはしない。

五郎神社 天保一二年（一八四二）成立の『新編相模国風土記稿』によると、当地は吉浜村の分村で「土肥鍛冶屋村」と称した。古くは「止飛加地也牟良」と表記されたようである。小名に「さが沢・森下・河原・寺ノ下・山崎」がある。村の鎮守は五郎神社で、祭神は木像の鎌倉権五郎影政である。祭礼は九月廿日とあるが鹿島踊の記述はない。

神社の看板によると、現在の五郎神社の祭神は金山彦尊かなやまひこのみことと面足尊おもたるみことである。五郎神社は明治六年（一八七三）に村社となり、四四年に村内の森下の須賀神社を合祀して祭神が二柱となった。面足尊はその須賀神社の祭神である。金山彦尊祭祀の歴史は不明だが、祭祀の機会があるとすれば明治六年であろう。神社名を旧来のまま残し、祭神を金山彦尊に比定した。その経緯は不明だが、説明看板の「地名考」によれば、地名は鍛冶屋なのに貞享三年（一六八六）の差出帳にも鍛冶職在住の記録がないと、地名の表記「鍛冶屋」にこだわっている。これは村の代々の疑問で、こうした疑問が祭神を金山彦尊に変更させた理由ではないかとみられる。近世末期には、すでに鎌倉権五郎影政の存在は希薄になっていたのである。

七 変遷

かつては青年団が伝承していた。青年団には、一五才の正月一五日にワカイシオヤ（若い衆親、保証人）をつけて入団し、一六日の晩から四月の祭りまで踊りの稽古をした。はじめの三年間は全員が鹿島踊を習った。そのころは青年が一六〇人以上と大勢いたが、鹿島踊は二五人の定数制なので上手なものしか踊れなく、下手な青年

は一年間は祭りには踊らせてもらえなかった。厳しい時代だった。三年間鹿島踊を練習すると次は太鼓のお囃子にまわった。これは、青年が多く盛んな頃の様子である。

青年団には財産があった。これは行政の合併で失う例が多い。鍛冶屋も昭和三〇年（一九五五）の大合併（湯河原町・吉浜町・福浦村が合併）で失った。これは青年団の解散につながり、鹿島踊も途絶えることになった。この期間は一二、三年だった。昭和五〇年代半ばに富士吉田から文化会館のこけら落としに踊って欲しいと依頼があり、ここで踊ったのをきっかけに復活させた。しかし、経験者だけの復活で、年齢が上がるとともに人数が減っていった。ところが、サラリーマンになった青年は踊りに関心を示さない。そこで、「子どもに教えよう」と小学生に教えた。その頃は男児ばかりだったが今では女兒も参加している。一時保育園児の参加もあったが、世話が大変で小学生以上中学生までにした。太鼓が重いので小学生だけでは無理なのである。

なお、富士吉田からの依頼の事情は伝わらない。しかし、鍛冶屋には季節労働者として山梨県方面から出稼ぎにきていた人々がいた。山梨だけでなく、長野県や石川県、東北からも来て、一時は男女合わせて五〇〇人ほど働いていた。鍛冶屋は農村で漁村ではない。米の収穫時期から来て、雑穀や芋の収穫、みかんの収穫と九月半ばから一二月いっぱいまで仕事があった。その中から嫁に来る女性もいた。富士吉田から嫁いだ女性もかなりいるという。富士吉田市明見あきみには、道祖神祭のお神木にホウコウという人形（四角い赤い布を袋状に縫い、中に綿を入れて四隅をつまんで手足を表現し、別に作る頭の部分を取り付けたもの）を飾る習慣がある。これには子どもの成長祈願や子授けの信仰がある。鍛冶屋のホウコンジンは、ある

いはこうした出入りの人々から伝わった、子育てに関わる祈願の形なのかもしれない。

八 所見

当地の黄金柄杓と三日月は扇を持たない。これは鍛冶屋の特徴である。しかし、踊りを見ていると右手が手持ち無沙汰で、いつのまにか右手の扇が欠落したのではないかとみられる。そもそも、はじめから扇を持たないのならば、通常の利き手である右手に持たせたはずである。ところが、ほかの伝承地と同じく左手に持っている。これが扇が欠落した証ではないかとみられる。

保存会活動の流れの中で、保育園児の参加希望が親の方からあったというのには驚いた。この踊りには子育て祈願の民間信仰があり、ここから保育園児の参加が若い親達から望まれたのであろう。一時は鹿島踊の伝承に危うい時期もあったが、青年団よりもっと若い年齢から地区の祭りに参加し、園児まで踊らせたいと願う若い親達がいる限り、鍛冶屋の今後は安泰だとみられた。

九 詞章

千早振る 神々の諫めなれば 弥勒おどり めでたや

一、まことやら 鹿島の浦に

二、艫舳には 伊勢と春日の (ソーリヤー) 弥勒お舟が 着いたやら

三、天然の 雲の間で (ソーリヤー) 中は鹿島の御社

四、その米を 何んと散き候 (ソーリヤー) 十三小姫が 米を散く

五、十七が (ソーリヤー) 弥勒つゞきで 米を散く
澤に降りて

六、水汲めば (ソーリヤー) 黄金柄杓で 水を汲む
袖濡れ候

七、天然では (ソーリヤー) ちかいな女郎 襷掛け候 十七が

八、その踏鞴 (ソーリヤー) 踏鞴踏むが 聞ゆる
何んと踏み候

九、鹿島では (ソーリヤー) たたら たたら と八つに踏む
稚児が踊りに

十、その護摩を (ソーリヤー) 護摩堂では 護摩を焚く
何んと焚き候

(「鍛冶屋 五郎神社 鹿島踊り」パンフより)

参考文献

- ・永田衡吉 一九八七『神奈川県民俗芸能誌』錦正社
- ・吉川祐子 一九八八「相模湾西海岸の鹿島踊」『静岡県史研究』四

北川^{ほつかわ}の鹿島踊^{かしまわどり}

星野 紘

一 名称

北川の鹿島踊

二 伝承地

静岡県賀茂郡東伊豆町奈良本北川^{ならもと}

北川は伊豆半島東岸の中央部、天城山系の籌木山の東南麓の海岸に突き出た岩礁から、やや南西にカーブした湾沿いの、山が海に迫った狭い空き地に家並が集居している所だ。海上には伊豆大島が間近に見える。昭和三〇年代以降静養型温泉地として開発され、今日では高層のホテルの建物も立っていて観光関係に従事している人が多くなっている。しかし当地は良港であって、漁業の盛んな所であった。かつては定置網漁業に携わる人が多くいたとのこと。現在も三重県の水産会社がこの海岸から六〇〇メートル沖合に定置網を置いているが、地元関係者はほとんど勤めていないという。ただ毎朝六時に、水揚げした新鮮な魚を地元の旅館関係者に販売しているという。なおこの定置網はかつてネコサイと呼ばれていたが、それは根で作える、つまり岩とか石（根と呼ぶ）を綱に吊るす重みとして用いて作った漁網という意味だという。今日数えるほどの人がエビ網漁や潜水漁労を行っているが、多くはサラリーマン家庭となっているとのこと。現在集落の居住者一三八世帯のうち、鹿島踊に関わる昔からの世帯は六七、八戸で、一二〇人ほどに減ったという。だから鹿島踊の要員の二五人を集めるのに苦労するとのこと。

三 期日・場所

鹿島神社例祭

一〇月二六日（宵宮） 神社境内の庁屋にて

鹿島踊（一踊り）

二七日（本祭）

神社社殿前の中段の庭（カシマヤシキ）にて

鹿島踊（一踊り）

浜の舞台にて

鹿島踊（半踊り）

防波堤にて

鹿島踊（半踊り）

○行事次第

平成二五年の一〇月二六日（宵宮）の午後調査に北川を訪問したが、折悪しく台風が関東地方を直撃した日である。伊豆急行の北川駅から下方への坂道、北川の集落の全景が目に入るとともに、雨まじりの強風と磯伝いの岩礁に激しく波がくだけている様子を、祭りの進行具合が危ぶまれた。それでも鹿島神社（天文二二―一五四三年重修の歴史がある由）を訪れると、祭りの諸準備が風の風ぐのを待ちつつ予定の時刻を遅らせながら執り進められていたし、宵宮の海辺に降りての潮水による浄めが簡略化されるなど、悪影響を受けながらも例年通りに次第が進められていた。この日から翌日の本祭、それが終了後の、御船巡行イベント行事（昭和五三年（一九七八）に始まったという）を見学した。この間人々から聞いた嘆きは、小学生がたった四人になってしまったことであった。宵宮、本祭、その前の練習や諸準備のことを含めて以下に詳述する。

練習・準備

すでに一〇月二〇日より保存会の踊りの練習が行われていて（毎

晩一九時半集合で神社境内の庁屋にて、宵宮の前日の二五日には諸道具作りや神社の清掃をし、その夜の踊りの練習は持ち道具なしに、つまり、手踊り、スタイルで行ったという。というのは、整え終えた採り物など一切を神社社殿内に格納しておいたからだ。以前はこの日以降を「切り火」と称して、一同お宮で寝泊まりして、食事を家族とは別にとったりしていたが、今日その制度はなくなっている。

宵宮

今回は台風の影響で中止されたが、この日の午前中に次のようなことがなされると『東伊豆町の文化財』に記してある。図1のような浜の舞台を設置し（平台を敷く）、神棚にお神酒をささげるとともに鉦を立てる。なお聞いただと、鹿島神社の分霊を金銀幣にうつしてそこへ持って行っているという。鹿島神社の社殿の奥の院は座り神輿になっているので、そのご神幸は行われないのだという。なおこの浜の舞台の設置場所は、第二次大戦後に鹿島踊が中断されるに至る頃までは、「祓い場」と称される、今日の旅館山十の前の

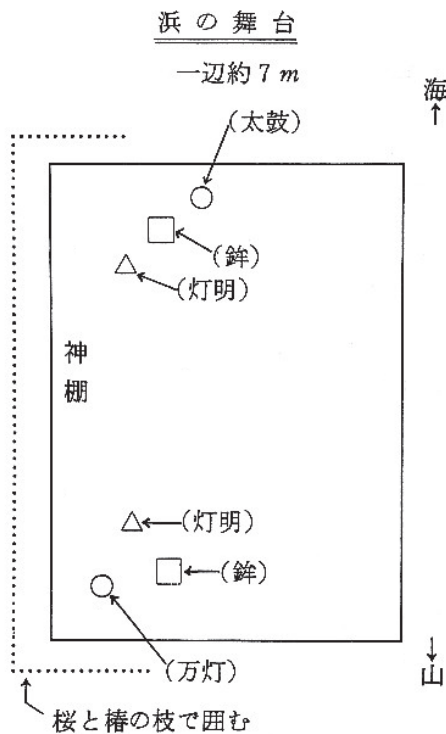


図1 浜の舞台（出典：『東伊豆町の文化財』）

駐車場辺の海岸にあったという。

夜に入って宵宮の次第となるが、神官による祭事はこの夜はない。鹿島踊保存会会員が一八時半頃に各自衣裳持参で庁屋に集まって来て、白装束に着替える。一九時頃一同キヨメに浜へ降りて行く予定であったが、波が高いということでそれを略し、若い踊り手が手桶に潮水（シヨバナ）を汲んで来て、一同庁屋の中でおもいおもいに浄めをした。その後社殿内におさめ置いてあるシメ、万灯の幣束、花、ヤナギなどを出して来て、それぞれを所定の場所に飾りつけた。そして一九時半頃ようやく庁屋の中で鹿島踊が始まった。建物の社殿寄りの所に切られている囲炉裏を正面として、踊り手一同は社殿の方に面して、その前面に紋付き羽織姿の鹿島踊保存会長、区長、総代などの幹部連が居並ぶ。そこで、一同、踊りの口上から鹿島踊歌（後に歌詞を掲載）の七番の詠唱とともに、太鼓の打音に合わせて、右手の扇を翻し、左手の持ち道具を弄して踊る（七番の歌詞を休憩を入れて二度繰り返す。これを一踊りという）。これを終えて、お神酒をまわし、手締めをしてこの日の次第を終わった。

本祭

この日は風もややおさまリ、陽もさしていた。午前八時頃神社境内に顔を出すと、関係者一同が神社の幟を鳥居の所に立てたりと諸準備にとりかかっていた。八時半過ぎ、庁屋で白装束に着替えた一同は、社殿内におさめてあった鉦や太鼓、杓（シヤアコ）、鏡（オカガミ）、幣束、扇などを取り出して行列をしたてて、神社下の方への坂道を降りて行き、海辺で潮水によるキヨメを行った。この時、一同懐紙を帯に挟むが、これ以降は口を慎むようにするという。なお、保存会幹部の人によれば、昔は朝五時頃に起きてキヨメに向かったそうで、その前の世代の時には、午前二時頃に起きて、六根シ

ヨウジヨウ！と互いに声を掛け合って浜に降りたとのこと。キョメが終わると一同は、浜の舞台へ行って踊りの隊形に位置して膝立姿勢となり、それぞれの持ち道具を受け取る。その後、列をなして神社へもどって行く（これを、お上りと称す）が、若い踊り手が潮水を撒きつつ先導する（鉦、太鼓、神主、鹿島踊保存会長、区長、杓持ちを先頭とした踊り手の一行などの順で進む）。神社に着くと社殿内で神主による祭典が始まるが、鹿島踊の一行は社殿前の中庭（カシマヤシキと呼称）の位置に留まり、神主からお祓いを受けた後、祭典と並行して踊りを始める（その芸態は以後の五に記載する）。彼等の踊りの最中に、神主は小宮や龍宮神社などを拝し続ける。これが終わると踊りの一行は浜の舞台へと降りて行く（これをお下りと称す）。その舞台で半踊り（口上と歌詞の一番から七番まで一回の踊り）をする。さらにこれが終わると一同は防波堤に向かい、その突端で半踊りを踊る。ところで、この防波堤での踊りは近年に始まったもので、昭和五九年（一九八四）発行の前掲の『東伊豆町の文化財』⁽²⁾によれば、その当時までは、神社下にある欄干宅（ネギヤ）で次のように踊られていたという。海辺の本踊の終了後、ネギヤに行き、一同座敷に入って踊りの隊形をなし、踊りの持ち道具等を床の間におさめ、懐紙を腰からはずして休息する。その後、切り火の分けた火をもとにもどすと言って赤飯などの食事を食べる。それが終わると懐紙を再度腰にはさんで半踊りを踊り、手締めをして一切を終了したという。また、かつてはネギヤ以外でもご祝儀をあげた船主の家などでも踊ったという。

ともあれ、先述の防波堤での踊りを終えて、一同は神社にもどり、庁屋で最後のお神酒のやりとりがあつて本年の鹿島踊の次第は終了した。

四 伝承（運営）組織

今日鹿島踊は保存会で伝承されていて、三七、八人の会員がいる（七〇才代が三人で、一番若い人が三三才）。昭和二八年（一九五三）頃にこの鹿島踊は中断したが、昭和四九年頃に復活をはかり、その時に保存会が結成されたのだ。その以前は集落のワカイ衆による伝承であった。大正八年（一九一九）生まれの女性がその様子を次のようにしたためていた。⁽³⁾

一〇月二〇日、呼びの太鼓が鳴り、一七才より二五才くらいの男子（これは昔人口の多かった時）が集まり、二六日の夜まで踊りの練習をする。この日に集まらない人は義務金というものを出す。二五日より、「キリ火」といってお宮で食事を食べ、浜で塩水で浄め祭に参加する。

現保存会幹部の七〇代の人たちによれば、昔の先輩達の指導の厳しかったワカイ衆宿を体験していて、一五才の正月にそこへ入会し、宿で寝泊まりして、学校へ掃除に行ったりしたものだという。当時はワカイ衆が多かったものだから、鹿島踊の踊り手に選ばれる条件もハードルが高かった。他所者はだめ、妻が妊娠している人はだめ、二五才以下の者でないとかだめというきまりであった。昨今は前述の通り人集めに苦労するが、平成二五年は、幸い北川に新たに住み着くようになった人とか、二人の新入保存会員が現れたという。経費面について言えば、保存会費は会員一人が年間六〇〇円で、祭りの運営費はご祝儀で賄っているとのこと（本祭の日午後の御船の集落内巡行にともない、五〇〇六〇万円の収入がある由。祭りに関わる費用全体を保存会が取り仕切っているとのこと）。

五 行事・芸能内容

(一) 芸能

相模湾西岸の神奈川県西部から静岡県伊豆半島の東海岸方面に、廃絶休止の地も含めて二二カ所の鹿島踊が伝承されていて、かつて永田衡吉氏は、『神奈川県民俗芸能誌』の中で、当地の湾岸の岩礁伝いに咲くスズランの如しと文学的形容辞を呈していた。それぞれの芸能表現は伝承地ごとの個別の民俗を反映して独自の展開を見せているものの、米が降る⁽⁵⁾といった、世の豊かなること、弥勒世の到来を願って歌い踊っていることは共通している。当該伝承群の南の端に位置しているのが北川の鹿島踊である。この芸能について以下に説明する。ひとつのものととして総合されたものであるが、便宜上歌と踊りとに分けて記述したい。

○鹿島踊の歌詞と歌い方

最初に北川の鹿島踊の歌の総体的な印象を記す。伊豆半島東海岸沿いの一〇カ所の歌の録音記録(CD)⁽⁵⁾を比べて聞いてみると、北川より北部の方の伝承が、若者たちによる、囃し言葉にメリハリのきいた男性合唱であるというのに対して、こちらはご詠歌調⁽⁶⁾とか、何かを訴えるような、哀調をたたえた合唱という感じがする。その歌い方であるが、まずはこの鹿島踊の歌詞を左に記す。⁽⁶⁾

(口上) 千早振る 神々のいさみなれば みろく踊りめでたや

- ① この祭りはめでたい祭り 神も喜ぶめでたや
世の中は萬劫祭り 彌勒御世が七統き
- ② 鹿島では稚児が踊り 御満堂では護摩を焚く
その護摩は何んと焚く 日本御祈禱と護摩を焚く
- ③ かんどりは四十九社 音に聞くさえ貴しや

いざさらば我らもいでて 神をすすめて拝めよ

- ④ 天竺の雲の間より 十三小女郎が米を蒔く
その米を何と蒔く 彌勒続けと米を蒔く

- ⑤ 十七が澤に降りて 黄金杓で水を汲む
水汲まば袖濡れ候 擲き掛けそろなよ姫

- ⑥ 天竺のちかいが女郎 踏鞠踏む音聞こゆ
踏鞠踏まば何んと踏む たたらたたらと八つ踏む

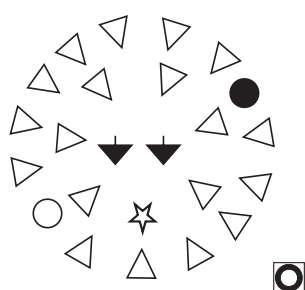
- ⑦ めでたいぞえ北川の浦に 彌勒船がついたぞえ
艦舳には伊勢と春日 中は鹿嶋の神社

次に鹿島踊り歌の歌い方について述べるが、その前に入江宣子女史が鹿島踊り歌の歌い方の基本的な性格を整理説明している⁽⁷⁾ので、それを紹介したい。ひとつは、「これは日本民謡によくあるタイプ、音頭一同形式の歌い方で、まずリーダーである音頭が歌い出し、その内大勢が旋律を続ける、あるいは掛け声挟む形」である。このことを北川の場合にあてはめると次のようになる。右に掲載した七番の歌詞はいずれも五七七五詩型の二行からなっているが、そのうち前半の歌い出しの五七の部分⁽⁸⁾を歌上げ役が、そして後半の七五部分⁽⁹⁾をその他の一同が分け合って歌っている。また、歌上げ役の歌詞の間には、その他一同が掛け声(囃子詞)を入れる箇所がある。もう一つ入江女史が整理してくれている点は、これが踊りにともなう歌であるための性格である。「歌の旋律は踊りの身体の動きに合わせて力強くゆつたりと、そして大変コブシの多い装飾に富んだ節回しであり、そのうえ、産み字や掛け声がたくさん盛り込まれていて、その語句はほとんど聞きとれない」。また「踊りの動きに伴う発声であるために、旋律は滑らかというより拍節ごとにアクセシ

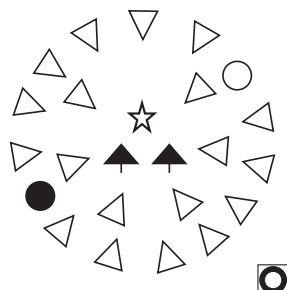
「北川鹿島踊」 踊り隊形図

正面

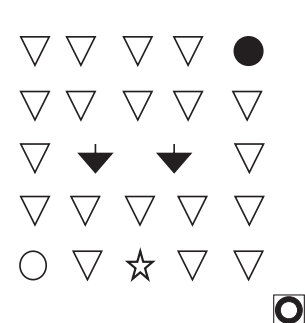
⑤
〈マオドリ3〉
ウタアゲはさらに
90度移動する。



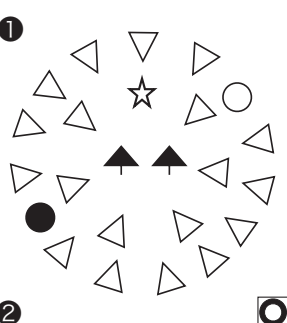
〈口上〉
腰を下ろして小声で歌
う口上を聞く。ウタアゲ
とシャクは向き合ってい
る。



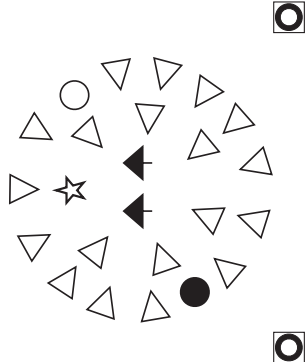
⑥
〈サオドリ3〉
シャクが正面に
飛び出すと、ふた
たびサオドリにな
る。



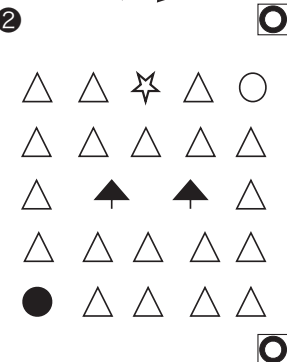
〈マオドリ1〉
立ち上がって右回
りに踊り始める。シャク
は中の円に移動し、ウ
タアゲは円心で歌う。



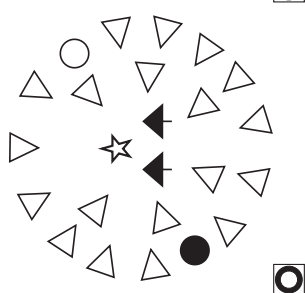
⑦
〈マオドリ4〉
ウタアゲはさらに
90度移動する。



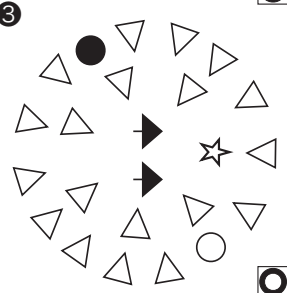
〈サオドリ1〉
ウタアゲは移動せず歌
う。シャクは右回りに踊
り、ウタアゲの後ろに來
ると踊り手の間を割って
正面に飛び出す。シャク
が飛び出すと、ほかの踊
り手は5列に並び替え
る。



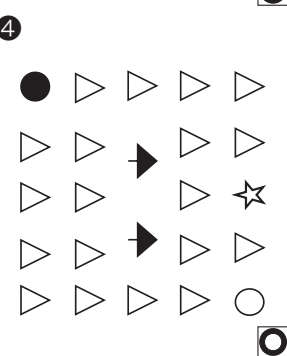
シャクが円心に
移動し、ひと区切
りとなる。



〈マオドリ2〉
マオドリに戻る。ウ
タアゲの向きは90度右
に移動。

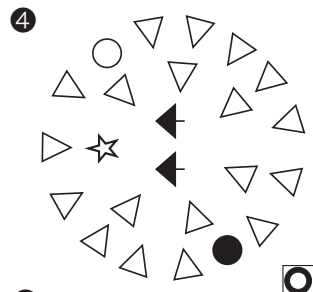


④
〈サオドリ2〉
ふたたびウタアゲの
向いている方向にシャ
クが飛び出す。④番の
歌の詞章の最後の「米
をまく」の詞に合わせて
シャクがヨネをまく。
く。

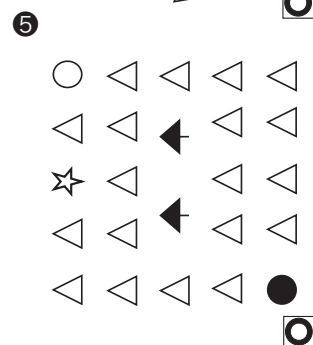


以上を「半踊り」という。しばらく休
憩後残る半分を踊る（左頁図）と「ひと
踊り」となる。太鼓は足のない台に据え
て、据え太鼓で叩く。

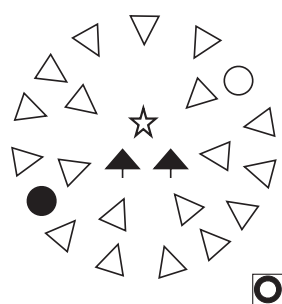
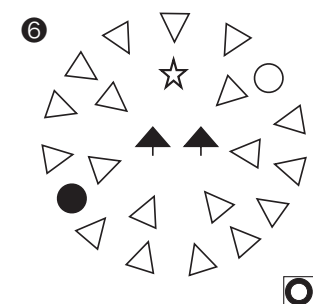
〈マオドリ7〉
歌上げの向きが90
度右へ移動する。



〈サオドリ6〉



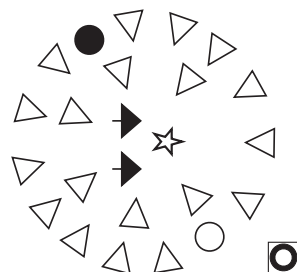
〈マオドリ8〉
歌上げが正面に
戻る。



- | | |
|--------|-----------|
| ☆ シャアコ | ○ オカガミ（金） |
| ⊙ 据え太鼓 | ● オカガミ（銀） |
| ▲ ウタアゲ | △ 踊り手（白幣） |

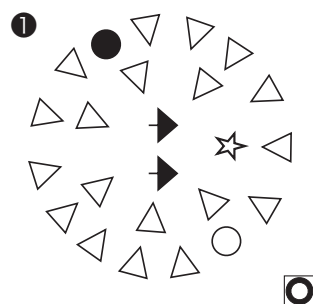
白抜き数字は歌の順番を示す。

正面

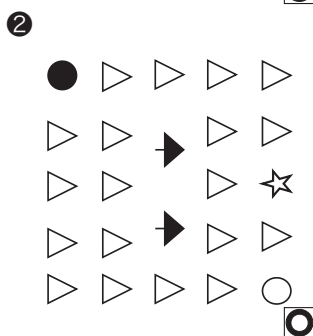


〈口上〉
初めの半踊りと
同じように繰り返
す。歌上げが正面
より90度右を向い
た位置から踊り始
める。

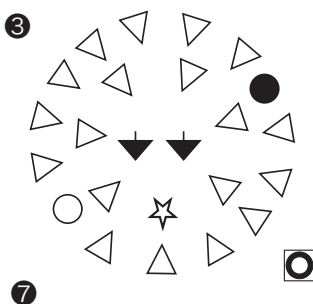
〈マオドリ5〉
シャクが中の円に移
動して踊り始める。



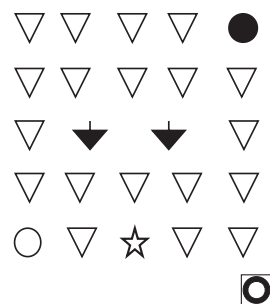
〈サオドリ4〉



〈マオドリ6〉
歌上げの向きが90
度右へ移動する。



〈サオドリ5〉



トがついてなかなかダイナミックである」と。右指摘のふたつめの方はここで説明しにくい、ひとつめの音頭一同形式の分担した歌い方について、北川の場合は左のようになっている。これは鹿島踊保存会長氏の提供してくれた資料で、それに記載されている①と②の歌詞の場合を示す（後の歌詞のところも同じように繰り返ししている）。なお歌詞の傍線の右側に、それが「歌上げ」なのか「一同」なのかの別と、それに「一同の掛け声」をも表記する。また（）内のカタカナ表記は掛け声を示している。アソコソコ以下の長い掛け声のところは、一同の中でもオカガミ役一人で掛ける部分と、一同多勢で掛ける部分との別があり、それも仕分けて表記する。シヤアコ役の掛け声も、②の歌詞の頭に一カ所入るのでそれも挿入する。

① この祭りは（アンエイ）たい祭りヨホホホエー

セーリヤ神も喜ぶめでたや

オンヤー世の中は（アソコソコソコソコソコエー）
オカガミのみの掛け声

ソコエイ シーメテ ソコエイ アソコソコエー ソコエイ

萬エ（アーエンヤ）萬却祭りヨホホホエー

セーリヤー彌勒御代が七続き

② シヤアコ掛け声シヤアコ役が①の歌詞でのマオドリから②の歌詞のサオドリに移動する際に発するもの

オンヤー鹿島では稚児（アンエイ）が踊りヨホホホエー

セーリヤー御満堂では護摩を焚く

オンヤーその護摩は（アソコソコソコソコソコ）
オカガミのみの掛け声

ソコエイ シーメテ ソコエイ アソコソコエー ソコエイ
何ん（アーエンヤ）と焚くヨホホホエー
セーリヤー日本御祈禱と護摩を焚く

○鹿島踊の踊り方

この踊りは、輪踊り（マオドリ）になったり、四角形になったり（サオドリ）と変化を見せながらの集団舞踊であるが、その踊り隊形の変化についての精細な記録図があるので、まずそれをここに引用したい。⁽⁸⁾ 踊りの人員は、シヤアコ（サオサキとも、黄金柄杓を手に持ち、紙花の米を散らして見せる者）一人、歌上げ二人、オカガミ（金と銀）二人、踊り手一九人、太鼓打ち一人の合計二五人である。

輪になって立て膝となった一同が扇を口元にあてて唱える口上、それに引き続きマオドリ、サオドリの隊形を交互にくり返して踊って行くが、基本的には歌詞の奇数番がマオドリ、偶数番がサオドリにあたる（ただし、後半の半踊りのところでは、歌詞の⑦番が先に四番目に入るのだからイレギュラーとなる）。

ところでマオドリは、右旋回の輪踊りであってなじみ多いものであるが、サオドリの方は例が少ない。その来歴について吉川祐子女史が次のように説明してくれている。⁽⁹⁾ 「神奈川県側は比較的移動形、静岡県側は固定形である。静岡県側も神奈川県に近い初島は移動形で、踊りに区切りがなく、踊りながら次の踊り場まで移動する。これは静岡県側では初島だけに残っているが、実際の踊りが列の隊形で終わる来宮神社や上多賀は、この行進の部分の名残をとどめるといえる。いっぽう固定形は、円形の踊りと列形の踊りを組み合わせ

て、隊形変化を楽しむ踊りとなっている。しかも、南へ行くほど列形の踊りに力が入り、向く方向を変えて美しく踊る。富戸と北川がそれで、崩れているが五方を向く」と。適切な解釈をしている。踊り行く方向に向かう時に列形となるのは自然で、集団舞踊は概して輪踊りの形になるのが一般的である。北川をふくめて伊豆半島の南へ行くにしたがって列となることが多くなり、おおむね五方を向くかたちをとっているという説明の背後には、あるいは五行思想との関わりを感じとっておられるのかもしれない。

踊り隊形は右の如くであるが、踊り手個々人は次のように所作している。足の動きは、外八の字なりに右足、左足、右足、左足と運び、そのあと右足を後へ引いて左もそれにそろえる。他方手の方は、この運びとともに右手の開き扇を目の前で右方から左方へ、そしてまた右方へともどし、右手首を返して扇面を前方へ押し出すようにする。この時同時に、左肩に担いだ白色幣の柄を前方に押し出す。この一連の動作の間に腰を落とし、中腰の姿勢を堅持することなどもめられるとのこと。

(二) 衣装・楽器・道具など

一同の衣装は白衣に白帯、白足袋に草鞋履き。
他、楽器、道具などは次頁参照のこと。

註

- (1) 東伊豆町文化財保護審議委員会編 一九八四『東伊豆町の文化財』東伊豆町教育委員会 三一頁
- (2) (1)の同著三一―三二頁
- (3) 東伊豆町文化協会編 二〇〇八『東伊豆町年中行事 ふるさ

とのならわし』一一八頁

- (4) 静岡県教育委員会編 二〇一一『東伊豆地方の鹿島踊』静岡県教育委員会の二五頁

- (5) (4)と同著の付録のCD。

- (6) 北川鹿島踊保存会長鳥澤元次氏所持の資料のコピー

- (7) (4)と同著の二一一―二二二頁

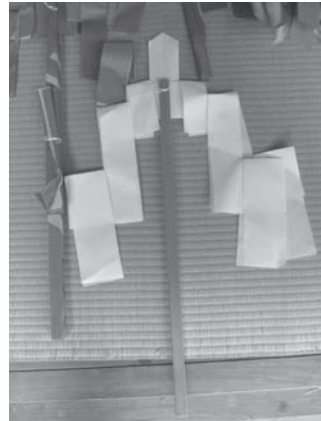
- (8) (4)と同著の一八〇―一八一頁

- (9) (4)と同著の二四頁

楽器・道具



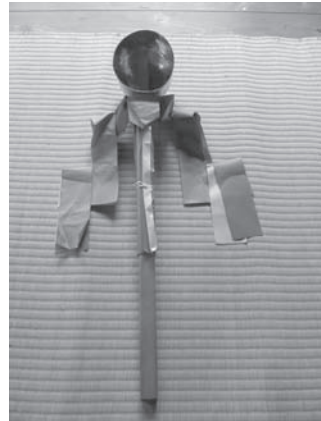
1 楽器 太鼓（締太鼓） 一つ（太鼓台とバチも）
寸法：太鼓直径35センチ、高さ15センチ、バチ49センチ



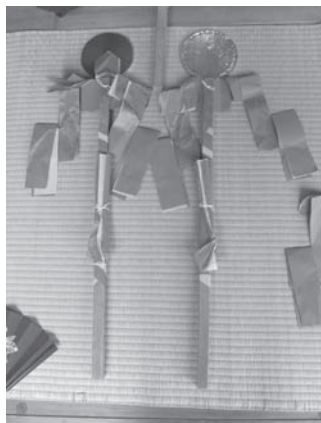
2 持ち道具（踊り手用）長柄の白色幣
寸法：全長72センチ



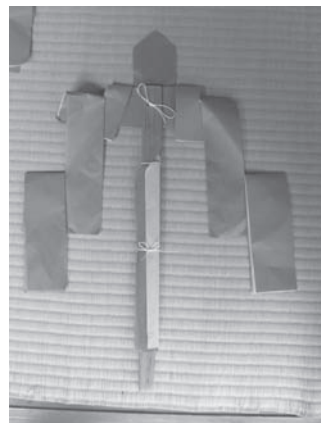
3 持ち道具（踊り手用）紫地に赤い牡丹模様の扇子
寸法：長さ27センチ



4 持ち道具（シャアコ役用）黄金柄杓（先端の器状の部分に金紙を貼り、赤、黄、緑の三色幣をつけ、柄の中間部を同じ三色の紙で巻く。器の中に紙片を入れて踊り最中にこれを振ってまき散らす）
寸法：全長65センチ、器部分 直径11センチ、高さ9.6センチ
扇子は前掲の踊り手のものに同じ



5 持ち道具（オカガミ役用）オカガミ（木製の先端に円形の飾りをつける。金のオカガミはこの円の表に金紙、裏に銀紙を貼る。銀の場合は逆）
寸法：全長80センチ、円部分 直径13.5センチ
扇子は前掲の踊り手のものに同じ



6 持ち道具（歌上げ用）幣束（幣束は、他の踊り手のものより柄が若干短く、シャアコやオカガミ同様の三色の幣をつけたもの）
寸法：全長48センチ
扇子は前掲の踊り手のものに同じ

「鹿島みろく」調査報告書作成委員会

※肩書職名は平成二五年度当時

調査報告書作成委員会名簿（敬省略）

委員長

星野 紘

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所
名誉研究員

委員

徳丸 亜木

筑波大学教授

中村 茂子

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所
名誉研究員

俵木 悟

成城大学准教授

吉川 祐子

常葉大学非常勤講師

城井 智子

公益社団法人全日本郷土芸能協会専務理事

笹生 昭

公益社団法人全日本郷土芸能協会常務理事

森下 春夫

公益社団法人全日本郷土芸能協会常務理事

事務局

小岩秀太郎

公益社団法人全日本郷土芸能協会事務局次長

調査報告書作成委員会開催日（会場（公社）全日本郷土芸能協会事務所）

第一回 平成二五年 七月二十九日（月）

第二回 平成二五年 九月三〇日（月）

第三回 平成二五年十二月二六日（木）

第四回 平成二六年 二月一四日（金）

執筆者（敬省略、五〇音順）

第二章

徳丸 亜木

第一章、第三章

中村 茂子

第一章、第三章

俵木 悟

第一章、第三章

星野 紘

第一章、第三章

吉川 祐子

現地調査実施日・調査員（調査実施日順）

吉浜の鹿島踊（神奈川県足柄下郡湯河原町）

平成二五年 八月一日（木）、平成二六年 一月二六日（日）

調査員 星野 紘、笹生 昭

記録員 勝又 国光（公社）全日本郷土芸能協会

洲崎のミノコオドリ（千葉県館山市）

平成二五年 八月二〇日（火）、八月二二日（水）、八月二二日（木）

調査員 俵木 悟、城井 智子

記録員 小岩秀太郎

小河内の鹿島踊（東京都西多摩郡奥多摩町）

平成二五年 九月 八日（日）、十一月一六日（土）

調査員 吉川 祐子、笹生 昭

記録員 小岩秀太郎

北川の鹿島踊（静岡県賀茂郡東伊豆町）

平成二五年一〇月二六日（土）、一〇月二七日（日）

調査員 星野 紘、森下 春夫
記録員 小岩秀太郎

大町のみろく〈茨城県鹿嶋市〉

平成二五年一月一日(金)
調査員 徳丸 亜木
記録員 小岩秀太郎

角内のお酒盛り〈茨城県鹿嶋市〉

平成二五年一月一日(金)
調査員 中村 茂子
記録員 笹生 昭

真鶴の鹿島踊〈神奈川県足柄下郡真鶴町〉

平成二五年一月四日(月)
調査員 吉川 祐子
記録員 小岩秀太郎

大野のみろく〈茨城県水戸市〉

平成二五年一月一〇日(日)、十一月二四日(日)
調査員 徳丸 亜木、中村 茂子
記録員 小岩秀太郎

成田のおどり花見〈千葉県成田市〉

平成二五年一月一二日(火)
調査員 星野 紘、城井 智子

記録員 小岩秀太郎

裏町のみろく〈茨城県小美玉市〉

平成二五年一月二四日(日)
調査員 中村 茂子
記録員 小岩秀太郎

徳島のみろく踊り〈茨城県潮来市〉

平成二五年一月八日(日)、
調査員 俵木 悟、笹生 昭
記録員 小岩秀太郎

川口のミノコオドリ〈千葉県南房総市〉

平成二六年 一月一八日(土)、一月一九日(日)
調査員 吉川 祐子、森下 春夫
記録員 小岩秀太郎

仲町のお酒盛り〈茨城県鹿嶋市〉

平成二六年 一月二五日(土)
調査員 徳丸 亜木、笹生 昭
記録員 小岩秀太郎

鍛冶屋の鹿島踊〈神奈川県足柄下郡湯河原町〉

平成二六年 一月二六日(日)
調査員 吉川 祐子
記録員 小岩秀太郎

協力・協力機関等（敬称略、順不同）

※肩書職名は平成二五年度当時

本調査にあたり、各芸能団体並びに各地区の方々には多大なるご協力を賜りました。ここに御礼を申し上げます。

協力

大町のみろく 大町のみろく会 大町区
角内のお酒盛り 角内区
仲町のお酒盛り 長寿会 仲町区
大野のみろく 大野のみろくばやし保存会 飛田邦夫（郷土史家）
裏町のみろく 裏町のみろく保存会
徳島のみろく踊り 徳島区 徳島区婦人会
洲崎のミノコオドリ 洲崎区 洲崎神社
川口のミノコオドリ 川口地区 東安房漁業協同組合
成田のおどり花見 本町女人講
小河内の鹿島踊 鹿島踊保存会
真鶴の鹿島踊 鹿島踊り保存会
吉浜の鹿島踊 吉浜素鷲神社鹿島踊保存会
鍛冶屋の鹿島踊 鍛冶屋鹿島踊り保存会
北川の鹿島踊 北川鹿嶋踊保存会

大津忠男（茨城県立歴史館）
大川悠子（元音楽教諭・鹿嶋市在住）
関山興道（元町のみろく保存会）
萩谷良太（土浦市立博物館）
入江宣子（東京都世田谷区生涯大学専任講師）

協力機関等

茨城県教育委員会
茨城県立歴史館
茨城県鹿嶋市教育委員会教育総務課
茨城県水戸市文化課埋蔵文化財センター
茨城県小美玉市生涯学習課
茨城県ひたちなか市教育委員会
茨城県潮来市教育委員会中央公民館生涯学習グループ
千葉県教育委員会
千葉県成田市教育委員会生涯学習課
千葉県館山市教育委員会生涯学習課
千葉県南房総市教育委員会生涯学習課
東京都奥多摩町教育委員会
東京都奥多摩水と緑のふれあい館
神奈川県真鶴町教育委員会生涯学習課
神奈川県湯河原町教育委員会社会教育課
静岡県教育委員会
静岡県東伊豆町教育委員会

平成二十五年 度

文化庁「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成推進事業」

「鹿島みろく」調査報告書

発行日 平成二十六年三月三十一日

発行 文化庁文化財部伝統文化課

〒一〇〇―八九五九 東京都千代田区霞が関三―二―二

作成 公益社団法人全日本郷土芸能協会

〒一〇七―〇〇五二 東京都港区赤坂六―七―十四―一〇二

印刷 江戸クリエート株式会社

